
魔剣伝～アリシア～

六星かのり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔剣伝〜アリシア〜

【Nコード】

N5109E

【作者名】

六星かのり

【あらすじ】

とある研究室らしき場所で目覚めた主人公アリシア。その姿は何故か生まれたままの姿だった、、辺りには無数の死体が転がる。そして、彼女が目にしたモノとは…。箱庭系連載小説の始まりです…。

第1章 「1. 失われた記憶」 (前書き)

初の投稿作品でえゝす^^

まだまだ下手ですが、日々精進して書き続けようと思っています。

感想や評価など書いてくれると、今後の活動にも力が入るのでお願いします^^

結構長くなる予定なので、飽きられないように頑張りますね^^w

w

第1章 「1. 失われた記憶」

血の臭いがする…。

見慣れぬ機械が所狭しと並ぶ一室。元は何かの研究室だったのだろう。嵐が過ぎ去った後の様に散々な状況に荒らされ、今は何の為に使われていたのかも分からない。

元は重要な書類だったであろう紙切れが床に飛散している。それに覆い被さる格好で生を奪われた人間達が横たわりピクリとも動くことはなかった。壁には無数の血痕が見事な死のデッサンを描き出し、破壊された機械類からは静寂を打ち破る警告音のオーケストラが響く。

部屋の丁度中央には筒状の機械が二つ。正確に言うなら、ガラスでできた筒が上下を機械で挟まれている形状だ。上部の機械からは三本のホースが天井へと連結されている。人一人ぐらいなら楽に入ることができる程の大きさで、そのうちの一基はガラスが割れ中に入っていたと思われる無色の液体が周りに流れ出していた。

横たわる人間達はここの研究員なのか、左肩に同じマークの刺繍が入った白衣を着ている。ある者は背中を、ある者は腕部を、そして頭部や胸部を斬りつけられ白は紅へと染められていた。

誰もが目を覆いたくなるような無情で醜い情景が、この場所がならんらかの事件の現場になったことを物語っている。その中でたった一人、明らかに他者とは異なる格好をした人物がいた。生まれたままの姿、全裸なのである。

長い黒髪と、程よく締まったボディライン。うつ伏せの状態で横たわるその存在は女だった。左肩から背中の中央部まで伸びた切り傷が痛々しい。何故全裸なのかは分からないが、彼女がこの事件における一被害者であることは紛れもない事実だろう。

ただ一つ他の犠牲者とは違う点がある。微かだが息をしているのだ。彼女の中の生命の炎は、風前の灯火ではあるが完全に消えてはいなかった。それどころか不可思議な現象が彼女の体で起こり始める。肩から背中への傷口がみるみるふさがっていくのだ。驚異的な治癒力の持ち主なのか：いや違う。普通の人間の成せる業ではない。そこに深い傷があったことも分からない程、綺麗に復元されるスベスベの皮膚。微弱だった息づかいも今では「ハアハア：」と荒々しくなっていた。

そして彼女の意識は徐々に現世へと引き戻され、ついには目を覚ます。はじめは差し込む部屋の明かりに眩しさを覚え、完全に瞼を開くことはできない。目の周りにありったけの力を送り、眉間や目尻に無数のシワが寄る。徐々に光にも慣れゆっくりゆっくりと瞼を開けていく。綺麗なスカイブルーの瞳が、今は目の前の真紅と交わり少し紫がかった色に写っていた。

「！！」

不意に目の前で倒れている男と視線がぶつかり、女は驚きのあまり声は出なかったが全身に電気が走る感覚を感じた。

白衣を着たその男はうつ伏せの状態で、大きく開かれた瞳は確実に彼女を捉えていた。絶望と困惑と驚愕が入り交じった表情で、彼女をじっと見つめたまま動くことはない。息絶えているのだと彼女

はすぐに理解した。

男から視線をそらし、ゆっくりと状態を上げつつ部屋中に視線を配る。

「ここは………?」

荒れに荒れた室内を一通り見渡し、そして呟く。ここが何処なのか、そして一体何が起きたのかいくら考えてみても彼女には分からなかった。更に深く考えを巡らせようと床に視線を下ろすと、二つの膨らみが露わになっていることに気がついた。

一瞬の沈黙の後、慌てて右腕で胸を隠す。別に隠す必要はないのだ、彼女の周りに生きている者はいないのだから。自分の中で芽生えた羞恥心がそうさせたのだろう。

再び部屋中に視線を配り、この恥ずかしい状況を打破できるモノを探す。ソレは案外近くにあった。先ほど視線があった男が着ている白衣を急いで剥ぎ取り、そして間髪入れずにそれを身にまとった。少し大きめではあったが、全身を隠すには丁度良いサイズだ。左胸に開いた穴とその周りの血痕が気になったが、今はそれを深く気にしている場合ではない。

急いでボタンを閉め始め、そしてすぐ手が止まった。彼女の目の前には筒状の機械が二つある。一つはガラスが割れ見るも無惨な有様だが、もう一方のガラスに見たことのない姿が映っているのだ。ガラスに映る姿は白衣を着た女で、胸元のボタンを閉めようと手をかけたままこちらを擬視している。それは彼女自身の姿だった。

閉めかけたボタンから手を離し、ガラスへと歩み寄る。そして写

り込む自分の顔に左手を当て数秒見つめた。

「これが…私…なの？」

自分の姿を見てもしっくり来ない。確かにここに存在しているのに、ここがどこで何が起きたのかも分からない。そう、彼女の記憶は失われているのだ…。

心の中に大きな動揺が生まれたのがはっきりとわかった。

自分であるはずのガラスに映る女の姿を見ても、それが自分であるという確信がない。最初その姿を見た時彼女は思った、知らない誰かがこっちを見ていると。切れ長の二重の瞼、高くもない鼻、小さな口の口…全てが初めて見る他人のソレだった。

だけどガラスに映る姿は、自分と同じ行動をとっている。心の中で生まれた言い知れぬ不安感が、やがては動揺へと変わっていく。

部屋中の機械達が奏でる警告音が、頭の中で何度も何度も響き渡り、動揺する心をあおった。

「一体どうなってるの？」

「私は誰？」

「ここは何処なの？」

女は繰り返し小さく呟いた。まるで動揺を打ち消す呪文のように、何度も何度も…。だが答えなど見つかるはずもなく、不安と動揺が肥大していき、そして弾けた。

ガッシャー————————————————————！！

室内に響く警告音の代わりに、ガラスの割れる音が部屋中を占領した。もちろん自然に割れたわけではない。女の拳がガラスを粉々に粉碎したのだ。彼女自身、なにが起きたのか分からないといった表情で、床に散らばっていくガラスの破片と拳とを交互に見た。赤い液体が、床へばたばたと垂れている。

幸いこちらの筒は空だったので、中から謎の液体が溢れ出すということはなかった。だが、その代わり彼女の拳からは紅の液体が滴り落ちていく。不思議なことに痛みは感じられなかった。ただただ血が溢れているのだ。それを女は呆然と見つめている。

何故か涙が溢れた。別に悲しいわけでも痛いわけでもない。自然と涙が溢れ、生暖かい感触が頬を伝っていく。どうしていいのかわからない、何も分らない、何も分りたくない…。そして女は急にその場にしゃがみ込み両手で顔を覆った。

涙が溢れないように思い切り瞼を閉じる。それでも頬を流れ落ちる涙は、しっかりと両手で拭った。そして彼女は気がついてしまう。先ほどまで血を滴らせていた右手には、傷など跡形も無くなっていることに。

「もういやだぁー！ー！ー！ー！ー！！！」

女は力の限りに叫び、そしてまた両手で顔を覆い泣きじゃくる。響き渡る機械の警告音、それが何を意味しているモノなのか分からない。両耳から飛び込み、真っ白になった頭の中で繰り返し反響する。

「うるさい！うるさい！うるさい！！」

涙を拭っていた両手は、今度は両耳に蓋をする役目に変わる。それでも尚、聞こえてくる耳障りな音の群れ。不安と動揺のメーターはレッドゾーンを振り切り、その刹那女はガバツッと立ち上がり目は閉じたままで再び絶叫した。

「もういい加減にしてよ！」

その時だった。女の後方の壁に施された扉が音もなく開き、部屋の中へと数人の人影が飛び込んで来た。だが、目を閉じ絶叫する彼女はその事には全く気づいていない。

部屋に訪れた招かれざる客人達は全部で6人。皆、完全武装を決め込んでいる。頭頂からつま先まで黒の防具で身を包み、全身を隠せるほどの大きな盾と、逆の手にはマシンガンタイプの銃を従えていた。武装兵士達の一人、たぶんこの部隊の隊長なのだろうその人物が、武器を持った手を軽く挙げ他のモノに合図を送った。一斉に銃口が女へと向けられる。そして、隊長の手が下ろされると同時に発砲が開始された。

ズバババババババ・・・！！！！

室内に響く発砲音。女はその音でやっと気がついたのだが、時すでに遅し。背中からまともに無数の鉛玉を喰らい、その反動で床に真っ正面から倒れ込んだ。それでも尚、執拗なまでの発砲がその後も数秒続けられる。

やがて部隊長と思われる人物が手を挙げる。それを機に発砲音は止んだ。床に倒れ込んだ女は全く動かない。着ている白衣には無数

の穴が開き、真っ赤に染まっていた。

部隊長が挙げた手を再び下げると、今度は見事に統率された動きで迅速に女へと歩を進める。そして一人が軽くしゃがみ、女の喉元へ指を当て脈を確認した。その後、部隊長の方に顔を向けコクリと一つ頷き脈がないという合図を送った。だがそれを黙視した部隊長はある事に気がつく。脈を確認した兵士の腹部から鋭い刃物のような物体が突き出ているのだ。

「!!!!」

声のない叫びを発する部隊長。非常事態を察した周りの兵士達は再び銃口を女へと向けた。その瞬間、機械の警告音をも打ち破るほどの絶叫が室内に響いた。

第二話へつづく…

第1章 「1. 失われた記憶」 (後書き)

この度「にほんブログ村」というサイトにて
ファンタジー部門にランキング登録を開始しました^^
ので、もしなかなか面白いじゃんと思ったら、
この下のタグをポチッと一回押していただけると有り難いです。
あなたの一票をお待ちしています^^w

「2. 危機襲来」

それから、どれぐらいの時間が経ったのだろうか…。

部屋中に溢れていた耳障りな警告音も、今は沈黙を決め込み、静寂な時間だけが流れていた。

「ハアハア・・・」

微かだが荒い息づかいが聞こえる。部屋の中央には、呆然と立ちつくす人影が一つ。力を失った両肩をガクリと落とし、少しうなだれ気味で床の一点を見つめたまま動こうとはしない。

無数の穴の開いた紅い白衣からは、色白の肌が露わになっていた。そう、その姿は紛れもなく鉛玉の餌食になった女だった。普通の人間なら、まず即死は免れないはずだった。だけど彼女は確実に生きている。それどころか、露出された肌に弾丸を受けた傷跡は…ない。

女の見つめる先には、黒い武装兵の一人がうつ伏せで倒れていた。それが部隊長なのか、一般兵なのかは今では分からない。個々の装備に、さほどの違いがあるわけでもなかった。仮に違いがあったのだとしても、防具の至る所がボロボロに引き裂かれ、相違点を見つけるのが困難な状況だからである。

女は兵士をじーっと見つめたまま、心ここにあらず。ただ立ちつくし、ただ肩で息をし、ただ一点に視点を合わせている。

未だ室内には、女の発する息づかいだけがあった。他に聞こえる音はない。だが、彼女にだけははっきりと聞こえていた。聞き慣れない女の声だ。女の頭の中でその声は、何度も何度も同じフレーズ

を繰り返す。

「アリシア！私を殺しなさい！」 「アリシア！私を殺しなさい！」
「アリシア！私を殺しなさい！」 「アリシア！私を殺しなさい！」

この声の主が誰なのか、そして何故殺さなくてはいけないのか、それは彼女には理解できない。だがその声が繰り返されるたび、胸の奥に締め付けられる様な痛みが広がっていった。

「それが私の名前なの？」

彼女は呟いた。謎の声の主に心当たりはないが、「アリシア」という言葉は何故か聞き覚えがあったからだ。生を失った兵士から視線をそらすことなく、彼女は更に自分探しに耽る。でもいくら考えたところでそれ以上分かるはずもないし、浮かんだ空論に確信を持つことはできない。徐々に思考回路は枝分かれを繰り返し、絡み合い、本筋を見失っていった。そして意識が現世へと戻っていく。

女の意識が完全に戻ると、黒い兵士達の悲惨なビジュアルが鮮明に飛び込んできた。ある者は斬りつけられ、ある者は何かに刺された傷がはっきりと見て取れた。そして、女はまた困惑する。

自分は確かに銃で撃たれ倒れ、この部屋にはこの兵士達と自分以外いなかったはず。撃たれた直後から今までの記憶はないが、気がついた時にはこの状況。そう考えると、兵士達の生を奪ったのは自分以外にあり得ないのだ。目の前の現実を、そう簡単に受け入れる事はできないが、否定することもまたできずにいた。

「でもどうやって？」

その疑問にたどり着くまで、さほど時間はかかなかった。白衣一枚で、武器になるようなモノは何一つ持っていない。たった一人の非力な女が、六人の武装兵を倒すなど至難の業だった。

この部屋で最初に意識を取り戻してから、一体どれだけ色々なことを考えただろう。自分は誰なのか、ここは何処なのか、一体何が起きているのか……。しかし何一つ答えを導き出せぬまま、時間だけが無情に過ぎていく。

兵士達の無惨な光景から目をそらし、改めて室内を一通り見渡ししてみる。そして、ある一点で視線が止まった。二つの筒状の機械、その傍らにモニターのようなものがあった。それはこの機械を操作するためのモニターなのだが、明らかに何かを写し出していた。何故かはわからないが、女はそのモニターが無性に気になった。そしてゆっくりと歩み寄り、画面を見る。

「あ……」

女は不意に声を漏らす。そこに写っているのは、先程ガラス越しに見た自分そっくりな女性の画像。そして、その女性についてのデータがその横に添えられている。「グラスファイバー・アリシア」「♀」「17歳」「A型」「角竜の月・3日生まれ」……彼女はそのデータをどんどん読み進めていった。そして、あるキーワードで視線が止まる。

そこにはこう書かれていた、「D・TYPE…魔剣」と…。

魔剣とは一体なんなのか、疑問がまた一つ増えた事により不安が大きくなる。だが逆に、自分の名前が分かったことにより、ほんの少しの安堵感も同時に覚えていた。

「私の名前がアリシア：」

軽く目を閉じ、そう呟いてみる。いまいちしくり来ないが、呟くことでそれが自分の名前なんだと心の奥に刷り込んでいくのだ。少しの安堵を求め、彼女は何度も心の中で呟く。

アリシア：アリシア：アリシア：アリシア：と。

名前を繰り返す度、ゆっくりと、そして確実に安堵が肥大していった。同時に、自分がアリシアなんだという実感が徐々に湧いてくる。心の中に一筋の光が差し込む様な、そんな不思議な感覚が体中を満たしていくようだ。

やがて数分の時が過ぎた。全ての不安を打ち消すことはできなかったが、今の彼女には十分な程の安らぎを得ていた。そして軽く目を開ける。目の前もモニターに写る女の画像も、今ではそれが自分なのだと思えるようになっていた。

「よし！」

パンツパンツと二度、両手で頬を叩き気合いを入れた。これから先、何が待っているのか分からない。それどころか過去を失っている自分に、未来が来るのかすらも定かではない。それでも先に進むという決心が痛みとなり、両頬を通じて体中に活力をみなぎらせていく。

サッと振り返り、先程黒兵士達が入って来た扉に目をやる。開いたままの扉の向こうには、長い廊下が続いていることが見て取れた。どうやらこの部屋は、廊下の突き当たりに位置しているのだろう。

一步、また一步と軽い足取りで、扉へと歩を進めた。

その途中、着ていた穴だらけの白衣をボタンも外さず、剥ぎ取るように勢いよく脱ぎ捨てて。女性特有の、見事な曲線を描く裸体が露わになった。そして軽くしゃがみ、先程とは別の研究者が着ている白衣を素早く脱がせる。幸いボタンは留まっていなかったので、容易に脱がせることができたのだ。

歩きながら両腕を通し、ボタンを上から順番に留めた。サイズは先程のよりは少し小さ目になってしまったが、恥ずかしさは免れていたので良しとする。研究員の隣には、黒兵士の持っていた大きな盾と銃が床に並んでいるのが見えた。だが、それを持つことはしないで扉へと向かう。持って行っても意味がないという、女の直感である。

数歩で扉へたどり着き、やがて前へと伸びる廊下の全貌が明らかになる。今居た部屋と同じく、壁の色は白。50メートルはあるだろうか、その先は突き当たりになっているようだ。ここからではよくわからないが、たぶんT字路になっているのだろう。壁に設置された案内板には、右と左に伸びる矢印が書かれ、その横に何やら小さく文字が書いてあるのが見えた。

現在地からT字路までの間に、左右3つづつ扉がある。それぞれの扉の横には、その部屋の名前が書かれているであろうプレート状のモノが貼られていた。

一步前へと足を踏み出す。右足が廊下の床へと触れ、ひやりとした感覚が足裏から伝わってきた。そしてまた一步、また一步と徐々に歩く速度を上げていく。自然と体勢が低くなっていることに、彼女自身気づいてはいないだろう。無意識に壁際に体を寄せ、歩くと

言うよりは何かに忍び寄るといった感じだった。

やがて、一番手前にあった部屋の辺りでピタリと足を止める。

右と左の扉は真向かいに位置していた。両方の扉のプレートを交互に見てみると、右の扉には「薬品庫」左の扉には「モニタールーム」と書かれている。当然双方とも中が気になった。特に左の部屋、モニタールームに興味をそそられていく。「もしかして、あの部屋で何があったのか分かるかもしれない…」と、彼女は誰に言うでもなくそう呟いた。

早速中に入ろうと、プレートの下に設置されていた扉の開閉ボタンに手をのばした。だが、すぐにそれをやめる。頭に浮かんだ推理が、心の中にためらいを生んだからだ。ひょっとして、この扉の向こうに誰かが待ち構えているかもしれない。その誰かは、モニター越しにあの部屋にいた私を監視していたはずだし、今もこの扉を開けようとしている姿を見ているはずだ。そう考えると、急に怖くなってきた。恐怖が津波の様に押し寄せてくる感覚が、女の全身に襲いかかる。ボタンへと伸びた左手が微かに震えているのが自分でもハッキリわかった。

次にどんな行動を取ればいいのか分からぬまま、まるで全身が凍り付いたかのように動けない。何をしたらところで、モニター越しに監視されているのだ。私を襲った黒兵士達も、この中にいる誰かが呼んだのかもしれない。そして、第二の兵士達に招集をかける事だって可能なはずだ。ここを離れ、別の場所に逃げたところで自分の行動は全て把握される。故に、逃げ場は無い。

様々な妄想が所狭しと重なり合い、頭の中が真っ黒になる。思考回路は容量を大きく超え、今にもオーバーヒートしてしまいそうだ

った。

パニック寸前の状態で、彼女がようやく取った行動。それは、天井を確認するために顔を上げるという至って単純な動きだった。扉の真上にあたる位置に、半球状の黒い物体が設置されている。それが監視用のカメラであることは間違いないだろう。頭に浮かんだ妄想が、現実になった瞬間、女は絶望した。

そして更に、女を絶望の底へと突き落とす現実が迫ってきた。廊下の先、たぶんT字路になっているだろうその先から複数の足音が聞こえてきたのだ。その音はどんどんこちらに近づいてくる。「兵士が…来る…」女はそう思った。そして、この部屋には誰かが居ると確信する。そいつが兵士を呼んだと思うのが、今の状況下では当然のことだ。

女の視線は、確実に廊下の先を捉えている。「もう、何をすることもできない。」と、迫り来る恐怖の音に覚悟を決めたまさにその時、彼女が最も驚くべき事態が起こった。モニタールームの扉が音もなく開いたのだ。慌てて部屋の中に視線を奪われ、更にそこに居た人物に心の全てを奪われる。

「なんで？」

目の前の予想もしなかった光景に、思わず彼女はそう口走っていた。

第三話へ続く…

「3. 魔剣の力」

監視員が座ると思われる椅子が3つ。扉の右奥に並んでいるが見えた。その脇には白衣を着た男が二人、うつ伏せの状態で倒れている。たぶん生きてはいないのだろう、全く動こうとはしない。

だが、そんな事は彼女にとってはどうでも良いことだった。今は床に並ぶ動かぬ存在よりも、中央の椅子で足を組み、こちらに微笑みを投げる『女』の存在に、視線と興味を釘付けにされているのだから。

その女は手招き一つして、アリシアを部屋の中へと誘う。女の特徴を挙げるのなら、それは一言で十分だろう。『生まれたままの姿』なのだ。だが、アリシアの「なんで？」という困惑の言葉は、女が裸だったからではない。そこにいるのは、紛れもなく『アリシア』そのものだったのだ。最初に目覚めた部屋でガラス越しに見た自分の姿が、今は目の前に存在している。

「何してるの？早く入りなよ。」

もう一人のアリシアと言うべきか、部屋の中の女が廊下で呆然とする彼女を急かす。アリシアの混乱した脳はその言葉を素直に受け入れ、「あゝはいゝ。」と一言。指示されるままに、急いで部屋へと飛び込んだ。それと同時に部屋の扉が閉まり、廊下の先から聞こえていた無数の足音は聞こえなくなる。

勢い任せて飛び込んだせいで、足がもつれ前のめりに倒れ込むアリシア。ドシンッという重い音が痛々しく部屋に響いた。

「ちょっとおゝ、大丈夫？ものすごい音だったけど…」

そう言って、もう一人のアリシアは急いで椅子から立ち上がり、倒れた彼女の元へ駆け寄る。そして、「もう…しっかりしてよ。」と、左手を差し出した。にも関わらず、倒れた張本人は沈黙を決め込んだまま身動き一つしない。少し困った表情を浮かべ、今度は両腕でしっかりとアリシアを抱え起こした。

女とは思えないほどの強い力で、あっさりと起こされてしまったアリシア。両頬が仄かに紅く染まっている。心の中で、恥ずかしさが後から後からこみ上げてきた。うつむいていた顔を上げ、目の前でクスクス笑う女の顔を見る。そこには、真っ直ぐにアリシアを見つめる両目があった。その刹那、更に体が硬直してしまう。

「あ…あの…あの…あの…」

動揺のあまり言葉がうまく出てこない。もう一人のアリシアは、「なゝゝゝに？」と意地悪めいた言葉を返した。

「あの…あの…あなたは…誰…ですか？」

「はあ？」

まさかそんな質問だとは思っていなかったらしく、もう一人のアリシアは笑っていた顔を少し強ばらせた。そして眉間に軽くシワを寄せ、少し困ったような表情で言う。

「急に変な事言い出さないでよ。私はアリシアに決まってるじゃない…」

その返答を聞き、アリシアは数秒考え込む。ガラス越しに見た自

分の顔。それは、間違いなく画像で確認したアリシアと同じだった。でも同じ顔がもう一つ、今は目の前に確実に存在している。もしかすると夢でも見てるんじゃないか？とも思ったが、あまりにもリアルすぎる。じゃあ…じゃあ…。

「じゃあ…私は…誰？」

その言葉は、意識もなしに口走った一言だった。頭に浮かんだ疑問が、そのまま音となって口から出たのだろう。

「何言ってるの？あなたもアリシアでしょ？」

「?..?..」

アリシアの頭の中は、疑問符でいっぱいになる。目の前の女の言っていることが、あまりにも現実離れしていて、言っている意味が全く理解できないのだ。そしてもう一人のアリシアは、笑顔を浮かべ更に言う。

「ねえ、同じ顔が二つ存在してたら変かな？ 私は、その現実を受け入れられるけど…」

あなたには無理なのかな？ そう続けようと思ったが、言葉になる事はなかった。何か思い出したかのように後ろを振り向き、壁にずらりと並ぶ監視用のモニターに目を配る。14インチのカラーモニターが縦横4個づつ、それぞれが違う場所を写しだしていた。

「ごめん。もう時間がないみたい。」

もう一人のアリシアが、モニターを見たまま言う。その声は、先程までの落ち着いた感じを失い少し慌てているようだった。

言葉を聞き、ふと我に返ったアリシアはモニターの方を見る。ある画面には廊下が、ある画面にはどこかの室内が写っている。その中で一つだけ動きのある画面があった。どこか見覚えのある部屋に、黒い何かが動いている。

「この部屋は？」

「あなたがさっきまで居た部屋だよ。」

同じ画面を見つめたまま、同じ顔の二人が会話を交わす。なんとも妙な光景だった。

「じゃあさっきの足音は、やっぱり…」

アリシアは、先程廊下で感じた恐怖感を思い出した。その部屋で動く黒いモノ、それは間違いなく黒兵士達だったのだ。廊下で聞いたあの足音の主、予想は見事的中したのである。

「私はもう行くね。次会った時はもう少しゆっくり話そ。」

そう言って、もう一人のアリシアは急いで身をひるがえし、早足で扉へと向かった。

「え？ちよっ…ちよっと待ってよ…」

モニターに夢中だったアリシアも急いで振り向き、さっぱり意味がわからないと言いたげな表情で言う。一体何処へ、何をしに行くのか聞きたかったが、もう一人のアリシアの一言がそれをさせなかった。「あ…そうだ！」と振り向き、アリシアに一礼を一つ。すぐに顔を上げにっこり微笑んでこう言った。

「さっきは助けてくれてありがとうね。」

アリシアには何の事なのかさっぱりだった。もう一人のアリシアとはこれが初対面のはず。それなのに、突然「ありがとう」と言われても戸惑ってしまうばかりだった

「やっぱり覚えてないんだ…。」

もう一人のアリシアはそう言って、少し悲しそうな顔でうつむいた。でも、すぐに顔を上げにっこり笑顔へ早変わり。

「まあ、しょうがないか…とりあえず、それが言いたくてこの部屋に呼んだんだよ。あいつらに邪魔されたらゆっくりお礼も言えないしね。」

彼女の言う「あいつら」とは、もちろん黒兵士の事だろう。「兵士達の事を、何か知っているのかな？」アリシアはそう思い、言葉が喉元まで出ていたが、それは見事に阻止されてしまった。

「じゃあ次会うときまでの宿題ね。もし、思い出してなかったら本気で怒るから。」

「う…うん」

アリシアは、出かけた言葉を飲み込みながら小さく頷く。そんな曖昧な二つ返事にも、もう一人のアリシアは満足気にうんうんと頷き、また扉の方へ体を向ける。「ヒントは、そのモニターにあるかもよ…」体は扉を向いたまま、小さく呟くように言った。そして数秒、何故か呆然と立ちつくす。「何をしてるんだろう？」アリシアは素直に思った。

「ああ…そうか！」

そう言って、三度振り返るもう一人のアリシア。照れくさそうにモニターの前にある机に視線を送る。

「ごめん、そこにある扉の開閉スイッチを押してくれるかなあ。」

その一言を聞き、アリシアは軽く笑ってしまった。ついさっきまで一方的に上位に立たれていた、そんな気がしていたのに、急にこのお願い。「案外ドジなんだ…でも、やっぱり私に似てるかも…」そう思ったら、可笑しさがどんどんこみ上げてくる。

笑うのを我慢しつつ、机の上に目をやるとそれらしきボタンがある。それを押すと、部屋の扉が音もなく開いた。もう一人のアリシアは、扉が完全に開くのを待ちきれないという感じで、「じゃねー♪」と言い残し、素早く出てってしまった。そうとう恥ずかしかったのか、それともただ急いでいただけなのか、それは定かではない。

アリシアはもう一度ボタンを押し、急いで扉を閉めた。何故そうしたのは自分でもハッキリとは分らない。アリシアの中にある、黒兵士達への恐怖心がそうさせたのだろう。そしてすぐモニターを確認した。画面を見つめるその目は、今は笑ってはいない。

そこには黒兵士達が数人、部屋を詮索している風景があった。

※

「おいおい、まじかよ…」

床に倒れ動かなくなった仲間の姿を見て男は驚愕する。フルフェイスの防具を被っているせいでその顔までは分らないが、声は青年のソレだった。

「新人！そこで突っ立ってないでさっさと動け、バカヤロウ…」

兵士の一人が、驚愕して立ちつくしている青年兵士に向かって激を飛ばした。こちらと同じく顔は見えないが、確実に青年よりは年上だろうという予想はつく。言われた青年兵士は一瞬ビクンッと体を震わせ、「すいません隊長！」そう言ってその辺りを調べ始める。

「しっかしこりゃ、見事なモンだなあ…」

散らばった書類を調べる青年兵士の横で、動かぬ仲間の傷跡を見つめる兵士が言う。この男もまた顔は確認できないが、4人いる兵士のうち一番の特徴を持っていた。一人だけずば抜けて体が大きいのだ。たぶん身長は2メートルは軽く超えているだろう。腕の太さは、一般男子の腰の太さ程はあった。

「確かにこの有様は、俺の想像を遙かに超えているかもしれないな。」

隊長が小さく呟く。そして部屋の隅で腕組みをしているもう一人

の兵士の方を見た。「どうだ？ いけそうか？」と、先程の青年への態度とは違い怒る訳でもなくそう質問を投げかけた。問われた兵士は組んだ腕を解き、ゆっくりと両手を肩のところまで挙げ「さあ？」と言いたげな態度を取る。そして顔を左右に振った。

「いくら私だって、蘇生は無理よ…」

それは女の声だった。よく見ると他の三人とは少しだけ防具の形状が違う。たぶん女性専用なのだろう、色も黒と言うよりは灰色に近い感じた。

「それに、これってアイツの力でしょう？」

女兵士はそう続けつつ、隊長の横に移動してまた腕組みを再開する。その横柄な態度は気にすることもなく、隊長は横たわる仲間の亡骸の頭の防具をそっと外した。そこに現れたのは、人間の顔では無い。基本は人間のパーツだが、額からは小さな角が伸びているのだ。

「ああ…あの情報は本物だったようだな。」

そう言って隊長は、角の下で閉じることを忘れた目に軽く手を重ね、優しく目を閉じさせた。部屋にはしばしの沈黙が流れる。仲間の素顔を目にして、他の三人は言葉を失っているのだ。

「間違いなくこれは、魔剣の力だ……」

沈黙を打ち破るように、隊長の言葉が三人の耳を突き刺した。

第四話へ続く…

「4. 対峙」(前書き)

何分、仕事を抱える身なので

ここからちよつと一話一話が短くなりますが・・・

ご理解の程よろしくお願いします。

「4. 対峙」

角の生えた兵士の傷口を撫でつつ、女兵士が隊長の言葉に続いた。

「じゃあ私たちも、こうなりかねないって事ね…。」

「そういう事だ。」

隊長と女兵士は、二度と目を開く事の無くなった角兵士を見つめる。「無に還る事無く果てた者達に黙祷…」隊長が言った。他の三人はその命に従い目を閉じ、心の中で哀悼の意を捧げる。そして、しばらくの静寂が部屋を包んだ。

数秒の後、隊長が頭を上げる。重いため息を一つつき、三人に視線を送りながら言った。

「よし！詮索を再開する。三人とも気をつけろ、魔剣はまだその辺りをうろついてるかもしれないからな！」

「わかったわ…」「了解。」「わかりました隊長。」隊長の号令の元、三人はまた部屋の詮索を始める。女兵士は二つ並ぶ筒状の機械を、がたいの良い兵士は他の仲間の遺体を、新人兵士は床に散らばる紙切れをそれぞれ調べた。

女兵士は床に散らばったガラスの破片を気にしつつ、ゆっくりと機械の周りをぐりと回る。そして正面だと思われる辺りに戻り、目の前にあるモニターに目をやった。そこには女の顔の画像と、詳細なデータが映し出されていた。

「隊長、ちょっとコレ見て…」

「ん？どうした、何かあったのかチュリア？」

女兵士の名を呼び、散らばるガラス片など気にすることもなく機械の方へと向かう隊長。ジャリジャリと音を立て、破片は更に粉々になっているのだろう。そして、女兵士チュリアが指し示すモニターを覗き込んだ。

「ほう…こいつが魔剣か…まさか女だとはな……………ん、アリシア…？どこかで聞いた名前だな…」

画面に軽く指を置き、なぞるようにしてデータを見る。名前や性別、身長や体重等々、上から順を追って見ていった。一通り目を通し、隊長は「うーん…」と軽く唸る。思い出せそうで思い出せない、なんとも嫌な感覚に襲われているのだ。チュリアは一つため息を漏らす。

「何変な事言ってるのよ隊長…アリシアって言えば…」

「おい…………あれ…………」

呆れ半分でチュリアが何かを言いかけた時、がたいの良い兵士の野太い声がそれを遮る。声のトーンは先程よりも低く、押し殺しながらもその場にいる他の三人には十分伝わる程の大きさだった。

「ギーハどうした？」

「何よ？」

そう疑問を投げつつ、がたいの良い兵士ギーハの方を見る隊長とチュリア。新人兵士も、書類をかき集める手を止めそちらを見る。

ギーハはしゃがんだ格好で、研究員の白衣を調べていたのだろう。片手に脱がせた白衣を持ち、もう一方の手には手帳のようなモノがあった。だが、その顔は扉の方を見ている。防具のせいで表情は見ることができないが、体は硬直していたように見えた。

ギーハの異変に気づき、扉の方を見る三人。そして、ほぼ同時に驚きの声を上げてしまう。扉の先、伸びる廊下の途中で、全裸の女がこちらを見て立っているのだ。遠くてよくは分らないが、その表情は確かに笑っているように見えた。

「おまえら、戦闘準備はいいか？」

視線はそのまま、隊長が小さな声で聞く。廊下にいる女の顔、それは今モニターで見た魔剣のソレだったからだ。戦いになる、そしてここで無惨な死を遂げるかもしれない、そう思いつつ体中に力を込めた。他の三人は軽く頷き、それぞれの位置で体を女の方へと向けた。目の前にいる女が魔剣である、三人はとっさにそう判断したからだ。

ゆっくりとゆっくりと部屋の方へ迫る魔剣の女。ある程度距離が詰まると、その表情が伺うことができた。口の端に笑みを浮かべ、獲物を見つけたかのようなぎらついた目が印象的である。

「あの男は何処？」

魔剣アリシアが口を開いた。部屋にいる四人は、その質問に答えることはない。沈黙を決め込み女の様子を伺っているのだ。脚の動きを、腕の動きを、表情の変化を、そして呼吸の変化を。女の一挙手一投足の全てに全身全霊をかけ注意を払う。

「なんで答えてくれないの？私あの男に用があるの。」

アリシアがそう言った頃には、もう部屋の入り口までたどり着いていた。部屋中に緊張が走る。兵士達は未だ動きを見せず、黙ったまま女の言葉に耳を向けた。だが、彼女の言う「あの男」とは誰なのか、兵士達には皆目検討もつかないのだ。

「一体、誰のことを言っているんだ？」

隊長が聞いた。長年戦いに身を置いてきた、熟練兵士の姿がそこにはある。緊張する心を悟られまいと、あくまでも冷静を装い憚然とした態度をとった。他の三人は未だ黙ったまま、アリシアを見つめ動くことができない。何か目には見えない強い力が、三人の体を羽交い締めに行っているようだ。

「誰って…」

アリシアは少し考えを巡らせた。誰と聞かれても名前など知らなかったし、何者なのかも分からない。だから、何とか兵士に男の特徴を伝えようと思い、頭に残る男の姿を思い浮かべたのだ。頭の中には、ただただ黒い服を着た姿だけが浮かぶだけ。その瞬間アリシアに隙が生まれる。そして激動するモノが一人。

「うおおおおおおお！！！！！！」

この瞬間を待っていたのか、雄々しい雄叫びに似た声を上げギーハが突っ込んだ。だが、手には武器になるような代物は持っていない。肉弾戦が彼の十八番なのだ。一気に距離を詰め、ありったけの力を込めた拳をお見舞いする。そして、ギーハの強烈な一撃は、確かにアリシアのみぞおちを捉えていた。

第五話へ続く…

「5. 力の差」

「ガハッ！」

アリシアは大きく口を開き、嗚咽と唾液を漏らした。喉の奥、腹の底から熱いモノがこみ上げてくるのがわかる。それほどに、みぞおちを捉えた鋭い突きは強烈だった。そして、腹部を両手でしっかり押さえ、その場に膝から崩れ落ちる。

みぞおちにめり込む拳を通して、確かな手応えを感じたギーハ。「ふんっ…」と、軽く鼻で笑い飛ばした。たぶんその一撃で、勝負がついたと思ったのだろう。目の前でふさぎ込む女の姿を見下ろし、更に攻撃を仕掛けようと体勢を整えた。「案外余裕だったな…」ギーハの脳裏には、もう勝利への確信しかなかった。でも彼は気づくべきだったのだ、仲間の兵士が6人、この部屋で殺されているのだという現実には。

次の瞬間、ギーハ以外の三人は知る事になる。魔剣の圧倒的な力を。そして、目の前の女が本当に魔剣アリシアなんだと言うことを。

「!!!!」

隊長は絶句する。チュリアと新米兵士に至っては、何が起きたのかわからないといった感じで呆然とその場に立ちつくしていた。三人が見つめる先、ギーハの背中からは鋭い刃物状のモノが突き出ている。紅い液体を刃先から滴らせ、ぬらりと怪しく光るソレこそが、アリシアが放った魔剣の一撃に違いなかったのだ。

三人の居るところからは、ギーハの大きな背中が邪魔になってア

リシアの姿を確認することはできない。ただ、ギーハだけは気がついていて。目の前でうずくまって居たはずの女が、今は自分の顔を見上げ冷徹な笑みを浮かべていることに。アリシアにとって先程の強烈な一撃は、ただ衝撃を受けただけ。痛みという感覚は、全く感じていないのである。

「邪魔しないで…」

ギーハを見上げ、口元に着いた唾液や胃液を左腕で拭いながらアリシアは言った。ここでやっと、ギーハは腹部に強烈な痛みを感じる。視線を更に下ろし自分の腹部に目をやると、そこには女の右手から伸びた刃物のようなモノが突き刺さっていた。傷口の辺りで、ドクドクと生命の鼓動が波打っているのを感じる。頭の中では、アリシアを軽く見ていた自分への後悔と悔しさが大きな渦となってグルグルと渦巻いるかのようだった。

「あの男の居場所を教えて。」

もう一度アリシアが聞く。だが、何度聞かれても、ギーハにも他の三人にも一体誰のことなのか分からなかった。苛立ちを覚え、魔剣アリシアが刃物へと変化した自分の右腕に力を込める度、ソレはズブズブとめり込んでいく。さらなる激痛がギーハを襲うが、力一杯口を塞ぎ声を漏らすことはなかった。

「神よ！オレに更なる罪をおおおお！！！」

そう大きく叫び、ギーハは自分に突き刺さるアリシアの右腕を両手で力強く握った。ありったけの力を込め、刃物を更に自分の肉体にめり込ませ動きを封じる作戦だ。それは、まさに自殺行為である。両手のグローブは切り裂かれ、手のひらにもろに痛みを感じた。

それでも、握った手を緩めることはない。

「今だクレイ！オマエの力を、この女に見せつけてやれええ！！」

後ろを振り向きつつ叫ぶギーハ。急に自分の名前を呼ばれ、新米兵士は一瞬怯んだ。だがすぐに気を引き締めなおし、隊長の方をちらりと見る。そして、隊長が軽く頷いたのを確認し、おもむろに左手の防具を取った。そこに現れたのはただの人間の手だったのだが、徐々にソレは形を変えていく。人の肌の感じを失い、徐々に鋼鉄化していくクレイの肌。最終的には銃口のような形に変化していた。それは、魔銃の力が覚醒した瞬間である。

素早く魔剣の姿を完全に捉えられる位置、ギーハの右後ろにあたる所まで移動し、生まれ変わった左手を目標へと向ける。その光景を静かに見守る隊長とチュリア。いつ自分に攻撃の矛先が向けられるかもしれない。そんな恐怖感が二人をそうさせているのだ。

銃口をアリシアへ向けたまま、クレイは少しためらっていた。ギーハの体が大きすぎて、自分の攻撃が当たってしまうのが目に見えていたからだ。そんなクレイの心の動揺を察したのか、隊長が激を飛ばす。

「ギーハに当たるなんて事考えるじゃねえ！！！！早く打ちやがれバカヤロウ！！！！」

その一言で、クレイの中の何かが弾けたようだった。そして、ギーハにも負けない程の雄叫びを上げ銃撃を開始したのだ。

ズババババババババツ…

無数の弾丸がアリシアを襲う。そういう光景を、クレイは頭の中でイメージしていた。だがそれは、単なる妄想へと変わる。アリシアが空いた左手を軽く薙と、そこから凄まじい衝撃波が生まれた。そして、いともたやすく弾丸を四散させたのだ。そのまま、衝撃は力を失うことなくクレイの元まで伸びる。

「！！」

不意をつかれたクレイは、それを交わすこともできず正面からまともにくらった。そして、一気に後ろの壁まで吹っ飛び体がめり込んだ。見ると防具の一部が粉々に碎け、素肌が露出している。

「だから邪魔しないでって言ってるでしょ！」

怒りを露わにしてアリシアが叫けぶ。

三人が視線を送る先で、クレイの体はドサリと音を立て床へと落ちる。その上に、ぱらぱらと壁の碎けた破片が降りかかった。壁にできた大きな窪みと亀裂が、衝撃の激しさを無言で語っている。「この部屋にまた一人、生を失ったモノが増えた…。」三人の残された兵士達は、動かなくなったクレイを見つめそう思う。そしてこのままでは確実に、自分たちもその仲間の一人になってしまうのだとも実感したのだった。

第六話へ続く…

「6、嘘」

おもむろに立ち上がるアリシア。その顔は先程までの笑顔を忘れ、怒りの形相に変わっていた。更に詳しく見てみると、こめかみの辺りには血管が浮き上がってるのが分かる。まさに憤怒しているのだ。

ギーハは、今は不動人と化したクレイから視線を戻し、目の前の魔剣を見据える。心の中で怒りが沸々と湧き上がり、そしてついには恐怖や痛みを凌駕していく。瞳孔の開かれた目で思い切りにらみをきかせ、グツと唇を噛み締めた。仲間を失った事実が、彼の正気を失わせているのだろう。

「テメェ!!! 絶対に許さねええぞおおおお!!!」

体中に怒りをみなぎらせ、両方の拳を力一杯握り、そして吠えた。まさに理性を失った野獣の如く、強烈な拳撃が炸裂する。アリシアはそれを交わそうともせず、真っ向からモロに食らうのだった。次々を繰り出される怒濤の攻撃。

「やめろギーハ! 無駄な力を使うな!」

隊長は叫んだ。しかし、我を見失ったギーハにはその声は届いては居ないらしく、更にアリシアを殴り続けた。部屋には肉を捉えた重く痛々しい音が、何度も何度も響く。

その光景にシビレを切らせた隊長がギーハの元へと走り、後ろから羽交い締めにして攻撃を止めようとした。だが、背中から突き出る刃物が邪魔で、うまく腕を押さえつけることができない。「攻撃をやめろ! コレは命令だ!」と叫びながら、なんとか腕を取ろうと

試行錯誤する。

「うるせええええ!!」

ギーハがそう叫ぶ刹那、右腕が制止するモノを捉えた。そして隊長の体は、まるで投げ捨てられた空き缶の様に宙を舞った。

「クレイはオマエのせいで、無に還る事ができなかったんだ…」

更に何度も何度も、重い拳がアリシアの体を貫いた。後方へ吹っ飛んだ隊長は何とか立ち上がり、「チュリア！」と女兵士の方を見た。何とかしろ、と彼はそう続けたかったのだろう。だがそれを察してか、チュリアは顔を左右に二度に振るだけだった。怒り狂ったギーハを止める術は無い。それは隊長自身にも分かっていることだった。

「だからオマエも無にはぜってえ還さねえええ!!!!」

三度アリシアに対し、ギーハの咆哮が轟く。一体何度目の拳撃だったのだろう。それはもう誰にも分からないが、ギーハの右手は急に空を貫いた。あまりに力任せに殴っていたため、ギーハの体勢がそのまま前のめりになってしまった。倒れ込みそうになるのを、何とか右足で踏みとどまる。一体何が起きたのか理解できず、目線をアリシアが居たところに移した。そこにはもう拳のターゲットの姿はない。

「なに……」

「ギーハ横だ！左横だ！！」

隊長の声がギーハの耳に届くのと同時に、ギーハは左にかぶりを

振った。だが、すでにその時には彼の運命は決まっていたのだろう。目の前でうつむく女が一人、おもむろに顔を上げぎらついた目で睨んだと思ったその刹那、ギーハに向かって飛んだ。

「だからああああ！邪魔するなって言っただろうがあああああ！デカブツウ！！！！」

そう言って、刃物と化した両腕を思い切り薙ぐアリシア。そのまま床に着地したかと思うと、くると向きを変え隊長とチュリアの元に駆けた。そのあまりの素早さに、二人は目を奪われ動くことはできない。

「うぎゃあああああ！！！！腕が…オレの腕がああああ！！！！」

アリシアが隊長の目の前に到達した丁度その時、ギーハの断末魔の叫びが部屋中に響いた。隊長はアリシアの肩越しにギーハの姿を確認する。あくまでも視線の隅では、魔剣の動きに注意を払ったままで。

失われた自分の両腕を見つめ叫ぶギーハ。その足下には、先程まで強烈な拳撃を繰り返していた二つの凶器が無惨に転がっている。先程の魔剣の斬撃が、ギーハの両腕を切り落としたのだ。「うがぁ！うがぁ！」と、もがき苦しむギーハはすでに戦意を喪失していた。

「あなたは知ってるよね？アイツの居場所…」

隊長はそう聞かれて、慌てて視線の全てをアリシアへと戻す。そして驚愕した。ボコボコに殴られてたはずの体には、その跡は何一つ残ってはいない。それに、あれだけの動きをした後にもかかわらず、息も乱れず汗もかいてはいないようだった。隊長は心の中で、

最期の刻を覚悟した。あまりにも力の差がありすぎる。恐怖を超越し、逆に冷静を取り戻す。

「アイツなら…さっき地下の書庫にいたぜ。」

隊長はそつと言った。もちろん嘘である。だがそれを感じかれまいと、必死で演技した。このままでは部隊は全滅してしまう、何とかこの窮地を逃れる方法。今の彼にできた、最大の危機回避行動、それがこの一言だった。

「本当？」

アリシアの疑いの眼差しが隊長の体を、そして心に突き刺さる。それでも彼は耐え、祈った、祈った、祈った。数秒の後、彼らが崇拝するアグニ神はその祈りを聞き入れたらしい。

「わかったわ。ありがとう…」

そう言ってきびすを返すアリシアの姿を見て、隊長はこの上ないほどの脱力感を感じた。それはチュリアもそうだったに違いない。扉へ向かうアリシアの両手は、見る見る人間のソレに戻っていく。そして、部屋を出て、廊下を進む魔剣の背中をただただ見つめる二人。危機は去った。

部屋には、ギーハの悲痛の叫びが何度も何度も響く。

第二章へ続く…

第2章 「7. 森」 (前書き)

ついに魔剣伝も第二章へ突入しました^^

これも全て読者の皆様の御陰です。

今後ともさらなるご支援のほどよろしくお願いします♪

第2章 「7. 森」

森がある。広大な深緑が目の前に広がっていた…。いや、目の前というよりは周りの全てが森。四方を見渡すとソレは、何処までも何処までも永遠に続いているようだった。

「ここは…何処？」

アリシアは頭に浮かんだ疑問をそのまま宙に投げかける。当たり前と言えば当たり前の行動だ。ついさっきまではモニタールームで画面を見ていたはずなのに、急に自分は森にいた。なんとも不思議な感覚が心に広がる。

ふと上を見上げると、木々の間からは暖かな木漏れ日が降り注いでいた。遠くの方からは鳥の鳴き声が聞こえ、。爽やかな風が一筋、アリシアの頬を撫で森の奥へと消えていく。なんとも心地の良い、穏やかな時間の流れが森全体を包んでいた。

研究室で初めて目覚めた時とは違い、今は不思議と不安はない。ここがどこなのかは全く分からないはずなのに、何故だろうか目の前の風景に懐かしさを感じる。いつそのこと、この場所にずっと居られればいいのに。心の中でそう願う。だがしかしその願いを嘲笑うかのように、平穏な風景が一変して牙をむいた。

ドゴオオオオオオン！

さほど遠くもない位置から轟音が聞こえた。それと同時に、地響きが足の裏から伝わる。アリシアは驚いて、すぐに音のした方を見る。バサバサバサつと無数の鳥が飛び立つ音が聞こえたかと思うと、

茂みの奥から突如影が飛び込んできた。しかもその影は1つ、2つではない。無数の動く影がどんどんこちらに向かって溢れてくる。一瞬の出来事にアリシアは後ろに仰け反り、そしてしりもちをついてしまった。目の前に迫る影、それは100を軽く超える動物達の群れだった。

鹿や猪。馬や猿達が一気にこちらへ向かって駆けてくる。そしてアリシアを避けるようにして二手に分かれ、そのまま進行方向へと駆け抜けていった。砂埃が舞う中、アリシアは何とか周りを伺う。気がつくとも周りの木々達は炎を従え、アリシアを見下ろしている。森一面が火の海だった。

モクモクと立ちこめる煙を避けるため、アリシアは口と鼻を右手で塞ぐ。そして急いで上体を起こし、先程の轟音がした方へと駆け出した。「何があったんだろう？」という興味本位が、彼女をそうさせたのだろう。場所も定かではない、未知の目的地に向けひたすら走った。

しばらくして、目の前が開けた場所にでる。それはちょっとした広場と言ふべきか、そこそこの広さがあった。その先には更に森が続いていた。アリシアの脚はそこで動きを止める。広場の中央にそびえる巨大なモノに目を奪われたからだ。ソレは、少しいびつではあるが剣の形をした。森の木々よりも遙かに高く、刃先を大地に突き刺さし不動の態を装っている。

その周りでは、この世のモノと思えない異形の者達が雄叫びを上げ、そびえる大剣に向けて攻撃を仕掛けていているように見えた。地上では、角の生えた者や機械的な姿をした者が接近戦を、上空を見れば鳥や竜の姿の者が悠々と風を切り裂き縦横無尽に宙を舞っていた。更には炎を身にまとった大男や、硬い岩石の巨人まで、その種類は

様々だった。ざっと数えて50を軽く超える程はいるだろう。大地で息絶える姿も含めれば、更にその数は二倍以上に跳ね上がる。

ドゴオオオオオオオオン！

再び、先程と同じ轟音がアリシアの聴覚を襲った。どうやら大砲を背中に従えた者が、大剣に向け砲撃しているらしい。キーンと耳鳴りが聞こえる。目の前で繰り広げられる光景に、アリシアはそれ以上微動だにできないでいた。ただただ、その戦いの行く様を見守るだけ、それだけで精一杯だったのである。

大剣に視線を戻すと、その周りには黒い霧のようなモノが発生し始めていた。よく見るとその霧は、地面に転がる異形の者の屍から発生している様にも見える。徐々に大剣の柄の部分に吸い込まれるように消えていき、やがて全て飲み込まれていた。そして次の瞬間大剣の刃の部分から無数の突起物が伸び、異形の者達の体を串刺しにしていた。そのあまりにも無惨な光景に、アリシアはとっさに目を閉じた。怖かったのだ。だが、異形の者達が叫ぶ断末魔の声が耳に届く。だから両耳も塞いだ。

やがて闇がやって来る。全てを覆う、深い漆黒の闇がアリシアを飲み込んだ。徐々に意識が薄れていく。なのに…、

グオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

ゴガアアアアアア！！

グエグエグエエエエエエエエ！！！！！！！！

耳を閉じたはずなのに、異形の者の断絶の声は何度も何度も頭に響く。どんどん膨らむ恐怖。「もう、何も聞きたくない！」そう強く念じた。でも、声はどんどん大きくなり、こだまのように心に反

響していく。

やがて声も恐怖も存在も、全ては闇の中に消えた…。

……………。

第八話へ続く…

「8. 招かれざる客」

……ガタン!!

「痛いっ!」

静まりかえった室内に、突然二つの音がほぼ同時に響いた。一つは、全身に電流が流れたようにビクンツと体が波打ち、豪快に膝を机に打ち付けた悲劇の音。もう一つは、眠りから目覚めたきつかけに対し、思わず出てしまった悲痛の声。音の主はアリシアだった。

呆然とする頭を働かせつつ、ゆっくりと顔と視線を巡らせ周りを確認する。縦横に並ぶ画面、机の上に無造作に置かれたファイル、ペン、ノート型のパソコン、食べかけのパン、銀色のコイン。床には無言を決め込む、白衣を着た亡骸達。そこは、意識を失う前と同じモニタールームだった。

もうろうとしていた意識もしだいに戻り、すぐに先程見た夢のことを思い出す。そして、一つの疑問が脳裏に浮かんた。

「今のは本当に夢だったのだろうか……?」

生まれた疑問は、不意に口から外へと転がり落ちる。

夢にしてはあまりにも現実味を帯びていた。異形のモノや大剣の存在は非現実のソレだったが、頬を撫でていった風の爽やかさや、木々を燃やす炎の熱さが、あまりにもリアルに感じ取れたのだ。

もしかして、自分の失くした記憶の一部なのかもしれないと思

った。だが、彼女はすぐにそれを拒む。「もしもアレが自分の過去だったとしても、あんな残酷な過去ならいらぬ。」そう思う心が強かったからである。

ふと、異形の者達の悲痛な叫び声が頭に響く。アリシアは頭を左右に力一杯振って、声と余韻を打ち消そうとした。だが、首が痛くなるだけで、何度振ってみても消えはしない。次第に、頭が脳が痺れてきた。それでも何度も振り続ける。徐々に疲れが来て、そして突然やめた。意味がないと理解したからだ。しかし、一つだけ変化があった。異形の者の声が、今は女の声に変わっている。

「アリシア！私を殺しなさい！」 「アリシア！私を殺しなさい！」

「アリシア！私を殺しなさい！」 「アリシア！私を殺しなさい！」

それは最初にいた部屋で聞いた、誰かも分からない女の声だった。どこか安らぎを感じる声。でも聞きたくはないセリフ……。アリシアの心は、更に掻き乱された。取り留めもなく涙が溢れてくる。別に悲しいわけではない。ただただ自然に溢れてくるのだ。もう自分ではどうしようもない、そんな気分になった。

深く沈んだ心の奥底で、何かが弾けた気がした。パチンと音が聞こえたようにも思えるほど、その感覚はハッキリと確かなモノだった。そして女の声は止み、また違う女の声が流れた。その声を聞いたとき、アリシアにはそれが誰の言葉なのかすぐに分かった。

「ヒントは、そのモニターにあるかもよ。」

そう、それはもう一人のアリシアが、この部屋を出る前に残した

言葉だったのだ。どういう事だろう？そう思ったら、急に初めて会った時の透き通るような笑顔が浮かぶ。突っ伏してしまった自分を、笑いながら助けてくれた彼女の顔。自分と全く同じ顔なのに、でも何かが違う。自分には無い何かを彼女は持っている、そういう不思議な感覚に包まれる。そして、気がつくとも涙は勝手に止まっていた。

「あ！」

突然何かを思い出したアリシアは、急いで目の前に並ぶ画面に目を配る。視線を移動しつつ彼女は思った。「いつの間に寝てしまったのだろうか？」と。そして記憶を巡らせる。もう一人のアリシアが体の大きな黒兵士に殴られ、刃物のように鋭くなった腕が大男の腹部を貫いた。そこまでの記憶はハッキリとある。血を滴らせ、ぬらりと怪しい光を放つその刃を見た瞬間、急に意識が飛んだように思える。

目的の部屋の画面を見ると、そこには動く人影は無かった。その代わりに、床に残る水溜まりのような大量の血が伺えた。あの後、ここで激しい戦いがあったのだと、ソレを見てすぐに理解するアリシア。「彼女はどうなったのかな？」すぐにそう思った。何故だか無性にあの笑顔が見たくなる。

残酷な紅い池からそつと目をそらすと、他のモニターで何かが動いているような気がした。「アリシア!？」とつさにそう思って、彼女は動きを感じた画面に視線を送る。確かにそこには人影が映っていた。しかし、残念ながらアリシアではなく、複数の黒兵士が歩く様が映っている。その数は3人。

そして黒い一行は、とある部屋の前で足を止め、一人が部屋の開閉ボタンに手を伸ばそうとしていた。何となくそれが何処なのか気

になって、画面の下に書かれた場所を示す文字を読む。

「え…!!?」

そこにはハッキリ、「モニタールーム前」とそう書かれていた。黒兵士が、この部屋に入ろうとしている。それを理解した時、今までにないほどの動揺がアリシアの心を占領した。自分の手が震えているのがハッキリと分かる。恐怖に支配された彼女はすぐに振り向き、扉の方を見た。その向こうにはあいづらがいる。

第九話へ続く…

「9. 自分の両手」(前書き)

アクセス数がついに1000を超えました^^
これもひとえに読んで下さる皆様の御陰です♪
今後もしどし更新していくので、
この先も六星かのりを見捨てないで^^;;;

「9. 自分の両手」

トクトクトクトク…と、筋肉や骨を伝って心臓の鼓動が聞こえてくる。今にも叫びだしそうな程、アリシアの心中はグチャグチャになっていた。膨張を続ける恐怖が口から飛び出し、床中を駆け回って狂気めいた乱舞を踊る。そういう奇怪な光景でさえも、今のアリシアなら楽しむ事ができるのかもしれない。それ程に心が狂乱しているのだ。

ただ、別に黒兵士が怖いわけではない。扉が開けばそこには敵がいて、確実に戦いになる。それが怖い。被害者になるよりも、加害者になってしまう事の方が、彼女にとって最大の恐れの対象だった。

「自分のこの両腕も、鋭い刃物に変化して人を傷つけてしまうかも…。」

「最悪の場合、相手の命を奪ってしまうよ。」

「あの部屋で、いきなり発砲してきた兵士達を殺したのは…私じゃない。」

「でも、あの場には自分しか居なかったよね。」

「無意識だったんだから、そこに罪はないと思う。」

「人を殺めてしまった事に、無意識だとか故意だとか関係ないよ。」

「罪は罪、それ以上でも以下でもないわ。」

「あなたは、あの人達をその手で殺したの。」

「もう逃げることはできないわ…。」

「逃げたい、逃げ出したいよ。」

「ねえアリシア、もう一度その手を差し伸べて私を助けて…。」

いくつもの言葉が頭の中で生まれ、やがて消えていく。そして、アリシアは気がついた。最初の部屋で黒兵士を殺したのは、確かに自分なんだという事に。もしかすると、始めから知っていたのかもしれない。でも、認めたくないという思いが、その事実を心の奥底に封印してしまっていたのだろう。「気がついた」のではなく、「認めた」と言った方がしっくり当てはまる。

一瞬扉から目を離し、自分の両手を見つめた。そこにあるのは、確かに人の手の形だ。でもそれは同時に、いつ凶器に変わってしまったかもしれない殺人鬼の手でもあった。

アリシアは強く強く両手を握りしめた。爪が手のひらに食い込むほど、力の限りに握りしめる。そして、痛みを感じてすぐに手を開いた。そこにはくっきりと爪痕が残り、内出血しているとところも見て取れる。その様はまさに人の手なのに、その手が憎くて、その手が嫌いで、そしてその手が怖い。

考えを巡らせている間に、どれだけの時間が過ぎたのかはわからない。それは数秒かもしれないし、数分もしくは数時間も経過しているのかもしれない。でも、アリシアは気がついた。ボタンを押せば簡単に開くはずの扉が、沈黙を決め込みなかなか開こうとはしな

い事に。確かに扉の前まで来ていたはずなのに、何かがおかしい。そう思って、また後ろのモニターを見た。

モニタールーム前を映した画面には、確かに黒兵士がいる。でも、先程とは明らかに様子が違っていた。部隊のリーダーらしき男が、他の二人になにやら手で指示を出しているように見えた。その後、リーダーと体の大きな兵士が廊下の先、T字路の方へと体を向け歩き始める。残った兵士は研究室の方へと向かった。

一体何が起きたのか、アリシアには全く持って理解不能。でも、なんとかこの場は助かったと言うことだけは把握できた。

「はあゝ…」

不意に、肺の中にため込んでいた息を一気に吐き出す。この部屋に黒兵士が来ると思った時から、今のこの瞬間まで、もしかしたら息をするのを忘れていたようだった。その後、何度か深呼吸を繰り返し、心臓も今では普通の早さに戻っている。脱力感が一気に訪れ、机の上に両腕をくの字に曲げ頭をその上にそっと置いた。一瞬目を閉じてしまいそうになったが、すぐに脳がそれを拒む信号を送る。またあの夢を見てしまうのが、この上なく恐ろしかったからだ。

視線の先にはファイルが一つ見える。何故だかそれが妙に気になり、ソレを手にとって顔のそばに持ってくる。ファイルの表紙に書かれた文字を、何となく目で追った。たぶんファイルの目的を表した言葉なんだろう。軽い気持ちで、その文字を言葉に出して呟いてみた。

「レ…プ…リ…カ…けん…きゅう…レポート……………」

何のことはない、ただの研究レポートだ……。

……いや、違う。そう思って、アリシアはすかさず顔を上げ、もう一度タイトルを読んでみる。

そこにはこう書かれていた。「模造人へレプリカ研究レポート」と…。

第十話に続く…

「9. 自分の両手」(後書き)

この度「にほんブログ村」というサイトにて
ファンタジー部門にランキング登録を開始しました^^
ので、もしなかなか面白いじゃんと思ったら、
この下のタグをポチッと一回押していただけると有り難いです。
あなたの一票をお待ちしています^^w

「10. コード」

模造とは、「もとのもの」に限りなく似せて造るという意味だ。別の言い方をするとフェイク、つまりは偽物と言うことになる。では、ここに書かれた「模造人」とは、もちろんもとになる人物に限りなく似せて造った人間、という事になるのだが…。

「これって…もしかして…私たちの事？」

気になったアリシアは、早速ファイルの表紙をめくってみた。その刹那、驚愕の表情へと移りゆく。

「魔剣アリシア模造人計画 第13案 研究レポート」

そこには、そうまざまざと書かれていたのだ。「やっぱり…。」と、小さなため息を吐きつつ、呟く。この時、全てを理解できたような気になった。初めてもう一人のアリシア出会った時は、それはもう驚いた。自分と全く同じ顔を持つ人物が、突然目の前に現れたからだ。でも、今は違う。自分と同じ顔がもう一人、いや、複数人いたとしても不思議なことではない。なぜなら、自分達はアリシアという人物に似せられて造られた、偽のアリシアなのだから…。

初めてもう一人のアリシアに会った時、彼女はこう言った。「私は、その現実を受け入れられるけど…」と。たぶん、彼女はこのファイルを見て知っていたのだろう。自分が偽物だという現実を。だから、二つの同じ顔の事実を受け入れられたに違いない。そう考えると、なんだか騙されたようで、悲しい気分になった。

彼女の前向きな言葉を聞いた時、自分と同じ姿なのに中身は違う。

心が強く、冷静なんだと思った。でも今の自分の目の前に、あの時の自分が現れたとしても、同じ事が言えるような気がする。彼女も自分も同じアリシア、中身にだって違いは無い。

色々な考えを巡らせつつ、アリシアは次々とページをめくっていく。本当はゆっくり読みたいという気持ちはあるのだが、たぶん専門用語だろう難しい言葉がいっぱいで、意味が全然わからない。だから、自分でも理解できそうなページを探す為に、ぱらぱらと読み進めて行く方法を取らざるを得なかった。

途中何度か手を止め、視線を巡らせてみる。そして分かる言葉だけを繋げていく。「アリシア」「魔剣」「命」「感情」「罪」「罰」「病気」「過去」等々。それらのピースをはめたところで、頭のパズルは完成するはずもない。まだ、その枠すらもできていないといった状況だ。

そしてまた、パラパラページをめくっては言葉を拾う。その作業を繰り返す。ついには最後のページに到達していた。一通り読んだのに、全く持って意味が分からない。最後のページに視線を落としつつ、左手の親指と人差し指で下唇を軽く挟む。そして、ある部分で視線が止まった。ページの一番外、このレポートの最後に書かれた文字。他の部分は全て機械的な文字なのに対し、そこだけは手書きだったのだ。たぶん焦って書いたんだろう。あまりに見事な走り書きのせいで、かなり読みづらかったが、そこにはこう書かれている。

「第13案 最終研究資料映像 コード8934771」

乱雑に書かれたその文字を見た時、ふとあの言葉がアリシアの頭をよぎった。

「ヒントは、そのモニターにあるかもよ。」

何故だかは分からない。だけど、映像と書かれているのだから、どうにかしたらその研究風景を見る事ができる。そして、その映像にこそヒントが隠されているに違いない。アリシアはそう思った。思ったけど、一体どうしたら映像が見れるのかが分からなかった。もうすぐそこまでゴールは迫っているはずなのに、次の一步が踏み出せない。もどかしい気持ちで、心はいっぱいになった。

焦る心が視線を動かし、もう一度辺りを、部屋の至る所を見渡し
てみる。床の亡骸、モニター、ペン、銀色のコイン、ノート型のパ
ソコン…

「あ…」

何かに気づき、何かに引き寄せられるように。アリシアは椅子を
滑らせ、ノート型のパソコンの前に移動した。その画面には、たっ
た一文字だけ「コード」と映し出されていた。その文字の横では、
何かを入力してくださいと言わんばかりに、小さな縦棒がチカチカ
と点滅している。

「これだ!」

思わず叫び、すぐにファイルを手に取り最後のページを見た。「
8934771」ゆっくりと、間違えないように慎重に指を動かし、
その数字を打ち込む。最後に、勢いよくENTERボタンを叩く。

画面は一瞬真っ暗になり、そしてウィーンという機械音を立て始
めた。待つこと数秒。それが永遠にも感じられるほど、アリシアの

心は急いていた。そして画面が明るくなり、映像が現れる。そこに映るのは、白衣の男が数人と、一人だけ黒い服を着た人物。そして二つの筒状の機械。まさに、あの研究室だった。二つの筒の中には、それぞれアリシアの姿がある。自分と、もう一人のアリシアに違いない。

この映像の中に、確実にヒントがある。アリシアはそう確信した。

第十一話へ続く…

「10. コード」(後書き)

ただ今、にほんブログ村にてランキング登録中^^
少しでも気に入っていただけたのなら、
下のタグをポチッと押していただけると助かります。
あなたの暖かい一票を^^;;;;

「11. 背中」の傷」

画面に穴が空くほど、アリシアは映像に夢中になっていた。そして白衣の男達が生きていると、率直にそう思う。その直後、脳裏に嫌な光景がふと浮かんだ。あの部屋で、最初に目があった白衣の男。その視線はしっかりと、自分を見据えているようだった。思い出したくはなかった、嫌な過去。でも、アリシアの中に唯一思い出しに残っている、初めての過去。なんとも複雑な気分だった。

更に目を懲らしてみると、ある事実に気づく。黒い服を着た男が、口をパクパクと動かしているのだ。他の研究員を見ても、それは皆同じく口パク状態。その様子は少し奇妙で、少し滑稽な有様だった。

そう、この映像には音が無かった。確かに、もう一人のアリシアが、黒兵士と戦っているところを見ていた時も、映像は無音だったような気がする。無声映像に少し不満を抱かせつつ、それでも視線はそらせない。

モニターの中で慌ただしく動いていた研究員達が、今は皆、一斉に二つの筒の方を見ていた。その中にいるのは、自分ともう一人のアリシアである事は間違いないはず。ただ今のところ、どちらが自分なのかはよく分からない。見た目が同じなのだから、それは当たり前である。

やがて片方の筒に変化が起こる。映像ではハッキリとは確認できないが、たぶん中には何か液体のようなモノが入っているのだろう。機械の下方から、無数の泡がブクブクと発生し始めた。そして徐々に水嵩が減っていき、数秒後には液状のモノは無くなっていた。

「確実に何かが起きる。」アリシアはそう直感し、期待と不安でいっぱいになった。何が起きるのかを知りたい自分と、知りたくもない自分が心の中で葛藤する。何故なら、この先の結末だけは知っているからだ。確実に、最後には犠牲者が出る。

そしていよいよ、悲劇のフィナーレへと事態が動き始めた。

ガラスの筒の部分が、下部に収納される。そして、中にいたアリシアは、ゆっくりと右足を一步前へと踏み出した。その刹那、周りにいる傍観者達は皆手を叩き、喜びを露わにする。中には、熱い抱擁を交わす者もいた。歓喜の響きが聞こえてきそうな、そんな光景が画面の中にはあった。そしてそれは、新しい命の誕生の瞬間でもあった。

黒い服の男が、目覚めたアリシアへと歩み寄る。そして会話を交わしているのだろうか、アリシアの口が動いているように見えた。そう思った次の瞬間、アリシアが素早い動きを見せる。その右手を、横方向へと薙いだのだ。黒い服の男は、その一撃を交わすことができず、一瞬膝をがくりと落とした。

そして、攻撃を仕掛けたアリシアは、怒りの形相で何かを叫んでいるように見える。直後、一斉に周りの研究員達が彼女のもとに駆け寄り、後ろから前から動きを阻止しようと動く。羽交い締めにされても尚、彼女は腕を、脚を、顔を、縦横無尽に動かし研究員達を振り払おうともがく。

おもむろに立ち上がり、体勢を立て直す黒服の男。どこから出したのか、気がつくとその右手には、小さなナイフのようなモノが握られていた。そして何かを叫びながら、アリシアへと切り掛かる。が、彼女の左脚から繰り出された強烈な一撃が、それを制止させた。

攻撃への怒りにより、アリシアは口を大きく開き、自分の体を捉える男達を強引に振り払う。そして、今度は両手で男達の体を次々と薙いでいく。ある者は腕を、ある者は胸を、首を、顔を、脚を斬りつけられ、紅い血が画面を覆い尽くすような勢いで空を舞った。床に、バタバタと倒れ込む研究者達。そしてそのまま動かないモノへと変わっていく。

そして、アリシアが黒服男に対し背中を見せる形になった時、再び男はナイフで切り掛かった。彼女は周りの研究者達に気を奪われ、迫るナイフには気がついていないようだった。このままだと、間違いないくナイフが彼女を捉える。そう思った時、画面の中で何かが素早く動いたように思えた。そして、黒服男の攻撃は見事アリシアの体に傷を残す。彼女の鮮血が空に舞う。

「あっ!!」

アリシアは思わず、画面の中の光景に驚く。ナイフの標的になっていた彼女に抱きつく形で、もう一人のアリシアがその盾になっているのだ。見ると、もう一人のアリシアの左肩から背中中央あたりまで傷が伸びている。そして、その役目を終えたかのように、そのまま床に倒れた。

この盾になった方が自分なんだ。もう一人のアリシアが言っていた、「助けてくれてありがとうね」その言葉はこの事に対しての感謝だったんだ。画面を見つめるアリシアはそう確信する。

画面に意識を戻すと、アリシアが天井に顔を向け大きく口を開いていた。たぶん、絶叫しているのだ。そして、その目からは紅い涙が溢れていた。

第十二話へつづく…

「12. 密室」

画面の中の黒服男に視線を移すと、何やら笑っているように見える。その姿を見て、アリシアの中で怒りが込み上げた。傷つき倒れたアリシアと、血の涙を流すアリシアを見て、この男は確実に笑みを浮かべているのだ。自分が侮辱され、さげすまされてるようで、笑んでいる男を許せない気持ちでいっぱいになる。

そして、一人の白衣の男が黒服のそばに駆け寄り、何かを伝えている。次の瞬間、非現実的な事が起きた。駆け寄った白衣の男と、黒服の男が一瞬にしてその場から消えたのだ。一体何が起きたのか、アリシアには理解できない。急に青白い光に二人の体が包まれたかと思うと、そのままパツと消えたのだから。

画面の中で叫び続けていたアリシアも、たぶん同じ感覚を覚えたのだろう。一瞬叫ぶのを止め、黒服男達がいた場所を擬視する。逃げられたとも思ったのだろう。今度は泣き叫びながら、周りの機械類に当たり始めた。バチバチと火花を散らしながら、壊れて行く機械達。そして、その勢いのままアリシアは床へ倒れ込み、動かなくなった。急に意識が飛んでしまったらしい。

画面の中に、今は動く姿はない。荒れに荒れた室内、それは自分が初めて見た光景そのままだった。

そしてそこで映像が終わったようで、画面が真っ暗になる。

「何!?!」

ここで、アリシアはある事実気がついた。画面が真っ暗になっ

たのではなく、自分の周り、室内の全てが闇に包まれた事に。目の前のモニターを見ると、うっすらと光の余韻を残し白く淡く光っているだけ。今見ていたノート型のパソコンは、たぶん予備の充電があるのだろう。今は、また「コード」という一文字が画面の真ん中に映っていた。その明かりのお陰で、何となくだが部屋の状況は見て取ることができる。それだけが唯一の救いだろうか。

もう一度アリシアは監視用モニターを見る。沈黙を決め込んだまま、他の場所の風景を映すことはなかった。これでは、いつまたこの部屋に危険が迫っても分からない。

「さてどうしよう…。」と、アリシアは考えを巡らせてみた。ふと、もう一人のアリシアのことが頭に浮かぶ。今彼女は、何処で何をしているのだろうか。もう一度会って、真実が分かったことを伝えたい。と、そう思った。そして、あの男が何者なのかもの気になる。最終的に導き出した答えは、この部屋にこもっていてもその答えは見つからない、というあまりにも当たり前な結論だった。

「よし！探しに行こう！」

そう言って、両の頬をパンパンと二度叩いた。これが、アリシア流の気合いの入れ方なのだ。頬の痛みとともに、やる気がみなぎってきた。この部屋を出て、もし黒兵士に見つかったとしても、すぐその場から逃げればいい。今の私にはそれができる。そう思って、勢いよく椅子から立ち上がった。そしてパソコンの明かりを頼りに扉の開閉ボタンを探し、勢いよくソレを押した。

「あれ…？」

アリシアはその場で呆然と立ちつくす。今さっきまでのやる気が、

一気に削がれた気分だった。扉が開かないのである。もう一度ボタンを押してみる。でも、扉には何の変化も起きず、黙りを決め込むままだった。

「電気が来てないからかな…？」

事実は全くその通り。停電のせいで扉が開かないのだ。その事に気がついたアリシアは、それでもなんとかここを出ようと考えた。考えたのだが、何も浮かばない。

「どうしよう…どうしよう…どうしよう…」

アリシアの呟きが、出口を閉ざされ静寂に包まれる密室内に響く。

※

「ゴルヴァ様、全て手はず通りに事は進んでおります。」

薄暗い闇の中に、男の低い声が響く。暗くて表情までは確認できないが、その声の主は白衣を着ているように見えた。その男が立っている目の前にもう一人、男が六角形の大きな机の脇で、椅子に座って佇んでいるようだ。

「そうか…闇の中で奴らはどう動くのか、楽しみだな。」

椅子に座る男が言った。「はい。」と白衣の男が返事を返す。

「では次のレベルに移行しますか？」

そう、白衣の男が尋ねる。そして少しの沈黙の後、「ああ、そうだな」と椅子から立ち上がりつつ、ゴルヴァと呼ばれた男が返した。暗闇にとけ込むかのような、漆黒の服を身にまとい、右手には小さなナイフが握られている。ゴルヴァはその短刀を見つめながら、こう続けた。

「そろそろ、奈落の住人達を起こしてやれ…。」

「かしこまりました。」

そう言っ、白衣の男は闇に消えていった。

クックック…とゴルヴァの含み笑いが聞こえる。

「さて…どう動く？ アリシア…。」

第十三話へつづく…

「13. 戦いの後…」(前書き)

お蔭様でトータルアクセスが3000超えました^^
作者はめっちゃ感激です♪

これからも頑張りますので宜しくお願いします♪
あと…評価やコメントなど書いてくれると嬉しいです。ランキング
用のタグをクリックしてくれるだけでも助かります^^
WWWW

「13. 戦いの後…」

時間は数十分前に戻る。場所はモニタールーム前の廊下。そこに、歩きながら会話を交わす三人の姿があった。それは、研究室でもう一人のアリシアと戦闘を交わした、あの黒兵士達。隊長、チュリア、ギーハの三人だ。

「しかし、オマエの力は本当に重宝するな。」

ギーハがチュリアに対してそう言った。両方の腕をグルングルン回し、今にも両脇で歩を進める隊長とチュリアに当たりそうな勢いだ。そう、もう一人のアリシアによって切り落とされたはずの両腕が、今は完全に復活を遂げていた。

「まあね…回復する事しか私にはできないから。」

「まさに天使様だな。お陰でアイツも一命を取り留めたわけだし、オレの腕もすっかり回復。ほら、この通り…」

チュリアの返事を聞いているのかいないのか、そう言ってギーハは更に大きく腕を回した。ブンブンと空を切る音が鳴る。それぐらい力一杯腕を振っても大丈夫だと言う事を、他の二人に伝えたいのだろう。でも二人にとっては良い迷惑だった。

「ちょっとお、その邪魔な腕回すのやめてくれないかな…。」

チュリアの声には、確実に怒りがこもっていた。それをすぐに察知したギーハはピタリと腕を止め、手持ち無沙汰で腕組みを始める。

「それに…もう私に向かって、天使だなんて言わないで。」

「あ：ああ：スマン、あまりに嬉しくて…。」

更に怒りを強めるチュリアに対し、ギーハは両手を合わせ謝罪の態度を取った。でかい体を少しくの字に曲げ、小柄な女に謝る様が滑稽に映ったらしく、「ガハハハハハハ…」と、隊長は大笑い一つ。先程のアリシア戦の時とは打って変わり、和やかなムードがそこにはあった。アリシアが去り、4人全員が無事生きているという事実が、3人の緊張を解きはなったようだ。

「二人ともそのへんにしておけ。そろそろモニタールームにつくぞ。」

「了解。」と、ギーハとチュリアの返事がハモる。それがまたおかしかったらしく、隊長は再び大笑いした。

「なあチュリア。オマエ、本当にクレイのそばに居てやらなくてよかったのか？」

「え？あ：ああ：そりゃあそばにいて治療が続けたかったけど、今はこっちの任務が優先でしょう。」

「そうか…。」

一人大笑いを続ける隊長をよそ目に、二人の会話が交わされた。そして、笑いながらも二人の会話を聞いていたのか、隊長が急に話に参加する。

「まあアイツなら大丈夫だろう。チュリアの力で今は死んだように眠ってるし、仮にあの化け物が戻って来たとしても死んだると思わんよ。」

「そうだな。あの状況じゃ、まだ当分は寝ているだろうし。」

隊長とギーハがそう話す間に、三人は目的の扉の前にたどり着く。扉の横のプレートには「モニタールーム」と書かれていた。

あの戦いの後三人は少し休憩し、今後の行動について軽く話し合った。そこでまとまった案が、「とりあえず、モニタールームで他の場所の動きを探ろう。」だったのだ。だから三人はここへ来た。

「チュリア、中に入ったら後は頼むな。機械オンチのオレには、どうもこういう場所は性に合わん。」

隊長がそう言うと、チュリアは軽く笑いながら「わかったわ。」と一言返した。ギーハも「頼む。」と言いたげな感じで、うんうん頷いているばかり。チュリアがクレイをあ部屋の部屋に残し、二人に同行した大きな理由がそこにあった。二人には、機械をいじるといいう行為が苦手だったのだ。

「よし…入るぞ。」

隊長がそう言い、扉の横のボタンに手を伸ばそうとした。まさにその時、「ピーピー」という音が三人の耳に届いた。その音の正体は、他の兵士から入った無線連絡を告げる音。頭の防具にスピーカーとマイクが直に備え付けられているらしく、三人の耳元で小うるさく響いたのだ。それに気をとられ、隊長は伸ばそうとしていた手を戻した。

「誰だよ、るせくな。」

そう不機嫌そうに呟いたのは隊長だ。もちろんこの声も、マイクを通して無線の相手に届いている。

「るせーじゃないぞガーランド。このオレにそんな態度を取るとは、貴様なかなか良い度胸してるじゃないか。いつからそんなに偉くなったんだ？あ？！」

「！！！！」

隊長はその声を聞き、一瞬にして凍り付いた。他の二人も、それは同じらしく無言のまま背筋をピンと伸ばし立ちつくしている。隊長をガーランドと名前で呼べる人物、それは思いつく限り一人しかいなかった。全ての小部隊をまとめる、大隊長ルキアである。

自分の上司に対し、あんな失言をしてしまった自分を悔やむ隊長。しかし時すでに遅し。大隊長ルキアの大きな声が、固まる三人を更に恐怖へと導いていく。

第十四話へ続く…

「14. よく似た二人」

ガーランド隊長はその場で暫く固まりつつ、頭の中では必死に何をどう話そうか考えていた。しかし、考えれば考えるほど頭の中が滅茶苦茶になっていく。正直な話、ガーランドはルキア大隊長があまり好きではない。数々の戦歴を残す一人の兵士としては、大いに尊敬している。だが、人間としては、どうしても優秀な存在だと認めることができないのだ。

「おい！聞こえているのかガーランド！？聞こえてるんなら返事ぐらいしろよ…。」

どこまでも傲慢で、偉そうなルキア大隊長の言葉が三人の耳をつんざく。事実、上司であるのだから偉いのは当たり前だが、その傲慢さがどこか自分に似ている。ガーランドは、そこが氣にくわないのである。

その昔、ガーランドがまだ新米だった頃、ルキアはその部隊の隊長を務めていた。その功績や戦術を見て「いつか自分もルキア隊長のようになりたい。」と、そう思ったものだ。しかし、今は違う。どんどんルキアのように傲慢になって行く自分が嫌いで、そのお手本になったルキアが更に許せない気持ちが強いからだ。身寄りのなかった自分にとって、ルキアは親のような存在だったという事が二人の性格を近づけたのも、また紛れのない事実だった。

「おいギギ…この無線壊れているのか？」

「い…いえ…。壊れていることは無いと思われます大隊長。」

無線の向こうでの会話が聞こえた。ギギと言うのはルキアの直属

の部下の名前だろう。ガーランドにとっては、この会話は皮肉以外の何ものにも聞こえない。ルキアは壊れていないと知っていて、あえてそう部下に聞いているのだ。湧き上がるフラストレーションを必死にこらえ、ガーランドはようやく口を開いた。

「すみませんルキア様。ルキア様の大きすぎる声はちゃんと聞こえてますよ。何かご用でしょうか？」

目には目を、皮肉には皮肉でそう返した。しかし、ルキアはそれを気にする風でもなく会話を続ける。

「そうか、まあさっきの発言は大目に見てやろう。今どこだ？」

「今は二階の東奥、モニタールームの前ですが？」

「じゃあ今すぐこっちに合流してくれ。そっちの豪腕ギーハの力が必要でな。」

そう言われて驚いたのはギーハだった。突然自分の名前が出てくるとは予想もしていなかったので、意表を突かれたのだ。「でも、自分の力が何に必要なんだろう？」と、すぐにギーハはそう思う。その疑問はガーランドの頭にも浮かんだらしく、ギーハが口を開く前に大隊長に聞いてくれた。

「ギーハの力が、何に必要なのですか？」

「お前はいちいち質問で返してくるな。悪いクセだぞガーランド。」

その一言がまたガーランドの癪に障る。しかし、今はそんな下らないことで腹を立てている場合ではないと思う。いくら自分が食いつがったところで、この上司にだけは勝てないと分かっているからだ。

「以後気をつけます。で、ギーハを何に？」

言葉では自分の悪いクセを認めながらも、実際は質問で返す。本人にそれを直すという意志は全くない。それは長年ガーランドを見てきたルキア自身が、一番よく知っている事だった。だから、それ以上指摘することを諦めた。言っても無駄なのだ、「無駄」はルキアが一番嫌う言葉である。

「うむ。今3階の北、所長部屋に來ているのだが、案の定もぬけの殻だった。だが一つ気になる石像があつてな、どうやらこの奥になにか秘密がありそうな感じなんだ、だから……」

「その石像をギーハに破壊させると？」

ルキアの言葉を遮り、ガーランドはまた聞く。たぶんこの時、ルキアは少し苛立っただろう。自分の話を最後まで聞けば、今の質問は必要のない「無駄」な言葉なのだから。そして、コホンと咳払いを一つ。それを聞いたガーランドは「またやってしまった……」と思ったが、それをあえて言葉に出すことはなく、相手の反応を待つ。

「とにかく至急来てくれ。以上。」

そう言っただけで一方的に無線は切られた。暫く黙りを決め込むガーランド。他の二人はその姿をじっと見つめ、次にどう動くのか、隊長の号令がかかるのを待っている。

「全く、自分勝手なおっさんだな。」

隊長は一言だけそう言った。それを聞き、二人は一斉に「ちょ……」「ちよっと!」と、隊長の言葉を制止した。また聞こえていたら、

それこそ次はただでは済まないと思ったからだ。そんな二人の気持ち察することもなく、隊長は言葉が続ける。

「よし、今から我が部隊は二手に分かれ行動する。オレとギーハは大隊長ご一行様の所へ、チュリアはクレイの所に戻り治療を続けてくれ。何か質問は？」

「この部屋の搜索はどうするのよ？」

そう聞いたのはチュリアだった。ギーハもそれは同じ気持ちだったらしく、また首をうんうんと縦に振り質問に賛同している。

「それは二の次だ！大隊長様がすぐに来て言うんだ。大急ぎで行ってやらんとうるさいからな…。」

二人は、ガールランドがルキアを好いていないという事は知っている。そして、二人が似ているという事実も、あえてそれを言葉に出すことは絶対になかったが理解していた。だからこれ以上意見することを諦めた。

「じゃあ行くぞギーハ。」

「了解。」

そう言って二人は廊下の先、T字路の方へ体を向け歩き出した。その背中を見送るチュリア。「クレイによろしく。」そう言って隊長は右手を挙げた。

「了解。」

やがて二人はT字路を右に曲がり、その姿は見えなくなる。それ

を確認してからチュリアは、クレイが待つ部屋へ体を向け歩を進めた。

まさかこのモニタールームの中に、アリシアがいるという事実を知ることのないまま。三人はそれぞれの目的のために進む。

第十五話へつづく…

「15. あり得ない」

「も…もう大丈夫なの？」

チュリアは心配と驚きを混じらせ、そう聞いた。もちろんその相手はクレイである。隊長、ギーハの二人と別れた後、すぐにクレイの居る部屋に戻った。そして、部屋の中に入ったと同時に、思わず出た一言だった。彼女の視線の先には、状態を軽く起こし、自分の体を何やら探っているクレイの姿があった。いくらチュリアが回復の力を施したとはいえ、この回復力は尋常ではない。それは、チュリア本人が一番よくわかっていたのだろう。

「え？ ああ……チュリアさん。もうオレ大丈夫みたいですよ。やっぱりチュリアさんの力はすごいですね。」

部屋の入り口に立つチュリアの姿を見て、クレイはそう元気に言った。

「ありがとう…。」

少し小声で返事をするチュリア。その心中は、穏やかではなかった。

魔剣アリシアとの戦闘後、倒れたまま動かないクレイの体を調べた時、肋骨や鎖骨大腿骨など様々な骨が折れていた。息も絶え絶えで、最期の刻はもうそこまで迫っていたのだ。それに対し、彼女はさほど大した回復を施しては居ない。隊長達に同行するため、とりあえずの応急処置をただけ。なのに、クレイは目の前で元氣そうに体を起こし、普通に話している。この脅威の回復力は、クレイ自

身が持つ先天性のソレである事は間違いないのだ。

「オレ、あのままやられちゃったんですね…もっと強くなりたいです。」

うつむきながら言うクレイに対し、チュリアは何も言わずに入り口で佇んでいるだけ。いや、言えなかったと言うべきか。クレイの体について考えを巡らせている彼女には、その言葉は届いては居なかったのだ。

「あの…チュリアさん？」

自分の名前を呼ばれ、やっと彼女の意識は現実サイドに戻る。「そのうち、分かる 때가来るだろう。」そう自分に言い聞かせ考えるのをやめた。そして、「ん？何？」と聞きながら、クレイのもとに歩み寄った。

「あの後。オレが倒れた後、一体どうなったんですか？オレがこうして生きてるって事は、魔剣を倒したんですか？でも、隊長達の姿が見えないし…。」

一気に複数の質問を浴びせるクレイ。意識が戻ったばかりで、周りの状況が分からないのは理解できる。だが、チュリアにはその質問攻めが、少しだけ気に障ったようだ。

「一気に色々聞かれても困るわ。順を追って説明するから…黙って聞いてて。OK？」

「すみません…黙って聞いてます。」

「うんうん。」と二回頷き、チュリアはクレイの傍らに腰を落と

す。そして、折れていたはずの骨を手で触り確認しながら話を続けた。

「詳しく説明するのはちょっと面倒だから、簡単に説明するわね。」

そう前置きを言って、クレイが倒れた後から今までの経緯をかいつまんで説明した。

まず魔剣アリシアは、隊長のとっさの一言で地下へ向かった事。その後クレイを軽く治療し、三人でモニタールームへ向かった事。そこで大隊長から無線が入り、他の二人はそちらへ向かった事。自分はクレイの手当の為に、この部屋に戻った事。ざっと一分程度で話し終えた。それをクレイは所々頷きながら、黙って聞いている。

「そうだったんですか！わざわざオレの為に戻ってきてくれるなんて感激です！！」

「当たり前でしょう、あなた本当に死ぬ寸前だったんだから…。」

大きな声で本当に嬉しそうに言うクレイに対し、チュリアはあくまでも冷静にそう言った。でも本当は感激と言われ、嬉しかった自分が居ることに気がついている。人の為に何かを施す事が、チュリアは好きだった。別に何か見返りが欲しいわけではなく、ただ感謝される事で、自分が存在する価値があると思えるからだ。

「でも…どうなんでしょうね？」

「ん？何が？」

「アレは…あの女は、本当に魔剣アリシアなのかなあ…って思っ
て…。」

チュリアも同じ疑問をずっと前から抱いていた。初めてこの部屋のモニターで、アリシアの顔画像と名前等の情報を見た時からずっと。

「たぶん、隊長は何も気がついていないだろうけど、あの人結構抜けてるところがあるから……。どこかで聞いた名前だあ、なあんてふざけたこと言ってたぐらいだし。」

隊長の物まねを交えつつ、そう言って彼女は笑った。クレイもつられて笑う。だがすぐに笑いは消え、二人は並んだ筒状の機械の方を見た。

そして暫くの沈黙の後、チュリアが口を開く。

「確かに……クレイの言うとおり、アレが魔剣アリシアだなんて……あり得ない。」

「……………」

頭に浮かぶ色々な考えをまとめつつ、ゆっくりとゆっくりと話すチュリア。クレイはその言葉を邪魔しないようにと、黙りを決め込み機械の方をじっと見ていた。そうすることで、チュリアが答えを導き出してくれると思ったからだ。事実、チュリアの考えは徐々に確信へと迫っていく。

「アレがレプリカなのは間違いない。そしてソレを造るには、もとなる人物の一部が必要なのよ。例えば髪の毛や皮膚や爪や……本人の要素が含まれた何かが。」

そこまで言って、少し休んだ。ゆっくりだが確実に、彼女の脳内は整理されていき、そして最終的に一つの答えに結びつく。

「…でも…10年前のあの事件で、アリシアは無に還ったはず。
…もうこの世界には存在していない。だから、もともになるモノなん
て…あるはずが……ない……。」

第十六話へ続く…

「16. 寄り添う二人」

2人の間に、しばしの沈黙の時が流れる。チュリアとクレイが頭の中で思い描いている想像は同じ、十年前の事件についてだった。だが、その内容を口に出そうとはしない。互いに頭の中で考え、そして推理している様だ。

「あの…俺一つ思っただんですが…」

不意にクレイが口を開く。深く考えを巡らせ、そしてあることに気がついた、そんな風な口ぶりだ。

「ん？何か思いついたの？」

「はい。ただ…これはあくまでも俺の推測なので、まだハッキリとした事は言えませんが…」

「なによ！何でも良いから早く言って。」

言いかけた事を、また飲み込もうとするクレイに対し、チュリアは苛立ちを覚え少し大きめの声で急かす。それに驚いたクレイは「あ…はい…すみません…」と、二度頭を下げ謝罪の態を取った。その態度が、チュリアの怒りを更におおる形になったのだろう、先ほどよりも大きな声で怒鳴った。

「男なんだから、言いかけたことは最後まで言いなさいっ！」

「はい…。」

そして、2人の間にまたしばらくの沈黙が生まれた。怒られた事に対し落ち込むクレイと、こんな事で大声を出してしまった自分に苛立ちを覚えるチュリア。

先に口を開いたのはクレイだった

「じゃあ…俺の考えを話します。」

「う…うん、お願い。」

大声を張り上げてしまった事に対し、バツが悪いのだろう。チュリアの声はとても小さかった。

「もしかして、あの魔剣はセシリアなんじゃないかなって思ってます。それだったら、あれがアリシアだと考えるよりもつじつまが合うし。」

クレイの話に対し、チュリアは何も言わなかった。いや、言えなかったと言うべきか。彼の推理が、自分の予想を遥かに超えていたからである。だが全般的な意見という訳ではなかった。逆に鋭いところについて、彼女には頷く事で精一杯だった。

「チュリアさんには悪いですが、もしかしてあのモニターを見た時に、名前を見間違えただけなんじゃないかなって…」

そう言って、クレイは筒状の機械の横にあるモニターに視線を送った。つられてチュリアもそちらに目をやる。確かにあの画面にはアリシアと書かれていた。…ような気がする。今クレイに指摘され改めて考えてみると、もしかするとセシリアと書かれていたのかもしれない。

「魔剣アリシアが現れるまでは、セシリアこそが最強の剣だと言われていたんです。仮にあの女がセシリアだとして、あの強さは充分に有り得ますよ。」

「確かにセシリアなら…。」

チュリアはスッと立ち上がり、魔剣の情報が映し出されたモニタ―へと歩を進める。もちろん、もう一度名前を確認する為だった。百聞は一見にしかず。2人で論議を並べ立てるより、もう一度画面を見たほうが早いと思ったからだ。

一步一步確実に近づいていく。ようやく画面の文字が若干確認できそうな位置に来た時、思いもよらない出来事が2人を襲った。急に部屋の全ての電気が消え、漆黒の闇が訪れたのだ。

「キャッ！何何？？停電？？？」

急に目の前の視界を奪われ、動揺をあらわにするチュリア。彼女の心臓の鼓動が、一気に加速を増す。クレイは彼女があげた怯えた声を頼りに、「大丈夫ですか？チュリアさん。」と声をかけ歩み寄った。彼の声のおかげで少しは平常心を取り戻せたのだろう、チュリアは小声ながらもハッキリと答えた。

「ええ、大丈夫よ。誰かが電気系統を抑えたんでしょうね。」

「たぶんそうですよ。」

視界ゼロの闇の中、気がつくともチュリアは隣まで来ているクレイに対し身体をぴったりと寄せている体制になっていた。左腕を通して彼女の温もりをモロに感じ、クレイは少し照れながらもそれを悟られまいと話を続ける。

「でも…結局、名前の確認は出来ませんでしたね。」
「そうね。」

そしてまた少しの間、沈黙が続いた。今の2人の思考の中には、あの魔剣がアリシアなのかセシリアなのか、そういう疑問は消えていた。これから先、この闇の中でどう行動するべきか、それが第一に考えるべきことだったからだ。

チュリアは暗闇が嫌いだった。それは過去のトラウマが原因なのだが、今はその事について説明するのはやめておく。闇の中でどう行動するか、闇、暗闇。そう考えただけで、不安が次から次へと溢れて来る。こんな状況下で、彼女にまともな考えを巡らせることは出来ない。クレイにしても似たような状況だった。生まれて初めて異性の温もりをモロに感じているのだ。身体は硬直し、頭の中はチュリアの事でいっぱいだった。

そして、お互い口を閉じたまましばらく時間は流れた。

時間の経過とともに、チュリアはクレイにどんどん身体を預けていく。それは不安をかき消す為、そこに彼が居るという事実だけが彼女の不安要素を中和しているのだった。

そして急に耳を突き刺すような音が2人を襲う。

第十七話へつづく…

「17. 闇の中で、」

「おい、お前ら大丈夫か!？」

二人の耳に突き刺さる大きな声、その主はガーランド隊長だった。おそらくは隊長やギーハが居る場所も停電になったのだろう。それで、2人を心配してくれて通信をよこしたのだ。その声にすぐに反応を見せたのはクレイだった。自分が無事であることを、いち早く伝えたかったのだろう。

「隊長お！オレとチュリアさんなら大丈夫です。」

「な！クレイ！お前、もうそんなに元気になったのかよ？やっばり、チュリアの力はすげーな。」

元気に応えるクレイの声に、ガーランドは少し戸惑ったがすぐに普段の口調に戻った。今では通信機の向こうでガッハッハと大声で笑っているのが聞こえる。その声の大きさに、チュリアとクレイは思わず両手を耳の位置に持っていた。だが、防具越しに抑えたところで、隊長の笑い声を遮断できるはずもない。諦めて次の言葉を待つことにした。

「そっちも闇の世界だろう？俺たちのところも一面闇の海でなく、ルキアの所にまだたどり着けてないんだよ。なんでこんな時に停電なんだ？」

その言葉に、すかさず反応したのはチュリアだった。

「なんでこんな時になって、この停電は私たちの部隊が計画的に起こしたんじゃないの？」

「ん？…俺はそんな計画、聞いたことも無いぞ。それに今回の部隊の中には技術屋達はいなかったと思うが？」

その言葉でチュリアの動揺は一気に加速する。彼女は今の今まで、この停電は自分たちの計画の一部だと思っていたのだ。だから嫌いな闇も、少しは我慢することが出来た。でも実際は計画などはまったく関係は無く、自分たちは誰かの計画に乘せられている。そう思うと、クレイの存在でなんとか抑え付けていられた恐怖が徐々に込み上げてくるのがハッキリと解った。

「じゃ…じゃあ、私たちは…これからどうすれば…いいの？」

チュリアは増殖していく恐怖に負けじと、一言一言をかみ締めつつ隊長に次の行動を仰いだ。少しでも気を抜けば泣き出してしまいそうならい心の中は掻き乱れ、動揺し、そして潰れてしまいそうな重圧を感じる。

「とりあえずあれだ、原因が解るまでそこを動くな。今そっちに……」

そこまで言って、急に通信が途切れる。小うるさい隊長の声の変わりにザーというノイズ音だけが2人の耳に届いていた。

「ちよ…ちよっと！隊長！！どうしたの？返事してよ！！！」

チュリアはそう叫ぶが、それ以上隊長の声が返ってくる事は無い。それでも彼女は、半分パニック状態で何度も隊長を呼ぶ。通信機が壊れたのではないかと、何度か防具のスピーカー部分を叩き、涙声で叫び続けた。

その声を頼りにクレイは彼女の元に歩み寄り、そして思いっきりの力で両肩をしっかりと握った。そしてチュリアの声に負けないぐらいの大きな声で叫んだ。

「チュリアさんしっかりしてください！大丈夫、何があっても今度は俺が守って見せますよ！！」

その言葉で少し落ち着いたのだろうか、チュリアは叫ぶのをやめた。大きなため息を一つついた。そして徐々に乱れた呼吸を整えていき、自分の左肩に置かれたクレイの右手に手を重ねる。

「ごめん。もう大丈夫よ。あなたじゃ全く頼りないけど、何があっても守ってね。」

そう言って、重ねた手をポンポンと二度叩き、よろしくという合図を送った。それがクレイには相当嬉しかったのだろう、とびきり元氣な声で一言「はい！」と応えた。

そのまま数秒が過ぎ、チュリアが軽く笑いながら言った。

「ちょっと、いつまで私に触れているつもり？いい加減セクハラで上層部に申し立てるわよ。」

「あ！！す…すみません…。」

そう言ってクレイは、急いでチュリアの両肩から手を外した。そしてそのまま手持ち無沙汰になった両手が空を切る。その刹那、

「じゃあ、今はこうしてて…」

チュリアが空で泳ぐクレイの右手を捕らえ、そして強く握った。

まだ不安を完全に拭い去ることは出来ないが、こうすることで少しは心が安らぐようだ。逆にクレイの心中は穏やかではない。深い闇の中、クレイの頭の中はチュリアの事でいっぱいになっていった。

「とりあえず座りましょうか？」

そう聞かれ、クレイの身体は一瞬ビクンと波打つ。彼の中の妄想はどんどんエスカレートしていたようで、急に声を掛けられ驚いてしまったのだ。

「ちょっと〜本当に大丈夫なの？」

「だだだだ…大丈夫ですよ…ええ〜大丈夫です。あそこに座りましょう。」

クレイは動揺をあらわにして答えつつ、目的の場所を空いたほうの手で指差した。だが、この闇の中でそれはチュリアには全く見えてはいないことに、彼自身気がついてはいない。

チュリアの繋がれた手を引き、彼女を目的の場所へと誘う。その途中後ろの方から聞きなれない音が聞こえてくるのに気がついた。

カタン…カタン…

2人の身体は瞬時に硬直する。その音は、徐々に徐々に大きくなっていくように思えた。ゆっくりと振り向き、音のする場所を探した。部屋の右奥、天井の少し下、たぶん通風孔があるのだろう、そこから奇妙な音が聞こえてきているようだ。

カタン…カタン…カタン…

何かが迫ってきているという恐怖に怯えるかのように、チュリアはクレイの手をぎゅっと握り締めた。

第十八話へつづく…

「18. 謎の物体」

カタン…カタン…カタン…

トクントクン…トクントクン…

通風孔から聞こえてくる奇怪な音とは別に、つないだ手からお互いの早まる生命の鼓動が伝わってくる。クレイはゴクリと唾を飲み込んだ。

何者かが迫る音はどんどん音量を増していき、そしてやがて聞こえなくなる。微かに聞こえるのはお互いの鼓動と、少し乱れた息遣い。チュリアは緊張のあまり、両肩で息をしている状態のようだ。大嫌いな闇の中、得度も知れない何かが迫っているのだ。この状況で冷静で居られるはずはない。

チュリアは繋いだ手を更に強く握った。それに答えるかのように、クレイも彼女の手を強く握り返す。そこには「俺が必ず守る」という強い意志が込められていた。だが、平常心を失いつつある彼女には、その事は半分も伝わってはいないだろう。

こう着状態の中、2人はただただ通風孔を見据える。時間の経過とともに目が慣れてきたのだろう、今ではうっすらと辺りを確認することが出来るようになっていた。確かに音の聞こえる場所には、通風孔らしきものがあるのがわかる。格子状の蓋の様なもので閉じられているように見えた。

更に目が闇に慣れてくる。通風孔らしきものが、それが確実に通風孔であると確認できるようになった頃、

「!」

チュリアは音にならない驚愕の声を上げた。クレイも同じ感情になったに違いない。硬直する身体が、電気が走ったかのようにビクリと波打つ。

2人が見据える先、格子状の蓋の更に奥で小さな点が光ったように見えたからだ。それはまるで、茂みの中から獲物を狙う獣の鋭い眼光のようだった。間違いなく何かがそこにいる。2人はそう確信したのと同時に、戦いになるという覚悟を心に決めた。その刹那、

ガタンガタン…ガタガタガタ…

通風孔に潜む何かが、格子状の蓋を外そうとしているのだろうか。鉄が何かにぶつかり、こすれる音が部屋に響く。そしてまた光る目が姿を現した。しかも今度は、光は消えることなく2人に向けられたまま。数秒に一度光が一瞬だけ消える事もあったが、たぶんそれは瞬きをしているせいなのだろう。

ガタガタガタガタ…

相変わらず、部屋には蓋を必死に開けようと試行錯誤する音が響く。あるいはその音は、2人を威嚇しているだけなのかもしれない。何度も何度もガタガタと小うるさい音が繰り返される。

クレイは繋いでいた手を解いた。そしてチュリアの一步前に踏み出し、彼女をかばう形で戦闘の構えを取った。魔の力を持った片方の手を通風孔へ向ける。すると今までは普通に人間のそれだったものが、みるみるうちに魔銃へと姿を変えていった。どうやら魔の力

を自分で操れるようだ。

そして時は来た。まるでクレイの準備が終わるのを待っていたかのように、ソレは二人の前に姿を現したのだ。

ガタガタガタカタ：カランカラン…：ブチャリ

格子状の蓋が外れ床に落下し金属音が部屋に響く。同時に謎の物体も床に落下したらしく、嫌な印象を受ける音が聞こえた。肉を潰す様な湿り気のある鈍い音。確実に心地のいい効果音ではない。

「うおおおおおおおおお！！！！」

ズバババババババ：

謎の物体の姿を確認し、クレイは雄々しく咆哮し魔力を乱射した。闇の中に閉じ込められ、思いもよらない訪問者が現れた事への恐怖心が、その原動力になっているのだろう。先に殺らなければ自分たちが殺られる。兵士としての六感がそう告げているのだ。

確かな手ごたえが、身体に伝わってくる。それと同時に、謎の物体が悲痛な叫び声をあげた。

「ぎゃあああああああ！！！！！！」

耳に張り付くような謎の物体の声。それは明らかに女性特有の音域だった。その声を聞き、クレイはとっさに攻撃を中止する。「もしかすると人間の女性を撃ってしまったのではないか。」「もしそうだとしたら、自分はどうしてもないことをしてしまった。」「戦いの中で得た罪こそ名誉ある事であって、殺人で得る罪ほど醜く不名

「誉な事はない。」謎の声が収まるまでの数秒間、彼の中で様々な考えが巡り巡った。

自分の手が震えているのが解るほど、クレイは動揺している。その横でチュリアはじつと謎の物体を見据えていた。それは、人間がうずくまっている様にも見える。

だがチュリアは確信していた。謎の物体が、人間ではないということに。なぜなら、その大きさが人のそれを遥かに凌駕していたからだ。うずくまっている状態にも見えるが、その高さは2メートルを超え、幅も同じぐらいあるように見えた。簡単に例えるなら、肉の塊が置いてある、そういった感じた。

普通、通風孔のダクトは掃除が出来るように、人が一人這いつくばって通れるぐらいの広さはある。だが、目の前の肉の塊は確実にその許容範囲を超えている。どういう仕組みでダクトをくぐってきたのか、チュリアは気になり考えたが一向に答えは見つからない。

だが、それ以上考えを巡らせている余裕はなさそうだった。どう見ても目の前の物体が自分たちに友好的には見えない。誰かが自分たちを始末する為に送り込んだ、そう考えるのがこの状況下では普通だ。もちろんチュリアもそう思ったらしく、呆然と隣で立ち尽くすクレイに声をかける。

「クレイ！そこで突っ立ってないで、早く次の攻撃をお願い。大丈夫アイツは人間じゃないわ。」

「あ：はい！」

チュリアの一喝で我に返ったクレイは、肉の塊を一度しっかりと

見据えた。そしてその大きさから、確かに人間ではないと判断したのだろう、もう一度肉の塊に銃口を向けた。その刹那、肉の塊がうめく様な声を発する。

「イダイ…イタイヨ…ガラダジュウガ…イダイ…。」

先ほどの高いトーンとは打って変わって、限りなく低い腹に響くような声。先ほどのクレイの銃撃が効いているのだろう。だが、致命傷とまではいかなかったようだ。又チャリ又チャリと音を立て、肉の塊はうごめき始めた。

その声に、その湿り気を帯びた音に気を奪われたのか、クレイは銃口を向けたまま立ち尽くしている。それに気がついたチュリアは再びクレイに対し叫んだ。

「いいから早く撃ちなさい！！！」

カシャー…ン…カランカランカラン…

不意の出来事だった。チュリアが叫ぶのと同時に、背後から軽快な音が聞こえたのだ。

「今度は何！？」

「なんだ！！？」

2人はそう叫びつつ、とっさに音のした方に振り向いた。

第十九話へつづく…

「19・魔剣来たりて」

2人の視線の先には壁がある。そしてその上部には、肉の塊が出てきたのと同じような通風孔があった。格子状の蓋が外れ、四角い穴がぽっかりと開いている状態だ。

先ほどの軽快な音は、格子状の蓋が床に落下して打ちつけられた音だろう。2人はそう思い、更なる恐怖心が芽生えた。蓋が外れているということは、それを外した何かが通風孔の中に潜んでいるという事を表しているのだ。もしかしたら肉の塊がもう一体いるのかもしれないのだから。

意識だけを後ろの肉の塊に集中させつつ、目の前の通風孔を見据える。確かにそこには何かがあるようだ。黒い影が小刻みに動いているようにも見える。

「イダイ…イダイヨ…」

相変わらず後ろの肉の塊は低くうめいている。幸いなことに、今のところ攻撃を仕掛けてくる様子は無かった。

もし、もう一方の通風孔に潜む存在が同じ肉の塊だったとして戦いになったなら、おそらく勝ち目は無いだろう。クレイの先ほどの銃撃があまり効いてはいという事実と、チュリアは回復専門なので攻撃の術は持っていないという要素がその答えを導き出す。

いっその事逃げ出すという作戦もちろんあるが、この闇の中で旨く逃げ切る自身は無かった。それにこの部屋を出たところで、違う肉の塊が待ち構えているかもしれないのだ。今の状況下では、逃

げる事が得策だとはとても言いがたい。

もう一方で潜む影は、なかなか姿を現そうとはしなかった。「こういう時に隊長がいてくれたら：」チュリアは漠然とそう思った。ガーランド隊長なら今のような危機的状況でも、なんとか切り抜けられるような指示を瞬時に判断し出してくれるはず。その指示を出す司令塔がない今、全ては自分たちの戦いのセンスにかかっている。その事実がチュリアとクレイの不安と緊張を煽るのだ。

「チュリアさん：」

クレイは少し震えた声色で、部隊の先輩であるチュリアに指示を仰ぐ。彼女にしてみたら、自分は攻撃の術を持っていないか弱い女なのだから、攻撃をしかけるクレイに決めてもらいたいという思いが強かった。言わば、部隊の連携は見事に崩れていた。その事実を2人が悟ったことで、大きな隙が生まれる。

「ぐっ！！」

チュリアが悲痛の声を上げた。その異変に気づき、クレイはすぐに彼女の方に視線を送る。刹那、クレイ自身も「ぐあ：」と、悲痛の声を上げてしまう。腹部に熱く痺れるような感覚が走ったからだ。見ると、自分の脇腹辺りに何かが突き刺さっている。視線を巡らせるとチュリアも同じような状況だった。彼女のお腹の辺りを、何かが貫通しているように見える。クレイがその何かの元を必死に目で辿っていくと、それは肉の塊から伸びていた。

「これは、魔剣の力！？」クレイも、そしてチュリアもそう思ったに違いない。クレイは魔銃であり、チュリアは魔に堕ちた天使なのだ。その魔の存在に傷を付けられるのも、また魔の力のみである。

そして、この突き刺すという攻撃方法、それは魔剣以外に考えられないのだ。

「もしかして…こいつアリシアなの！？それとも…セシ…リア…？」

腹部の痛みを必死に堪えながら、チュリアは誰に言うでもなく漏らした。同時に腹部に突き刺さっていた物が一気に引き抜かれた。クレイのほうも同時に引き抜かれたらしく、「うう…。」「ぐわっ…。」と、2人同時に嗚咽を漏らす。

「ソウ…ワタシ…ハ…ア…リシ…ア…マケン…アリシ…ア…ヨ…。」

片言の言葉使いで肉の塊は言う。自分は魔剣アリシアなのだと。2人がその言葉を理解した時、もはや勝ち目が無いことを悟った。クレイの魔銃の攻撃が殆ど通じず、ましてや今みたいに触手のような魔剣の攻撃を繰り返してくる。力の差は歴然としていた。

「ワタシノイタミ…オマエラニモ…オシエテ…アゲル…。」

そう言ったかと思うと、肉の塊は更に触手を繰り返してきた。二人には腹部の痛みに耐えるのが精一杯で、避けることもできず、覚悟を決める事がやっとだ。

「危ないっ！」

不意に後ろから声が掛かったかと思うと、何者かが2人の間をすり抜け、肉の塊と2人の間に立ち塞がる体勢をとる。そして、何か空を切る鋭い音が聞こえた。

ザシュン！！

「ギャアアアアアアアア！！！！」

肉の塊が、また絶叫する。2人には、あまりに突然すぎて一体何
が起きたのか理解できなかった。ただ、命は救われたという事だけ
は理解できる。助けに入った人影は、2人のほうに顔を向けたよう
だった。だが、暗くてそれが誰なのかは解らない。

「だ…大丈夫ですかあ？」

それは女の声だった。そして、2人にはその声に効き覚えがある
ような感覚を覚える。でも、誰の声だったのか思い出せないでいた。

「助けてくれた事に礼を言うわ。ありがとう。」

「もうこれ以上犠牲を出したくないんです。だから2人は逃げて
ください。」

チュリアの言葉を全く聞こうともしないといった感じで、女は早
口で2人をまくし立てる。その言葉の内容に、チュリアも、そして
クレイも少し戸惑いを見せた。いくら自分達を助けてくれた強い力
の持ち主とはいえ、女一人を残して逃げることに抵抗を感じたのだ。

「悪いけどその指示は受けられないわ。」

「力不足かもしれないけど、俺達も加勢させて貰うよ。」

「そうですか…わかりました。」

女はすぐに2人の意見を飲んだ。いや、ただ単に話を殆ど聞かず
返事をしているといった感じだろうか。

目の前の肉の塊は「イダイ…イダイ…」と叫びながらのた打ち回っている感じだった。またいつ攻撃を仕掛けてくるか解らない。女はすぐに目の前の肉の塊を見据え、戦闘の体勢を整える。2人から見て、彼女のそれは戦闘に慣れた者のソレだった。

「あなた名前は何て言うの？ 誰の部隊の所属なのかしら？ どうしてここにいるの？」

チュリアが女に対し質問を浴びせた。こういった状況であっても、彼女は気になったことは解決しないと絶対に気がすまない性格なのだ。ただ、答えが返ってくるとは思ってはいない。その時はまた後で改めて聞くつもりだった。しかし、女は素直に答える。

「私ですか？ 誰の部隊といわれても解りません。ただ、名前はアリシアっています。さっきまで通風孔から見ていたんだけど、2人が襲われていたので、つい出てきちゃって…」

そう早口で答える。それを聞いて、二人に芽生えていた安心感はいともたやすく崩れていった。先ほどの部屋で戦い、見事に惨敗の苦汁を飲まされた相手が目の前にいる。ただ、あの時とはなにか様子が違っているとチュリアは直感した。

第二十話へ続く…

「20. 魔剣叫ぶ！」（前書き）

今後の活動の糧にしたいので、
ぜひともコメントや評価お願いします。

「20. 魔劍叫ぶ!」

先ほど戦闘を交えた時は、どこか冷たい印象を受けた。でも目の前で自分達を助けようとするアリシアは、人間味があるというか、どこか暖かい雰囲気だ。誰かを探しているようだったし、隊長の言葉を聞き地下へ向ったはず。なのに、なんで戻ってきたのだろう。

チュリアは色々な事を考える。だが、それをアリシアに聞くことは無かった。もしかすると、自分達を油断させるつもりなのかもしれない。だから口を開く代わりに、アリシアの一挙手一投足を鋭く観察することに決め込んだのだ。

クレイの方は少し動揺気味で、銃口を向ける先を肉の塊にするべきか、アリシアにするべきか悩んでいるようだった。どちらにせよ、彼らにとっては始末するべき対象なのだ。暫く悩み、そして今は最も危険度の高そうな肉の方をターゲットに決める。

「イダイ：イダイ：ワダシノカラダガアー：オマエ：ゴロスウウウウ!」

肉の塊が叫んだかと思うと、新たな触手が数本伸びてきた。「来ます!」とアリシアは声を張り上げつつ、迫り来る肉の攻撃を魔劍と化した右手で薙ぎ払う。それでも数本残ってしまい、それは後ろのクレイとチュリアへと襲い掛かった。

腹部の痛みからだろう。二人の動きは少し鈍っているようで、その攻撃を横へ飛んで避けるのが精一杯のようだ。クレイは着地後すぐに、肉へと銃口を向け銃撃を開始した。だが今回は全く手ごたえを感じられない。着地後すぐということもあり体勢が悪かったし、

腹部から届く痛みと痺れのせいで手が震えている。それでも数発は、目標を捉えているようだった。

「イダイ…ゴロス…イダアーイ…ゴオロオズウウウ!!」

次々と生まれる肉の武器が、執拗なまでに三人を襲う。アリシアは何度も何度も薙ぎ、徐々にだが肉との間合いを詰めて行った。このままではらちが明かない、一気に本体を倒すしないと理解したようだ。

何本も何本も、鋭利な突起物のような肉の武器が伸びてくる。アリシアがどれだけ薙ぎ払ったところで、その数が減ることは無い。逆に、地面に落ちた肉片の数以上に、新たな獲物を生み出しその数は増え続けている。アリシアの剣撃だけでは、攻撃を受け流すのは困難な状況になってきた。

クレイは必死に銃撃を続ける。チュリアは左手で腹部をかばいつつ、クレイの後ろへ陣取っていた。そして口の中で、なにやらモゴモゴと唱えている。それこそが、彼女お得意の治癒術を使う為の呪文のようなものなのだろう。だが、クレイの脇を抜けて迫る肉の攻撃を交わす度に、呪文の詠唱は遮られなかなか治癒術を使うことができないでいた。

「チュリアさん、こいつを倒したらどれだけの罪が得られるでしょうね?」

「そんな事、解らないわよ。私は神じゃないんだから!!」

クレイの声は少しだけ楽しそうだった。この戦いを楽しんでいる様なその態度がチュリアは気に食わず、投げやりな言葉を返す。そ

れによってまた呪文の詠唱が遮られる形になった。

「何でもいいから攻撃に集中しなさい！私の邪魔はしないで！！」

そう言ってまた呪文を再開する。腹部の痛みにも耐えつつも意識を集中し、頭に浮かぶ言葉の羅列をそのまま口に出す。

「ルビデウス…ゴルンバサジモ…バレ…ユキアデリアート…」

呪文を紡いでいくにつれ、彼女の両手に温かな力が生まれていった。そして、右手を自分の腹部に当て、左の手をクレイの傷口に当てる。「ウィキアーデ！！」それが呪文の最後の節だった。彼女の両手から一気に温かな治癒の力が解き放たれ、2人の傷口を癒していく。魔に堕ちた天使が使える治癒の力。それは個人差が若干あるものの、これ位の傷なら直ぐに塞がり癒えてしまう程強力な力だ。

「ありがとうございます！さすが天使の力ですねっ。」

傷の痛みも熱も痺れも一気に消え、クレイは元気よく彼女に言った。だが、チュリアにとってその言葉は侮蔑の言葉でしかない。

「私を天使と呼ばないでと、いつも言っているでしょう！」

今までに無いほど怒りを込め彼女は叫んだ。頭の防具のおかげで直接視う事はできなかったが、彼女が放つ鋭い視線をクレイは読み取ることが容易だった。それほどにチュリアは憤怒しているのだ。

「す…すみません…すみません…。」

クレイは何度も何度も謝った。だが、彼女の怒りが収まるような

気配は全く無い。二人のやり取りが続く中、肉の塊が絶叫する声が響いた。

ギアアアアアアアアアアア！！！

チュリアも、そしてクレイも直ぐにそちらに視線を凝らす。アリシアの右腕が、見事に肉の塊を貫いている様うかがえた。あの猛攻をすり抜け、やっとアリシアの直接攻撃が肉に致命傷を負わせた瞬間だった。

「この！この！このおおおおおおお！！」

アリシアは思い切り叫び、尚も右腕に力を込める。突き刺さった腕を、更に奥へと突き通すためだ。怒りと、困惑とがアリシアの心を襲う。敵を倒すという強い思いと、初めて命を奪う事を体験した憤りが、アリシアを軽いパニック状態にさせているようだ。

これ以上奥まで届かないと悟ると一度右腕を引き抜き、そして今度は違う場所へと魔剣と化した腕を突き立てる。それを何度も何度も繰り返した。

「ぐおおおああああああ！！！！」

アリシアの咆哮が部屋中に響き渡り、それは後ろで状況を見据える2人にもハッキリと届いていた。2人の元に伸びていた肉の剣もやがて力を失い、地面へと力無く落ちる。だがその事には、アリシアの異様な様に気を奪われている2人には気づいていないだろう。命が救われたという事実よりも、次にあの魔剣の餌食になるのは自分達かもしれないという憶測が、2人をその場に凍りつかせていた。

グエグエグエグエ…グエ…グエ…

アリシアが剣を刺す度、肉の塊は悲痛の声をあげていたが、やがてはそれも聞こえなくなる。絶命したのだ。それでもまだ、アリシアは魔剣を突き立て続けていた。そして徐々に動きが鈍くなり、ついにはピタリと止まる。体力が尽きたせいだ。突き刺さった腕もそのままで、アリシアの両肩は小刻みに上下しているように見えた。

その時になって、やっと我に返ったクレイがチュリアのほうを振り返った。この状況でどう動けばいいのか解らず、チュリアに指示を仰いでいるのだ。このままここで休むべきなのか、力尽きているアリシアを今が好機と襲うのか、それとも気づかれないようにこの場を去るべきなのか。

チュリアは彼の視線に気づき、そして悩んでいることに気づき少し考えを巡らせた。だが、それがいけなかった。肉の塊が動かなくなった事で、少しだけ警戒心を解き、思案し、隙を作ってしまった結果だった。

「!!」

突如チュリアの左胸に熱い感覚が走る。

「チュリアさん！」

クレイもその事実気がついたのだろう、困惑と悲痛を交えた声で彼女の名を叫ぶ。見ると、チュリアの左胸には、肉の剣が突き刺さっていた。

第二十一話へ続く…

「21. 死に堕ちた天使」

クレイの叫び声で、アリシアも2人の状況の変化に気がついたのか、ゆっくりと振り向いた。そこには肉の塊からの一撃を左胸で受け呆然と立ち尽くすチュリアと、彼女に寄り添い様子を覗くクレイの姿がある。

アリシアはその光景に更なる怒りを覚え、また何度か右手を突き刺した。肉を切り裂く嫌な感覚が、右腕からモロに伝わってくる。だがそんな感覚も、先ほどの疲れも忘れるほど、彼女は怒りに我を忘れていたようだった。もう確実に肉の塊は生を失っているように、沈黙したまま動くことは無い。

ドサツという重い音が後ろから聞こえた。だが、今のアリシアの耳には届いてはいないようだ。

「チュリアさん！しっかりしてください、チュリアさん！！」

クレイは床に身を任せる形で倒れこんだチュリアの両肩をしっかりと掴み、何度も何度も揺さ振った。しかし、彼の呼びかけに対しチュリアが返事を返すことは無い。ただ黙ったまま、クレイの力に身をゆだね、ユサユサと揺れているだけだった。

肉の一撃が致命傷となったのだろう。左胸、心臓を直接貫いたのだ、即死は免れられないだろう。

「嫌ですよ…こんなの…俺は絶対に嫌ですよ！！！」

そう叫びつつ、クレイは彼女の胸に突き刺さったままの肉を、両

手で一気に引き抜いた。こういう時、刺さっているものを抜いてはいけない。それは一般常識としては当たり前の事だ。何故ならその物体が傷口の蓋になっていて、引き抜くことによってそこから大量の血が噴出すからである。そしてその現象は、例に漏れる事無くクレイに大量の返り血を浴びせる結果となった。心臓の鼓動に合わせ、何度も何度も血が噴き上がる。

その光景にクレイは絶句した。彼は無意識のうちに肉を引き抜いていたのだ。その結果、大量の血が溢れる結果になった。見方を少し変えると、自分がチュリアに対し終止符を打ってしまったのだと、彼は瞬時にそう判断する。その事実が彼の心に重くのしかかり、その積載限度を超えてしまったのだろう。そのまま彼は意識を失い、チュリアに覆いかぶさるように倒れこんだ。

部屋には、アリシアの小さな息使いだけが聞こえている。両肩を上下させ、ゆっくりと確実に呼吸を整えていた。

視線は鋭いまま、目の前の肉の塊に向けられたままだ。やがて、その鋭さを放つ両目から涙が溢れてくる。結局、使いたくも無い魔剣の力を無理に使ったところでこの有様、それが彼女は悔しかった。そして、息を整えることで戦いからの恐怖や、人間ではないにしろ生を奪ったという困惑から開放された事が彼女の涙の理由だった。

「うっ：うっ：。」

勝手に声が漏れてくる。喉の奥からこみ上げる嗚咽が、声となって出てしまうのだ。始めは我慢していたが、徐々に息苦しくなってきた、最終的には大声で泣き散らす。

「こんな惨めな自分を今は誰にも見られたくは無い。」「それに、

目の前の光景を見たくも無いし、後ろの2人の状況も見たくは無い。「電気が消えていてよかった。」彼女は泣きながら、心の中でそう思った。だが、誰かが彼女の心の中を見透かし、絶望の底に落とそうとしているのだろうか。急に部屋の明かりが点いたのだった。

アリシアは急に周りが明るくなったことに気がつき、驚いて閉じていた目を開けてしまう。不意に、肉の塊の強烈なビジュアルが飛び込んできた。

目の前のそれは本当に肉の塊そのものだった。皮膚は無く、もちろん体毛も一切無い、幾重にも巡らされた血管が容易に確認できる。至る所に刺し傷があり、そこから紅い液体が力なく吹き出していた。それは、まさに自分がつけた傷跡なのだと直ぐに理解する。

肉の丁度中央の辺りには顔があり、白目をむいてじっとこちらを見ている。口は叫びを上げた状態で大きく開かれ、そのまま固まっているようだ。でも、どこことなく自分に似ているという印象を受けた。

アリシアの中で、また目を閉じてしまいたいという気持ちと、逃げてばかりではいけないという気持ちが葛藤した。だが直ぐに後者の気持ちが前者を凌駕し、更に観察を続けさせる。不思議なことに、肉の塊を見れば見るほど恐怖心は消えていくようだった。

肉の塊に、腕や足は見当たらない。ただ、様々な所から伸びる触手のようなものがあるだけだ。それらは全て、鋭く研いだ刃物のようで、先端に行くにつれて細く薄くなっている。そしてその先端付近に、2人の黒兵士が覆いかぶさる形で倒れているのが確認できた。先ほどまで暗闇だったせいで、この2人が黒兵士なのだとこの時になって初めて知ったのだ。

黒兵士の周りには、血の海が広がっている。もう2人共生きてはいないだろうと、アリシアはそう思う。それが自分の救えなかった尊い二つの命だと思うと、心が締め付けられる思いだった。同時に肉の塊への怒りが込み上げ、そちらへ向き直り、そして小さく呟いた。

「私はオマエを絶対に許さない…。」

その言葉は肉の塊と、そして自分自身へと向けられたものだ。二つの命を奪った者への警告と、それを救えなかった者への戒めである。

「う…うう…。」

「…！」

後ろから急に声が聞こえたので、アリシアは心臓が飛び出してしまいそうなほど驚いた。そして直ぐに、再び兵士たちの方に振り返る。見ると上に覆いかぶさっている方の兵士が、微かにだが動いているように見えた。

「まだ…生きてる。」

そう言いつつ、体は勝手に動く。一つの命を救えたのだという喜びから、兵士の所へと無意識に駆け出していた。

第二十二話へ続く…

第3章 「22. 森／＼2」 (前書き)

いよいよ、本作も第三章へへ
俺がここまで書き進められたのも、
読んでくれる読者様のおかげですW
今後とも宜しくお願いします。

第3章 「22. 森／＼2」

目の前には森が広がっている。紅蓮の炎が燃え盛り、赤く染められた樹海。気がつくと、彼女はなぜかそこにいた。自分の姿を見ると、先ほどまでと何も変わらず、生まれたままの格好だった。自分は薄暗い地下にいたはずなのに、今は見覚えの無い場所にいる。こんな現象が現実世界で起こりうるはずは無い。これは夢の世界なのだ、彼女はすぐに理解する。

彼女、つまりは黒兵士の隊長が言った「アイツなら：さっき地下の書庫にいたぜ。」その言葉に従い、地下へと足を運んだもう一人のアリシア。実際地下に來たのだが、そこに書庫という部屋は存在していなかった。それでも尚、書庫を探し地下を彷徨っていた途中、急に周りの明かりが消えた。そしてどうしたものかと思案している所に、奇妙な物体が急に襲い掛かってきたのだ。

視界を覆いつくす暗闇のせいで、その姿をハッキリと確認することはできなかった。だが、例えるなら人の形を模した肉の塊といふべきか、明らかに人間ではなかったように思える。面妖で異様な雰囲気をかもし出し、奇声を上げ襲い掛かるそいつをアリシアは瞬時に命を奪う。そしてそのまま徐々に意識が薄れ、今に至るといったところだ。

紅い森は、どこまでも果てしなく続いているかのように見えた。ふと上を見上げると、木々の間から覗く空もまた紅一色。この世界の至る所が真紅に染まり、辺り一面は炎に包まれている。

不思議なことに、周りでバチバチと火の粉を散らす紅蓮の炎から、熱いという感覚は感じる事はない。やはりこれは夢の世界。視覚以

外の感覚が、ここでは無意味なのだとアリシアはそう思った。

そして彼女が、一步前に右足を踏み出そうとしたまさにその時、後ろから聞きなれない声が届く。

「アリシア！アリシアアー！」

自分の名前を呼ぶその声は、女性のものであった。気になって振り向くと、そこには黒髪で細身の女性が、必死にこちらに駆けて来る姿が見える。自分に降りかかる火の粉を払うことも無く、息も絶え絶えといった感じだった。年の頃なら40代ぐらいだろうか、その顔に見覚えは無かったが、綺麗な人だという印象を受ける。

やっとの事で女性がアリシアの元にたどり着き、そして急にアリシアの左腕を掴んだ。

「痛い…。」

別に痛みは感じてはいなかったが、掴まれた事を視覚で判断して、反射的に声が漏れてしまった。女性はそのまま息を整える事も無く口を開く。

「お父さんが大変なの！あの人を止められるのは、もうアナタしかいない！！一緒に来て。」

叫ぶようにそう言って、掴んだ腕をぐいぐいと引っ張った。アリシアをどこかへ連れて行こうとしているのだ。しかし、アリシアは全く何のことなのか解らない。お父さんと言われても誰のことなのか、何故止めなくてはならないのか、自分に一体何ができるのか、全てが解らない。目の前で必死に自分をどこかへ誘おうとする女性

に対し、アリシアは困惑し怒りを覚える。そして、掴まれた腕を力いっぱい振りほどいた。

「離してよ！あなたは一体誰なの！？私には何の事なのかさっぱりなんだけど！」

そう言ってアリシアは二歩ほど下がり、女性から少し距離をとった。だが女性はすぐにまたアリシアへと近づき、先ほどと同じく彼女の腕を掴む。どうやらアリシアの言葉を全く聞いていない、そういった感じだった。

「お父さんが大変なの！あの人を止められるのは、もうアナタしかいない！！一緒に来て。」

さっきと同じ言葉を繰り返す女性。それに対し、アリシアは少し気味が悪くなる。女性の声のトーンや、言葉と言葉の間、ちょっとした仕草。そういったものが先ほどと全く同じように感じられたからだ。例えるなら巻き戻し再生のように、同じことが繰り返されているのだ。そして女性は、またアリシアの腕をぐいぐい引っ張った。

目の前で繰り返される光景にアリシアは更に困惑するが、「どうやら自分は彼女に従うしかないんだ。」と思い、引かれる力に身を委ねる事にした。

その途端、思った以上の力で引っ張られ、少し前につんのめる形になってしまう。慌てて体勢を立て直し、女性が進むスピードに歩調を合わせ前へと進む。

そうとう切羽詰った状況なのだろう、女性は駆け足というよりは全速力に近い速さでどんどん森の奥へ進んでいる。もちろん掴んだ

腕を離す事はなかった。か細い女性の握力とは思えない程の強い力が、掴まれた腕を通して伝わってきた。「一体何処へ連れて行かれるのだろう…。」心の中で不安を抱きつつ、アリシアはとにかく走る。

そして徐々に彼女の心の中に変化が生まれていく。意味も解らず一心不乱に走っていたはずなのに、今ではその場所へ向わなくてはいけないのだ、という使命感に似た感情が生まれていた。

どれぐらい走ったのだろう。急に大きく開けた場所に出た。アリシアにはそこが目的地なのだとすぐに察する事ができた。それは自分を導く女性の走る速さが遅くなった為である。ようやく掴まれていた腕も開放された。

その広場には無数の異形の者たちがひしめき、中央にはとてつもなく巨大な剣が突き刺さっている。よく観察すると周りの異形の者たちは皆、大剣に対し攻撃を仕掛けてるように見える。だが何処を見渡しても、この女性が言う父親らしい人間の姿は無い。

「私たちを守ろうとして、あの人はあんな姿になってしまった…。このままだと無に還ってしまおう…。だからお願いアリシア、あの人を殺して…。」

アリシアの横で、同じく広場の無残な光景を見ていた女性が小さくそう言った。もちろん彼女の言う「あの人」が、誰のことを指しているのかは解らない。ただ、「あんな姿」という事は、もはや人の姿はしていないのだという事は解った。しかし目の前で戦いを繰り広げる全ての存在が、もはや人間の姿ではない。全く見当がつかないままだ。そんな状況の中、アリシアは思いついた疑問を彼女に投げかける。

「私は一体何をすればいいの？」

たぶん返事は返ってこないだろうと思った。どうやら隣にいる存在は、先ほどから自分の話は全く聞いていないと思っていたからだ。だが、どうやら状況に合った会話は成立するらしく、答えはすぐに返ってきた。しかし、全く予想もしていなかった言葉だった。

「アリシア！私を殺しなさい！」

女性は一言だけそう言う。アリシアはすぐにその言葉を理解する事はできず、頭の中で何度も響いた。

第二十三話へつづく…

「23. 森／＼3」

こちらの様子を覗う女性の表情は、どこかもの悲しげでどこか緊張しているように感じられた。唐突に言い捨てられた言葉の意味を、ようやく理解することができると、嫌悪の念が沸々と沸いてくる。自分を殺せと言われ、そのまま「はい、そうですか。」とその指示に従えるはずは無い。アリシアは女性の次の言葉を待つ。

「・・・・・・・・・・。」

だが、幾ら待ってみても、女性はそれ以上口を開こうとはしなかった。逆に、彼女自身アリシアの返事を待っている様に見える。「一体この状況で何と言えはいいんだろう？」アリシアは深く悩んだ。

広場の方からは轟音が響き、異形の者たちの奇怪な雄叫びが聞こえてくる。それらの音が耳の奥で反響して脳を揺さ振り、思案するアリシアにとって邪魔以外の何モノでもなかった。

「うるさい！ちよつとは静かにしてよ！」

気がつけば、そう叫びだしていた。すぐに我に返り女性のほうに視線を戻すと、また不思議な感覚がアリシアを襲う。それは先ほど、女性が同じ言葉を繰り返した時と似た感覚だ。そして、女性は口を開いた。

「アリシア！私を殺しなさい！」

その声はやはりさっきと同じトーンで、同じ呼吸で、同じ仕草だった。また、同じ時間が繰り返されている。アリシアがそう思った

刹那、彼女を軽いめまいに似た感覚が襲った。体の力が一瞬抜け、頭がクラクラする。そして、足元がフワリと浮くような感じがした。

「お母さん、私にはそんな事出来ないよ…。」

その声は、自分の中から聞こえたかのように思えたのだが、その実は全く違っていた。口が勝手に動き、思いもしない言葉が勝手に吐き出されているのだ。アリシアは心の中で更に動揺する。何かのスイッチが入ったかのように、口だけではなく全身が勝手に動き始めたからだ。意識だけは確かに自分なのに、行動や発言は誰かに制御されている。なんとも奇妙な感覚だった。

「でもやるしかないのよ、アリシア。お父さんを神のもとへ還せるのは、もうあなた以外に居ないのだから…。」

「……。」

「このまま、あの人を無に還す訳にはいかない。それは、弟神ドルマ様の意思に反することになる。あなただってそれは解るでしょう？」

「……。」

2人の会話が自分の意思とは関係なく進む。それはまるで、客席から悲劇でも見ている感覚だ。意識だけの自分ではや蚊帳の外、この先の行方を見守ることしかできないで居た。

少し時間を置いて、アリシアは一つ頷いた。それを見た女性もまた大きく何度も頷き、両目には涙を溜めている。その光景が見た時、アリシアの中でも熱いものが込み上げてくるのがわかった。そして

気がつく、アリシア自身もまた涙で頬を濡らしている。何故だか、意識だけのアリシアも悲しくなってきた。真っ直ぐこちらを見つめ涙する女性の姿を見た時から、意識の中のアリシアは悲しみの奥底へと突き落とされていたのだ。

目の前の女性が、未だ誰なのかはハッキリとは解ってはいないのに。自分がどうしてこんな状況に置かれているのかも解ってはいないのに。なんで自分はこんな悲しい気持ちになるのだろうと、意識の中のアリシアには不思議で仕方なかった。

アリシアは涙を両腕で拭い、広場のほうへと視線を移す。そして彼女が見つめる先には、森の木々達を遥かに越えるほど大きな剣があった。その時になって意識のアリシアも理解する。それこそが彼女の言う父親なのだという事に。

「さあアリシア：私を殺して：そして無への暴走を続けるあの人を救って…。」

涙声で女性は言う。そしてその女性こそが自分の母親なのだという事も、今になって認めることができた。

「あなたは魔剣ギルディアの娘であり、そして女神の名を継ぐ魔剣アリシア：あなたになら必ずできる。」

そう言って母親はそっとアリシアの両手を取った。そしてゆっくりと、自分の心臓の辺りへとそれを導く。

どんどん涙が溢れてきた。涙が邪魔して母親の顔を見ることができない。だが、両手を持たれているせいで、もう涙を拭う事もできなかった。そして、自分の手を持つ母親の両手に力が込められる。

いよいよ自分はこの人の尊い命を奪うのだと思うと、更に涙が止まらない。

「アリシア：私はあの人の事も、そしてあなたの事も心から愛している。：私の子供として生まれて来てくれて本当にありがとう：。」

そう言い終わったかと思うと、母親は一気にアリシアの両手を自分の胸へと突き刺した。生暖かい嫌な感覚が伝わってくる。

「イヤアアアアアアアアア！！！！！！」

紅く染まった森に、アリシアの悲痛の叫びが響く。刹那、周りの全てが闇に覆われた。意識がだんだん遠くなっていく。そして：森は消えた：。

※

「イヤアアアアアアアアア！！！！」

薄暗い地下通路にアリシアの声が響いた。とっさに状態を起こし、辺りを確認する。今の光景は全て夢なのだとすぐに思った。両頬に生暖かいものを感じ、右手でそれを拭う。それは涙だった。夢の中だけではなく、現実でも涙を流していたのだ。

母親の言葉と顔が脳裏に焼きついて離れない。「あれが、私の母親：。」アリシアは小さく呟き、そして天井を見上げ少し思いにふ

ける。「あれは夢だったのだろうか?」「もしかして自分に残された記憶の断片?」「でも母親にも、あの森にも全く見覚えは無い…。」「考えれば考えるほど頭が混乱していく。無い記憶を探ったところで、何も見つかるはずは無いのだ。そして頭が痛くなり、考えるのを中断した。

視線を目の前へと戻すと、そこには人間の形をした肉の塊が無残に地面に横たわっているのが見える。先ほど戦っていた時は辺り一面真っ暗で解らなかったが、今は小さな明かりが点いている。肉の塊に皮膚や体毛のようなものは見当たらない。先の戦いで切り落とした右肩からは、大量の血があふれ出していた。それは人間のモノと同じ紅い色をしている。

紅い血を見た時、急に嫌な感覚が蘇って来る。母親の胸を突き刺した、生暖かい感覚。あれは夢だったはずなのに、今は自分の両手にハッキリと感触の余韻がある。

「お母さん…。」

震える両手を見つめ、アリシアは一人呟いた。

第二十四話へつづく…

「23. 森／3」 (後書き)

なかなか面白いと思われたら、

下のランキング用バナーを押してもらえると助かります。

リンク先には、色々面白い作品がありますよw

「24. 3つの石像」(前書き)

作者はこのところ風邪気味で、昨日は更新をオヤスミしてしまいました
した^^;

今後とも宜しく願いますw

「24. 3つの石像」

「ハア・・・。」

ため息一つつき、心を落ち着かせた。だが、森の夢での強烈な映像が脳裏にこびり付き、離れようとはしない。目を閉じれば、そこにはまた森があるんじゃないか、そう思えるほど鮮明な夢。アリシアは怖くなって、目を閉じることを必死に我慢した。しかし、それにも限界がある。数秒後、自分の意識とは関係なく瞼は閉じ、そして開いた。そこに森の存在はないと解ると、少し心が落ち着いてくる。

やがて、自分の目的を思い出す。黒兵士の隊長に促され、ある人物を探しに地下へ来た。だが、黒兵士が言っていた「書庫」など何処にも見当たらなかったのだ。ある人物、それはもちろんあの部屋で自分をナイフで殺そうとした、黒い服を着た男である。ただ、探し出し見つけたとして、黒服をどうしたいのかは自分でも解らない。漠然と「探す」という行為を、自分の脳が要求しているのだった。

本来の目的を思い出し、アリシアの中で怒りが込み上げてくる。それは黒服へ向けられたものではなく、嘘をつき自分を地下へと誘った黒兵士に対してのものだ。

一通り地下を巡り、それらしい部屋は全て調べた。あと残されているのは、目の前の大きな扉の部屋だけ。しかしその扉の横のプレートには「神の部屋」と、そう書かれているだけで確実に目的の「書庫」ではなかった。

先ほどは、そのプレートを確認したところで電気が消え、そしてアイツが急に襲い掛かってきた。そこまですり出し、少し悩む。この部屋を調べるべきか否かを。だがすぐに考える事をやめる。案ずるより生むが易し、もともとアリシアは考えて行動するタイプではなかった。とりあえず部屋に入る事に決める。

ゆっくりと立ち上がり、部屋の扉を見据えた。どうやらこの部屋は他とは違い、自動の扉ではなく押すか引くかして開けるタイプのようだった。手すり型のノブが一個、見て取れた。

一步一步確実に、そして辺りに敵の気配が無いかを窺いながら扉へと進む。やがて扉にたどり着き、右手でノブを掴んだ。そして一気に引き開ける。扉の隙間から風が漏れ、アリシアの髪を舞い上がらせた。

「!!」

部屋の中を見て彼女は言葉を失う。今までの部屋とは明らかに違う雰囲気をもし出していた。足元から部屋の奥へと赤い絨毯が伸び、その先には白い布を掛けられた小さな台がある。金や銀の器や水差しや蝋燭台等がその台の上に並べられ。蝋燭が4本ゆらゆらと燃えている。

その奥には大きな石像が三体並んでいるのが見える。中央の像は男の姿で力強く腕を組み、仁王立ちを決め、怒りの形相でこちらを見下ろす。その左の像も男の姿だったが、岩のようなものに腰を下ろし、何かの本を読む格好だった。その表情はとても穏やかである。そして右側の像だけは女の姿をしており、左手には丸い玉のようなものを、右手には杖を持って、こちらに優しく微笑みかけるように立っている。

この部屋は「神の部屋」。神を奉り崇める、大聖堂なのだ。その荘厳さに圧倒され、アリシアは言葉を失い、呆然と立ち尽くしているようだった。

両脇の壁に視線をめぐらせると、等間隔で蠟燭台が設置され、その間を埋め尽くす形で見事な絵画が描かれている。左側の壁に描かれた絵は、たぶん本を読む石造の人物がモチーフになっているのだろう。何を意味しているのかはわからないが、男の周りにいくつかの光の塊のようなものがあり、それを集め一つにまとめているといった感じだ。

右側の壁の絵は女の石造の人物がモチーフのようで、動物たちが駆け回る大地を上から優しく見下ろしているようだった。その左手に持たれた玉からは光の束が伸び、それは動物が駆ける出発点へ届いている。その光から生物が生まれ出るという事なのだろうか。

おかしい事にもう一人、仁王立ちをする男の絵は見当たらない。もう一度左と右の壁に視線を巡らせていると、不意に声が聞こえた。

「どちら様ですか…。」

しわがれた男の声。声の主は、石造の右手に施された小さなアーチからそつと姿を現す。上下を白い法衣で身を包み、顎に蓄えた髭も、髪も、全てが白一色といった感じだ。まさに神に仕える老神官といったところだろう。神官は、石造の台座の所まで来たところで足を止めそれぞれの石造へと三度頭を垂れた。そしてアリシアのほうへと向き直る。

「ほほう…これはまた奇怪な格好をしておられますなあ…。とり

あえず空気が汚れてしまわぬうちに、その扉を閉めてもらえぬだろうか…。」

アリシアは大人しく指示に従い、ゆっくりと扉を閉める。閉まりきったところで、ガコォオンと重厚な音が室内の静寂の邪魔をした。空気が変わった、アリシアはそう感じる。先ほどの感じとは違い、冷ややかな清涼感が彼女の体を包んでいるように思えたのだ。

「さて…生まれたままの乙女が一人。神の言葉でも告げに來られたのかな？」

シワシワの皮膚に囲まれた二つの目を細め、神官は軽く笑っているようだった。自分を見つめるその表情に、いやらしい印象は全く受けない。逆にその表情のおかげで心が安らぎ、大きな癒しを感じる。

「あの…この部屋は一体？」

アリシアは湧き上がる疑問を、そのまま口に出し老神官に問う。

「これはまた奇怪な質問をしますな。この部屋が何なのかかわからないと…まさか冗談で言っている訳でもありますまい。この施設の人間でもなさそうだし、やはり神の使いか…。」

そう言って神官は少し悩むそぶりを見せる。別にかかっているわけではなく、本気で考えているといった感じだった。自分は何かおかしい事を聞いてしまったのかと、アリシアも困った顔になる。

そしてまた部屋に沈黙が流れた。アリシアは自分の事を説明しようとして色々考え、若干の思案の後ようやく口を開く。

「私…私、記憶が無いの。だから自分の事も、この施設の事も、そしてこの部屋の事も何一つ解らなくて…。」

アリシアの言葉に、なるほど納得したという感じで神官は顔を上げ彼女を見つめた。そしてゆっくりと彼女の方に近づきながら話し始める。

「なるほど、記憶がないと。それではあそこに並ぶ三つの石像についても何も思い出せないと言うのですか？」

「……。」

「では、自分の事はおろか、まさか世界についても何もわからないと？」

「……。」

神官の問いかけに、彼女は無言のまま頷き答えた。問答が続く中、神官がアリシアの脇に到着する。そして「うゝむ…。」とまた暫く考え込み、アリシアの体を凝視した。

「それは困りましたな…。」

神官は彼女の体中を一通り見渡し、一言呟く。そこでアリシアは、一つだけ自分には解ることがあるということを思いつく。

「あ…自分の名前だけは解るわ。私、アリシアって言うのよ。」

「…！」

アリシアという言葉聞き、神官の表情が一変する。穏やかだった表情が、一気に驚きの顔に変わったのが彼女にもすぐに解った。そして、また自分はおかしな発言をしたのかと困惑する。

「アリシアと…。まさか、女神アリーシア様の生まれ変わりか…。」

神官はすぐに振り向き、左側の石造、女の姿をした石造のほうを見た。その石造こそが、神官の言う女神を模したものなのだろう。

アリシアも只ならぬ神官の雰囲気につき、同じく女神の石造に目をやる。不意に夢の中の母親の言葉が頭に浮かんだ。

第二十五話へ続く…

「25. 世界のルール」

「あなたは魔剣ギルディアの娘であり、そして女神の名を継ぐ魔剣アリシア：」

夢の中で、確かに母親はそう言っていた。そして今は目の前の神官が、自分が女神アリシアの生まれ変わりなのだという。そんな事を言われても彼女自身チンプンカンプンだった。女神の名を継いだとして、又は女神の生まれ変わりだったとして、自分は一体何者なのだろう。自分の持つこの力は、人を傷つけることしかできない。なのに、そんな殺人鬼の自分が女神の生まれ変わりのはずは無い。そうやって自分を自嘲するばかりだった。

やがて女神像を見ていた神官がまたアリシアの方へと振り返えた。その表情は、もとの温厚さを取り戻していた。

「いや、そんなはずはあるまい。女神の名を継ぐアリシア、それは魔剣と呼ばれたか弱い娘。今は父とともに無に還り、もうこの世界に戻る事も許されまい。」

そう言って、うんうんと一人頷き、自分の中だけで納得しているようだった。しかし、アリシアにしてみれば、その心中は穏やかではなかった。自分は確かにアリシアであるはずなのに、老神官はその存在自体を完全否定しているのだ。

「そんなはずは無いってどういうことよ！私が嘘を言っているとでも言うの？私はアリシアなの！」

自分の、アリシアの存在を否定され怒りを覚えた彼女は、一歩身

を乗り出し怒鳴った。その様に少し驚いた様子で、両肩をすぼめる神官。これは困ったと言いたげな顔で、じっとアリシアを見ている。彼女の顔はひどい剣幕で、まだ怒りが収まっては居ない様子だった。

「大体、無に還るって一体なによ！女神の名前を継いで居なくても、魔剣じゃなくても、私は真正銘アリシアなの！わかった！？」

湧き上がる怒りをそのまま言葉に込め、アリシアは更に神官に食って掛かる。それは、今まで溜まっていたストレスが一気に爆発した、そんな感じだった。自分は誰かも解らずに見た事も無い施設に閉じ込められ、普通では考えられない力で簡単に異形の者を倒せてしまう。そういった状況が、彼女の中で大きな障壁になっていたようだ。

その様子をじっと覗いていた神官が、やがて口を開く。

「ここは偉大な神の聖域。そう言った態度は慎んでいただきたい…と言っても無理じゃろうな。」

「当たり前でしょう！偉大な神とか、アリーシアとか今の私には関係ないの！もしそれでもアリシアじゃないって言い張るなら、私が納得できるように根拠を教えてよ！」

「うむ…。」

怒りを露にするアリシアの言動に対し、神官はそれでも少し安心した。一方的に怒り散らすだけなら手に負えないが、彼女は自分の言い分を聞こうとしているからだ。

「では、この老いた神官の話に少し付き合ってもらえますかな？」

それを聴けばアナタも納得できるはず…。」

そう言われ、アリシアは少し戸惑う。込み上げる怒りに全てをゆだね根拠を求めたが、実際説明されるのが怖かった。それは聞けば、自分はアリシアではないと納得できると言う。話の最後には絶望しかまっではいないと、そう予感せずにはいられないのだ。

彼女は言葉を詰まらせた。聞きたい気持ちは確かにある。でも聞きたくない気持ちのほうが遥かに凌駕している。

数秒、いや数分悩んだ挙句、アリシアは聞くことを選択した。

「解ったわ、あなたの話を聞こうじゃない。」

「そうですか。ただこの話はアナタにとってとても辛い話になるやもしれん、充分心して聞きなさい。」

「もう覚悟はできてる。」

そう言ってアリシアは、その場に腰を下ろす。そして神官を見上げるその表情には、もはや迷いは無い。全てを受け入れるという覚悟が見て取れた。神官は彼女のその決意の表情を読み取り、力強く頷いた。そしておもむろ話始める。

「あなたは記憶が無く、この世界についても何も解らないとおっしゃいましたな…。ではまず、この世界について話さねばなりませんまい。」

神官は、ゆっくりと言葉を選びつつそう言った。アリシアもその言葉に耳を寄せ、深く聞き入る。

神官の話をまとめるとこんな感じだった。

※

この世界「アゼル」はもともと三人の神が創造した。まず、兄神アグニが世界の素^{ピース}を作る。そして弟神ドルマがそのピースを組み合わせて、世界の土台を作った。最後に妹の女神アリーシアが、残ったピースで生命を作ったのです。それが世界の生まれた瞬間でした。そして三神はそれから暫く、そつとアゼルを見守っていました。

だが、愚かな種族が理性を持ち、知恵を持ち、文化を持ち、やがてその手に武器を持った。それが人間といわれる種族だ。自分達の私利私欲の為、人間たちは来る日も来る日も争いを続けた。その中で神への信仰を、そして存在自体を忘れていく。それが兄神アグニには許せなかったのです。

アグニは世界そのものを消してしまおうとする。だが弟神ドルマと女神アリーシアが、それを強く拒んだ。人間というごく少ない種族の為に、全てを消し去るのは2人にとっては理解しがたかったのだ。

そして三神は話し合い、人間に対して一つのルールを作った。女神アリーシアが、人間の中に「魂石」と言われるモノを埋め込み、人間が罪を重ねることとそこに蓄積されるようにしたのだ。そして、戦いの好きな人間に利益があるように、罪を溜めると戦いにおける能力が上がるという風にした。もちろん戦いを好む人間たちは、すぐに罪が溜まり力を高めていきました。

すると人間たちの姿にも変化がおき始める。罪を重ねるごとに、

徐々にだが異形のモノの姿になっていった。それが後に言われる「魔」である。その変化は体内に埋め込まれた「魂石」によって様々で、その中に魔剣や魔銃、魔に堕ちた天使等の種類が存在する。姿が変わることによって、より強い力を得るという事に人間たちは気がつき、更なる力を欲し、戦いを、罪を求めた。それが三神の作戦の肝だった。

罪を重ねる先に待っているのは、力を得るというメリットだけではもちろん無い。「魂石」の要領を罪が超えてしまうと、最大の罰が人間たちを襲う。それが「無に還る」事だったのだ。普通人間は死んだ後も「輪廻転生」を繰り返し、新たな命として生まれ変わる。だが、「無に還る」とはその一切を断ち切れ、体を形成するピースそのものが消えてなくなってしまうのです。

やがて、無に還る事を恐れ始める人間たち。いくら強大な力を持ったところで、存在がなくなってしまうえば全く意味が無い。それを回避する術、それが神への「祈り」や「懺悔」だった。だから、人々は神を奉り、祈り、懺悔して溜まった罪を減らしていく。

三神の目論見は、見事人間たちの忘れていた信仰心を取り戻し、自分達の存在を知らしめる結果になりました。

第二十六話へ続く…

「26. 二つの思想」(前書き)

お陰さまでアクセス数6000突破!!
今後もしっかりお願いしますw

あと、評価のほうもお忘れなくww

「26. 二つの思想」

やがて、更に時は流れ、人間たちの中に二つの思想が発起しました。

一つは神の意思に身を任せ、罪を重ね、そして無に還る事こそが神への最高の信仰の証と考える思想。無に還りピースを神に還すことで、更なる高みへと行けると信じる「アグニ教」。

もう一つは、神の意思に背くことなく普通に生活をし、その中で得る罪は「祈り」や「懺悔」によって神に返すという思想。神より頂いたピースを無に還す事は、神への冒瀆。無に還る事無く輪廻転生を繰り返し、罪を神に返すことで、平穏で幸せな生活を送れると信じる「ドルマ教」。

大きく分けてこの二つの考えが、人間の生活に大きな影響を与えました。二つの思想はそれぞれが絶対に交わることは無く、何年にもわたりいがみ合っていたのです。

さて、そろそろ話をアリシアに戻しましょう。アリシアの父ギルディアは元々「アグニ教」の人間でした。戦いに身を置き、やがては魔剣となります。その存在は、その昔、世界を混沌へと誘いそして救った最強の魔剣「セシリア」にも匹敵するのでは、とまで言われていました。

ある日の戦いの中で、傷つき森を彷徨っていたギルディアは、一人の「ドルマ教」の女性に出会います。彼女こそアリシアの母「ミリア」です。ミリアは傷ついたギルディアを見ると、「思想」に関係なく彼の手当てをしてあげました。その事で彼はミリアに好意を

持ち、自分の信じた「ドルマ」を捨て、彼女との愛を選ぶ事になります。2人へ更に遠方の森へと逃げ、ひっそりと暮らしました。

ギルディアは、一日の殆どの時間を神への「懺悔」に費やします。自分が無に還り、愛するものが悲しまないように。そして自分自身もミリアとは永遠に離れたくは無いと思ったからです。徐々に彼は普通の人間へと近づいていきました。

そんなある日、2人の間に一人の女の子が生まれます。二人は新たな命の誕生と、二つの存在「魔」と「人間」の間に生まれた奇跡の子だと大いに喜びます。そして、二つの思想が平和に交わる未来への希望を込めて、それらとは関係の無い女神の名を子供につけたのです。それが「アリシア」でした。

それから数年三人は、森の中で幸せな生活を送っていました。やがてアリシアも大きくなり17歳になった頃、森を大きな轟音とともに異形のモノたちが押し寄せてきたのです。それはギルディアとミリアが、日ごろ心配していたことが現実になった瞬間です。「アグニ教」の大部隊が教団を捨てた裏切り者、魔剣ギルディアを葬りに来たのです。

もちろん彼は、大切な家族を守る為戦うことを選びます。何百何千と押し寄せる異形の者を魔剣の力で殺し、わずか数分でその半分以上を倒したのです。やがては魔剣本来の姿に戻りました。その姿はとてつもなく大きな大剣だったと言われています。

そして彼は徐々に自我を失い、無への暴走を始めたのです。

そこでミリアは、その暴走を止めるにはもう死しか術は無いと思います。それができるのは魔剣の血を引くアリシアしかいないと。

そうして彼女は、アリシアにまず自分の命を捧げます。そうすることで彼女を「魔剣」へと目覚めさせる為です。肉親殺 しは重罪。アリシアはすぐに魔剣となり、押しかける異形の者を倒しつつ、父親の元へ全速力で駆けつけたそうです。

その中でアリシアも徐々に人間から剣の姿へと変貌を遂げます。最後には空高く飛び跳ね、そのまま魔剣ギルディアを貫いたのです。その瞬間、大きな力と力がぶつかり合った結果、大きな衝撃波が生まれ周りに居た異形のモノの殆どは命を落としました。

そして魔剣ギルディアは死に、魔剣アリシアは重罪を二つも重ねた為、無に還りました。これが今に伝わる、10年前に起きた魔剣アリシアの話。

※

どれぐらいの時間が経ったのか解らない。だが、老神官の長い話がやっと終わったといった感じだった。神官自身話の途中で疲れを感じたらしく、床に腰を下ろしている。それでもアリシアはそういった事には気もとめず、ただただ真剣に、神官の言葉に聞き入っていた。

「どうですか？これで納得してもらえたじやろうか：。」

全てを話し終え、改めて彼女に答えを求めた。見ると彼女は深くうなだれているように見える。全てとまではいかないものの、ある程度を理解し、そして絶望しているのだ。神官の今の話が嘘だとはとても思えない。なぜなら話の途中からはアリシアもよく知っていた。それは、先ほど夢で見た内容そのままだったからである。

「……。」

夢の出来事を思い出し、言葉を失うアリシア。その姿を見て、どうやら納得してもらえたのだと安堵する神官。

「結局のところ、あなたが誰なのかは解らな…」

「私、何故だかその話知っていたの。途中からだけど、さっき夢で同じ内容を見たわ。」

神官の言葉を遮り、突然彼女は口を開いた。神官は少し驚いたが、彼女の話ちゃんと聞いた。そして小さく「ほほう…。」と返す。

「とてもリアルな光景だった。森が燃えてて大きな剣があつて、お母さんが私の両手を取って自分の心臓に…」

そこまで言って言葉を詰まらせる。彼女の体が小刻みに震えていることに神官も気がついた。その姿は何か恐怖し、怯えているように見える。

神官は頭の中で慎重に言葉を選び、震える彼女にそつと言葉のかけた。

「魔剣アリシアの話はとても有名な話です。誰が伝えたのかは解からぬが、事実の話でしょう…」

そこまで言って一度言葉を遮り、女神像のほうをチラリと見る。そして数秒置いた後、また話し始めた。

「たぶん、誰かに聞いたその話が、あなたの記憶に強い印象を与えた。：そして、それが夢という形式となって見る事ができた。と、そう考えるほうが極あたりまえだと思うのだが。」

彼女を諭す様に、神官は優しく語りかける。アリシアもその話を聞いて、少し納得する。確かに、神官の言う事は間違っては居ないと思えてきたのだ。もう何もかもが解らない。自分が誰なのかも、結局は解らなくなってしまった。そう思ってアリシアは、深い深い溜息を一つついた。そこで、ゆっくりと自分に起きた出来事を思い出してみる。

自分が目覚めた時、目の前には黒い服を着たアイツが居た。そして彼が耳元で囁いた内容を思い出す。

「おはようアリシア：いや、12番目のアリシアと言うべきか。まあ、そんな事今はどうでもいいか：。」

確かに黒服は自分にそう言った。その時は全く感じていなかったが、今は深い疑問がアリシアを包む。それをそのまま口に出し、神官に問うことにした。

「目覚めた時、アイツが言っていたわ。私を12番目のアリシアだって：。私にはそれがどういう意味かは解らないけど。世界に詳しいあなたならこの言葉の意味が解る？」

「12番目？アイツ？……一体なんの事ですかな：。」

第二十七話へ続く：

「27. 初めての感情」(前書き)

評価のほうよろしくお願いします。

「27. 初めての感情」

老神官は、自分はさっぱり何も解らないと言いたげな表情をした。「一体何の事ですかな？」と逆に質問を返され、アリシアは困り果ててしまう。「それが解らないから聞いているのに…。」と、心の中できっと囁いた。

「12番目のという話は全く解りませぬ…。しかし、アイツというその人物について、もう少し詳しい説明があれば助かるのだが。」

そう言って、神官はやっとアリシアの方を見る。そこには、グツとこちらを睨み付ける二つの眼があった。詳しいことと言われても、彼女はその人物について何も知らないのだ。ただ解っているのは、黒い服を着ていたということだけ。

「その男は、黒い服を着ていた。それ以外の事は何も…。」

「ほほう…黒い服…。」

そしてまた、神官は少し悩む。アリシアは、自分の中で沸々と湧き上がるもどかしさを必死に堪え、神官の言葉を待った。黒服の顔は解っているのに、名前も素性もわからない。だから、神官に上手く伝えることができず、それがもどかしくてたまらないのだ。

「あなたもこの施設の人間なら、なんとなく解らないの？ 黒い服を着た偉そうな男よ…。」

その言葉を聞いているのかいないのか、神官はそっと目を閉じたまま沈黙を決め込み続ける。その姿は少し怒っている様にも見えた。

だからアリシアはそれ以上声をかけない。もしかすると、自分の声が彼の思案を邪魔しているのかもしれないからである。いつかは口を開くだろうと諦め、その場でじっと彼の言葉を待ち続ける。

部屋に飾られた蝋燭が、ジジジッと音を立てるのがどこから聞こえる。それほどに部屋の中は静かで、澄んでいた。

たぶんそれは数分だったのかもしれない、あるいは数秒か。ほんのわずかな時間の経過も、この部屋で緩やかに流れる時間の中では、それは数時間にも思えるほどだ。やっと神官が口を開く。

「黒い服の偉そうな男、その人物には心当たりが無いことも無いですが、その前にあなたは一つ勘違いをされているようだ。」

「え???」

アリシアは面食らったような顔になる。「勘違いとは、一体何の事なのだろう?」と、その疑問がすぐに頭を駆け巡った。

「あなたは私をこの施設の人間だとそう思っているようだが、実際のところ私はこの施設の者ではない。」

「????」

神官が話を進めるほど、アリシアの思考回路は混乱していった。実際この施設にいるのに、自分は施設の人間ではない。もはや、彼の言っている事がどこか違う国の言葉の様に思えてきた。

「私はこの施設に、監禁されているだけなのだよ。」

そう言つて神官は、神へ祈りを捧げるかのような素振りをする。それは、監禁という野蛮な言葉を使つてしまった事への祈りなのだろう。アリシアは神官のその姿を、ただ呆然と見つめ尽くしている。唐突に監禁されていると告白され、これ以上彼に何と声をかけていいものか解らなかった。やがて祈りを終えた神官が、アリシアをそつと見つめた。その顔は先ほどまでとは変わらず、穏やかである。

「もう9年ほど前になりましたか…。」

口を開くこともできない彼女の変わりに、神官は更に話を続けた。おもむろに天井を見上げ、遙か昔の出来事を思い出しているかの様に遠い目をする。

「私はとある大国の大神官を務めておりました。しかし運命のある日、目の前に白衣を着た者たちが現れ、この部屋へと連れて来られたのです。」

ゴクリと喉が鳴る音がした。神官の話に聞き入りすぎて、アリシアは思わず唾を飲み込んでしまったのだ。だが神官は、その音にも気がついていないようで、相変わらず遠い目をして話を続けようとした。

「なんでここから逃げないの？あ…ごめんなさい。」

先に声を出したのはアリシアだ。思ったことをすぐ言葉に出してしまい、彼が語る話の腰を折ってしまった事に対して軽く謝る。

「逃げる必要などないのだよ。私は神に仕える身、神への祈り場があれば、そこが私の存在する場所なのだから。」

そう言って自分自身を軽く嘲笑する。無理やり連れて来られたのなら逃げればいい。なのに、彼は逃げる必要はないというのだ。アリシアには彼の言うことが少しも理解できなかった。

「この施設の者は実に利口な方法で、私をここから出られないようにした。こんなに素晴らしい三神像を与えられれば、神官としてこれほど光栄な事は無いのだから。」

「私は神官じゃないから、あなたの言うことが全く解らないわ。」

素直にそう告げると、神官は「全くだ。」と笑い出す。その笑いのお陰で、今までの重々しい空気が一気に開放されたようだった。その姿を見ていたアリシアも、思った事を相手の顔色を覗うこともなく、そのまま口に出せるようになった様な感覚を覚える。早速、思いついた疑問を投げかけてみることにした。

「いくつか聞きたいんだけど。あの白衣の男たちは一体何者？そして、この施設は何の為のものなの？」

その疑問に神官はすぐに答えをくれた。でもそれはアリシアの求めていた答えとは若干違うものだった。

「実のところ私にも解らないのです。9年もここににいるのに？と思われるでしょうが、元々俗世の事についてはあまり興味が無いので。」

「そうなんだ…。」

「求める答えを与えられず、申し訳ない。」

残念そうな顔をするアリシアに対し、神官は頭を下げた。先ほどまでとは違い、今では自分が優位な状況にいると彼女は思った。だから、更に色々彼に聞くことに決めたようだ。

「じゃあこの部屋は一体なんの為に？」

「それは先ほどの話を聞いておられれば解ると思われるが…。この施設の、あの白衣の者たちが「罪」を神のもとへ返す為に、ここへ祈りに来るのです。」

「なるほどね…。でもちょっと待って！っていう事は、黒服の男もここに来たことがあるかもしれないって事じゃないの？」

急に何かを思いついたといった感じで、アリシアは立ち上がり、神官へと詰め寄った。だが、神官はその姿を見て笑っている。

「だからさっき、黒服には心当たりがあると言ったのだよ。あなたは、人の話をちゃんと聞けない人のようですね。」

そう言って、また笑い出した。それにつられてアリシアも笑い出す。笑いながらアリシアは、今まで感じたことの無い感情を感じていた。それは、喜怒哀楽で言うところの「楽」の感情だ。この老神官と話していると、なぜか心のそこから癒されるような不思議な感覚を覚え。そして今は湧き上がる感情を抑えられずに笑いが漏れてくる。目覚めてから今まで緊張の連続で、こんな気持ちになったのは初めてのことだった

第二十八話へ続く…

「28. 魔剣の祈り」(前書き)

評価のほうドシドシ募集してます。
よろしく願います。

「28. 魔剣の祈り」

気がつけば、アリシアはお腹を抱え大笑い。それはもう誰にも止められそうにも無かった。その笑顔は、心の底から今を楽しんでいるかのような、晴れ晴れとした表情である。神官は笑いを抑えられないといった彼女の姿を見て、満足げに笑みをこぼしている。

「なんだろう、こんな気持ちになったのは初めてだわ。あなたには不思議な力でもあるのかしら？」

大笑いしつつ、アリシアは神官に尋ねた。しかし神官は答えず、優しい顔で彼女を眺めているばかりだった。アリシアが感じた不思議な力、それは老神官に対し親近感を覚えているのだろう。自分も、そして神官もこの施設に閉じ込められている。その事実が彼女の中に、神官へ対する「好意」を生み出しているのだ。

「元々、我々神官というモノは特別な存在なのですわ。」

「え？何…？？」

神官は小さく言ったが、自分の笑い声が邪魔で彼女にはよく聞こえていない。一旦笑うのを堪え、彼女は神官の話を聞く姿勢になった。でも、まだ両肩がフルフルと震えている、何かちょっとしたきっかけがあれば、たちまち笑いの虫が騒ぎ出しそうな感じだ。

「我々神官は三神によって選ばれた存在。「魂石」を持たない存在なのだよ。」

「そうなんだ…。フフ…フ…」

神官の真面目な話も、今のアリシアには笑い話にしか聞こえない。吹き出そうになる笑いを必死に我慢した。そして、それが漏れないように口をすぼめながら言う。

「じゃあ…、あなたたちは罪が…溜まらずに、魔に…なる事は無いって事でしよう？」

そう聞くのが精一杯だった。それでも、彼の言っていた世界の規則を、ちゃんと自分は理解しているということを伝えたかったようだった。

「全くその通り。」

「思っただけど、あなたは何教の人なの？ やっぱり平和そうなドルマなのかしら？」

そう聞く頃には、笑いは少し収まっていた。神官は「ほほお」と感心したように何度も小刻みに頷いている。

「少しは私の話を聞いていたようすな。関心関心…。」

茶化すようにそう言った。それに対し、アリシアは怒る風な態度も見せず、「当たったり前でしょう。」と右手の親指を立て、元気良く答えた。

「我ら神官には、何教だとかいう概念は存在せん。3つの思想、全てのモノに祈り場は開放されておるのだよ。」

「3つの??…だってさっき思想は2つだって…。」

神官の話に対し、素直に疑問を投げるアリシア。さっきの話の内容にはアグニとドルマの二つの思想しか出てこなかったのに、神官は3つの思想と言う。もう一つ、自分の知らない思想があるのだと思ひ、そのことについて聞こうと思った。だが、先に神官が口を開いた。

「まあ…その辺の話は次回と言うことでな。あなたは誰か人探しをしていたのではないのかな？」

そう言われ、彼女は思わずハツとなる。本来の目的を忘れていた事を、今になって思い出したのだ。少しだけ怒ったような顔をして、

「どうも駄目ね。あなたと話していると、ついつい話が反れてしまう。」

「ホホホ…時として回り道こそが、案外近道だったりしますぞ。それもまた人生の面白いところですね。」

神官は得意げに、人生について教を説いたつもりだった。でも、それを聞いた本人は全く意味が解ってはいない様子で、ただ呆然と神官を見つめている。その事実が気づき、彼は一つ咳払いをした。

「あなたが探している黒い服の男、たぶん名前はゴルヴァ。何度か白衣の男を連れてここを訪れておる。」

「ゴルヴァ…。その男は何処に？」

「そこまでは私には解らない。結局、何も力にはなれなかったのお…スマン。」

神官は軽く頭を下げた。彼女は、少しだけ残念そうな顔をしたが、すぐに明るい顔に戻る。

「名前が解っただけでも助かるわ。あとは他の人に聞くことにする。」

「そう言ってもらえるとありがたい。」

「それじゃあそろそろ行くわ：色々ありがとう。」

そう言ってアリシアは振り返り、先ほど入ってきた扉の方を見た。不意に後ろから声が掛かる。

「ちょっと待ちなさい。最後に、神官としての勤めを果たさなければ。少し祈ってってはどうかかな？」

そう言われて、アリシアは素直にそれに従うことにする。自分には、多くの「罪」がある。そう思ったから、神に祈りそれを拭い去りたかったのだろう。

「こちらに來なさい。」

神官は三神像の前に施された、小さな台の所に彼女を誘った。やがてアリシアは、台の所にたどり着き一言だけ神官に聞く。

「私は、どの神に対して祈ればいいの？」

神官は思わず笑い出してしまう。アリシアには記憶が無い、故に属する思想も解らないという事を忘れていたのだ。それに対し、彼

女は苦笑する。

「とりあえず、三神全てに祈ってみてはどうだろう？それと祈り方は自由に。形式は色々あるが、目をつぶり、心の中で今までの罪を告白するだけでもよい。」

「じゃあそうさせてもらうわ。」

そう言って軽く目を閉じた。今までの罪、それに該当するような出来事を思い出す。モニタールームで白衣の男を殺したこと、黒兵士の腕を切り落としたこと、肉の塊から命を奪ったこと。その時の無残な光景が、頭の中で走馬灯のように巡る。そしてそれらを神に告白した。何度も何度も心の中で、「ごめんなさい、ごめんなさい」と謝り続ける。不意に心が安らぐ感じがした。

「おまえの罪を許す。」

低い声と高い声が交じり合った、不可思議な声が聞こえたような気がする。その声の主は神官だった。彼は何かに憑依されたかのように、白目をむいてアリシアの方に右手をかざしている。しかし、目を閉じたアリシアには気がついていないだろう。今まさに彼女の体から神官のかざされた右手へと、黒い霧のようなモノが吸い取られているという現象を。これが、神官が祈り場にいないではならない理由だ。神官の体を通してのみ、神へと罪を返すことができるのだ。

神官は白目をむいたまま、部屋の天井を見上げた。そこには、無数の光の玉のようなものに囲まれた男の絵が描かれている。男から光の玉が生まれている、そういった感じの絵だった。世界の素、ピースを作った創造の神「アグニ」だ。

アグニが雄々しい表情で見下ろす先で、心の安らぎを感じたアリアはそっと目を開ける。目の前では、普通の状態に戻った神官が微笑み見つめていた。

創造の神「アグニ」、創世の神「ドルマ」、創生の女神「アリースア」、三神は優しくそっと佇んでいる。

第二十九話へ続く…

「29. 数十分前」(前書き)

評価やコメントヨロシクお願いしますW

今後の糧になりますのでW

「29．数十分前」

時間は、また数十分前に遡る。電気が消え暗闇が広がる廊下に、2人の男の荒々しい息遣いが聞こえていた。全身を覆う黒い防具を、ガシャガシャ鳴らしながら、全速力でどこかへ向っているようだ。

「おい！ギーハ急げよ。もたもたしてると置いてくぞ！」

「ちょっと待ってくれ、隊長さんよ。」

廊下を駆け抜ける二つの存在。それは黒兵士のガーランド隊長とギーハだった。

「待ってなんかいらねえ。オマエはあいつ等が心配じゃないのか？あ？」

ガーランドの激が飛ぶ。彼が言うあいつ等とは、もちろんチュリアとクレイの事である。話している途中で通信が急に途絶えた為、心配になって二人がいるあの部屋へと向っている途中だった。

「あいつ等なら…大丈夫だって……。魔銃と…天使のゴールドンコンビ…だぜえ…。」

ギーハは息も絶え絶えに訴えかける。だが、隊長は聞く耳を持たないといった感じで、無我夢中に走っていた。自分の可愛い部下二人が、闇の中で困っている。もしかしたら、何かとんでもないことが、2人の身に起きているのかもしれない。そう思うと、体が勝手に動き、二人が待つ部屋へと足を早ませる。

しかし何故、電気が消えた真っ暗闇の中を、2人は走り抜けることができるのか？その答えは隊長にあった。ガーランド隊長が、右手に炎を持っているのだ。更に正確に説明するのなら、ガーランドは体中が業火に包まれた魔炎人^{フレイマー}なのである。彼の防具はフレイマー専用で作られた特注品。1000℃ぐらいなら、軽く耐える事ができるという。そして今は、右手の防具だけを外し、そこから魔の炎が露出している。彼らの回りは、炎のお陰である程度の明るさを保っているのだ。

その状況が、後ろを走るギーハには過酷そのものだった。隊長の右手から発せられる熱にやられ、それが原因で体力自慢のギーハもすっかり息が上がってしまっている。もうそろそろ限界も近いだろう。だんだんと足がもつれてきている。

「なあ隊長さんよお…もう少しだけ、スピードか…：火力を落としてくれないか？…クレイがいるから、たぶん…大丈夫だって…。」

「バッカヤロウ！病み上がりの新米に何ができるって言うんだ。二人に、特にチュリアにもしもの事があつたら…大隊長に合わせる顔が無いじゃねえか。」

「それは…確かに…。」

ガーランドの一言に、ギーハは言葉を詰まらせる。チュリアにもしもの事があつたら、ルキア大隊長にあわせる顔も無い。その言葉が意味するもの、それはチュリアがルキアの娘と言う事実だった。通信ではもちろん、普段から父と娘が会話する事は全くと言っていない程無い。だが、それでもルキアは彼女のことを溺愛しているのだ。その事実をガーランドも、そしてギーハも知っていた。

やがて目の前には、下の階へと続く階段が見えてきた。その階段を二つ下の階まで下りれば、2人の待つ部屋はもうすぐ。ガーランドは、一気にそれを駆け下りようとした。そして二段目まで降り掛けた時、ギーハが声を上げる。

「も：もう駄目だあ！ 足がパンパンで言うことを聞かねえ！」

そう弱音を吐くギーハに対し、怒りを覚えた隊長はすかさず振り向き、大声で一喝してやろうと思った。だが、振り向き見た光景に絶句することになる。

「なっ！！」

ギーハの肩越しに見える廊下の天井に、見たことも無い物体が張り付いている。その数は、2つ。その片方が、獣のような鋭い眼でこちらを見ていた。振り向かないほうが幸せだったな。と、ガーランドは心の中でそう思いつつ、

「ギーハ、これはツケにしとくからなッ！」

そう叫び、隊長は魔炎を従えた右手を横へ思い切り振った。刹那、魔炎から人の拳大の火球が2個生まれ、それぞれが謎の物体へと飛んでいった。ギーハにしてみれば、それは自分へ向けられたモノとしか思えないだろう。飛んでくる火球を、慌ててしゃがみ込んで回避する。そのまま火球は目標物に着弾し、軽い爆発を起こした。

「こんな時にふざけてんじゃねえよ！！！！」

しゃがんだままで、ギーハが大声で怒鳴る。その後ろで、ブチャ

リ：ブチャチャリと聞きなれない嫌な音が聞こえ、彼自身もすぐにそちらに視線を配る。そこには肉の塊が二つ、少し潰れたような感じで落ちているのが見えた。

「な：なんだこれ：。」

「フンッ！誰がお前なんぞを的にするか：。」

驚くギーハに、軽く鼻を鳴らしつつガーランドが冷たく言い放った。そして階段の上へと戻る。そして、防具をつけた左の手を、しやがんだままのギーハへと差し出した。「スマナイ：。」そう言つてギーハは隊長の手を握り、立ち上がってすぐ体勢を整える。

見ると、肉の塊はまだ動いている。ガーランドの魔炎の一撃では、致命傷とまではいかなかったようだ。肉の塊はモゾモゾと怪しくうごめき、やがては肉を伸ばし縮みさせ、お互いを絡み合わせるように上へ上へと伸びていく。二つの肉が擦れ合い、ヌチャヌチャヌチャとなんとも不気味な音を立てつつ、それは人間の形に形成されていった。

「こいつ：！奈落の奴等か：。」

ガーランドは小さく呟いた。彼は、この肉の物体の正体を知っているようだ。

「何だよ、奈落の奴等って：？」

隊長の言葉の意味が全く解らないギーハが聞く。それに対しガーランドは、肉の動きから視線を外す事無く答えた。

「ルキアが言ってた…。レプリカには必ず失敗作があって、それをここの奴等は「奈落の住人」と呼ぶそうだ。」

「……ってことはこいつ、あの魔剣の失敗作って事か？」

「確信は無いが、たぶんそうだろう…。」

その実、ガーランドの推測は的の中心を得ていた。この肉の塊は、まさに模造魔剣の失敗作。地下フロアのその更に下に施された「奈落」と呼ばれる場所へ捨てられた、「奈落の住人」なのである。

奈落の住人はゆらゆらと揺れ、まるで2人の様子を覗っているようだった。そして対峙する2人もまた、奈落のモノの出方を覗っていた。相手の攻撃手段がわからぬまま仕掛けるのは素人の戦い方。隊長もギーハも戦いのプロである、不意に飛び込むようなバカ真似はするはずが無い。

お互い一定の距離を保ちつつ、膠着状態が続く。痺れを切らし先に動く事は、自分に負け、そして戦いに負ける事を意味する。今や三者の戦いは、精神世界で繰り広げられているのだった。

時間だけが無情に過ぎる。こんな所で足止めを食らっている場合ではないのだ。隊長の心の中に、少しだけ焦りが生まれた。その瞬間。

シュン…

「うごおおおおおがああああ！…！」

空を切る鋭い音がしたのとほぼ同時に、地面をも揺るがすかのよ

うな絶叫が轟いた。

第三十話へ続く…

「30. 炎が消える刻」(前書き)

評価やコメントお願いします。

今後の糧にしたいので^^;

「30. 炎が消える刻」

ギーハは、それを避けることができなかった。足の回復がまだ完全ではなかったし、そして何より、奈落のモノの素早さが彼らの想定を遥かに越えていたのだ。

怒りと悲痛を混じらせ絶叫する彼の、頭部の防具を砕きつつ何かが突き刺さっている。それは、奈落のモノの体から伸びる、鋭利に研ぎ澄まされた肉の武器。それが魔剣の力だと、ガーランドもギーハ自身も気がついていった。その時になって、目の前のものが魔剣の失敗作「奈落の住人」だと確信する。

「こんちくしょおおがああああああ！！」

ガーランドは咆哮しつつ、ギーハの右眼に刺さった肉の武器を左手で握る。渾身の力を込め、握った手の業火を激しく燃え滾らせた。獣油が燃える様な、鼻につく嫌な臭いを周囲に撒き散らし、そのまま肉の武器を焼き切った。不意にギーハが叫ぶ。

「隊長！危ねえ！！」

同時に、隊長の体を思い切り突き飛ばす。刹那、今までガーランドがいた辺りで、肉の武器が風を切って通過した。ギーハが行動を起こしていなければ、隊長も肉の餌食になっていただろう。

だが、結果的に隊長は痛手を負う形になっていた。ギーハの腕力が強すぎたのだろう、突き飛ばされたガーランドは体勢を大きく崩し、階段の下、踊り場まで一気に転がり落ちてしまったのだ。「また、やっちゃった…。」ギーハは、素直にそう思ったに違いない。

ガーランド隊長が隣から居なくなってしまった今、一気に状況が不利になる。唯一の明かりが、無くなってしまった為である。ギーハと肉の間に闇が生まれていた。これでは次に攻撃されても全く気づく事ができずに、直撃は免れないだろう。自業自得とは言え、ギーハは隊長を恨んだ。

「隊長！あんた大袈裟すぎるんだよっ！！」

そう言って、ギーハは自分の目に刺さった肉の残りの部分に両手をかけた。そして一気に引き抜く。

「うおおおおおおお！！！！」

雄々しい咆哮を上げ、それはグチャリと音を立て引き抜かれた。そしてそのまま、「これも邪魔くせえ！」と、破壊された頭部の防具も外し肉の方へと投げつける。鬼の顔がそこにはあった。眉間に深いシワを寄せ、その上部には鬼の象徴とも言うべき角が生えている。ギーハは魔鬼。強靱な肉体を持ち、腕力もセンスも他の魔を圧倒する接近戦のプロである。

だが今のこの状況では、安易に接近戦を仕掛けるわけには行かず、残された左目で確認できる範囲全てに意識を集中するのが精一杯だった。

「ククククク…。」

奈落の住人が低く笑った。自分が優位に立っていることを悟り、これからどう楽しもうかと笑んでいるように思える。それに対しギーハは、この状況を楽しむつもりも時間も無い。さっさと決着をつ

け、クレイとチュリアの待つ部屋へと向いたのだ。その思いがギーハの心の中に、僅かながらの焦りを生む。右眼が痛みと熱と痺れの信号を脳に送る中、それらを一切気にすることも無く、左目と両耳で奈落の動きを慎重に覗いた。

不意にそれは、彼の耳に届いた。空を切る鋭い音が、ギーハの左右から聞こえる。奈落の触手刀が、もうそこまで迫っていることを瞬時に脳が警告した。だがこの一方的に不利な状況下で、それをかわし受け流す事もできずに、彼は両手で左右の触手を掴む。相手の手段が解っている現状で、二度も同じ手を食らうはずは無い。それが魔鬼の、戦いのセンスのよさだった。

大きな衝撃が両肩へと負担を与え、ギシギシと骨が軋む音が聞こえた。それと同時に掴んだ両手からも痛みがくる。鋭い刃物を、いくらグローブ越しとはいえ力強く握ったのだ。グローブを切り裂き、それはそのまま皮膚をも切る。

「ぐおっ…。」

思い切り顔を歪ませるギーハ。それ程に、奈落の攻撃を制した代償は大きかった。更に触手はグイグイと力で押してくる。それでも体勢を崩すことは無く、必死に堪えようと両脚にも力が入った。

「神よおおおおおおお！！俺に力をおおおおおお！！！」

雄々しく、そして気高く吠える鬼が一匹。そのまま彼は、奈落のモノの押しの力を利用して、触手を引き上げつつ自分の後方へと投げつけた。不意に、触手ごと引っ張られた肉の塊が、前方の闇の中から姿を現す。それは宙を舞って階段の方へと飛んでいった。

宙に浮き上体を崩しつつも、肉は触手を伸ばしギーハへと応戦した。その数は三本。両手を塞がれたギーハは、その全てを体で素直に受け止める。

「グボアッ！」と、彼の口から大量の血が吐き出された。「肉を切らせて骨を絶つ。」それが魔鬼であるギーハの本来の戦い方である。傷を負ってもチュリアが癒してくれるさ、彼はそう考えているのだ。部隊の信頼関係が、彼を犠牲にさせたのである。

「ガアーランドオオオーオオ！今だああああ！！！」

その叫びは階段の踊り場で、この好機を待ち構えていたガーランドの耳にしっかりと届く。その姿は、もう黒兵士隊長ガーランドのソレではなかった。全ての防具を外し、燃え盛る業火の全てを露にさせた魔炎人ガーランドの姿がそこにある。

ギーハに触手が刺さったせいで、肉の飛行がガクンと静止され。そしてそのまま、踊り場のほうへと落下する。そこへ向ってガーランドは、両腕を大きく広げ飛んだ。そして肉に抱きつく形で一緒に床へと落下した。

「ウゲゴアアアアアガアアアアッアア！！！」

もはや、言葉としては理解不能な叫び声を上げる奈落の住人。燃え盛る業火で体中を包まれているのだから、もはや逃げ場は無い。ガーランドの捕縛から逃れようと、必死でもがき苦しむ。やがて、ギーハが握り、体を貫く五本の触手がスルスルと本体のほうへと収納されていった。どうやら急所は外れていたようで、ギーハはその場で膝を曲げ「ハアハア：。」と息を荒げつつも、なんとか持ちこたえているといった印象を受ける。

「アグニの名の元に、お前を焼き尽くしてやるわぁ！そして俺は更なる罪を…」

奈落を抱きしめ叫ぶガーランドの言葉が、そこで途切れた。不覚だった。たぶん彼はこの業火の中で、肉はすぐに灰になると、そう思っていたに違いない。だが現実とは全く違っていたのだ。

体の至る所に激痛が走る。何十本という肉の触手刀が、ガーランドの体を突き抜けていた。不意に意識が飛びそうになるのを堪え、両の腕に残された力の全てを注ぐ。彼にはそれが精一杯だったはずだ。

やがて、ガーランドの背中から伸びた触手が、力を失い萎びていく様に垂れた。奈落の住人が絶命した瞬間である。そしてそれは同時に、ガーランドが志半ばで命の炎が消えた最期の刻でもあった。

解かれた両腕から、黒焦げになった肉の塊がドサリと転げ落ちる。

もはや動く事のなくなった隊長の体から炎は消え、今では人の姿に戻っていた。その両目からは涙が零れ落ちるが、皮膚に残された熱でそれは一気に蒸発してしまう。

先ほどまで力なくうなだれていたギーハが、今は目の前の光景を見て自分達の勝利と隊長の最期を同時に悟る。勝利への嬉しさは全く無く、ただただ隊長の死への遺恨が彼を大きく吠えさせた。

「ふざけんじゃねえーぞ！！ガァー！！！！ランドオオオオオオオオオオオオ！！！！」

第三十一話へ続く…

「31. 内通者」(前書き)

コメントや評価よろしくお願いします。
今後ともごひいきに〜^^w

「31. 内通者」

深い闇の中に、男の声が響いていた。

「ゴルヴァ様、奈落の住人達が四匹程倒されました…。」

「ほおう…それで、レプリカはどうなった？」

白衣を着た男の報告を聞き、ゴルヴァは口の端を上げにんまりと笑みを浮かべた。そして質問を返す。部屋に設置された椅子に仰け反るように座り、目の前の机に両脚を預けている。その雰囲気からは溢れんばかりの傲慢さが覗えた。彼の手にはあいも変わらず小さなナイフが一つ、ヌラリとした嫌味な光を放つ。

「はい…2人共こちらの思惑通り、罪を重ねているようです。ただ…。」

「ただ…？何だ、ハッキリ言ってみろ。」

「2人共、それぞれがまだ一体ずつしか奈落を倒していないように…。思ったよりも作戦の進行が遅れているかと思われます。」

それを聞いてゴルヴァは眉間に軽くシワを寄せ、怒ったような顔になる。そしてまた、口の端を上げ「フンッ…」と鼻で笑い飛ばした。

「無を求めし者たちか…懐かしい響きだ…。」

切れ長の細い目を更に細くして、遠くを見つめつつ、小さくゴル

ヴァは言う。彼の言う「無を求めし者たち」とは、もちろん黒兵士たちの事だった。それが彼らの大部隊の名前なのだろう。黒兵士達が、倒された奈落の住人の内、残りの二体を葬った事はすぐに解った。いや、白衣に報告を受ける前から彼は解っていた。だから目の前の白衣の男に対し、皮肉を込めて鼻で笑ったのだ。

実のところ彼は、無を求めし者たちがレプリカ作戦の邪魔をしようとしている事は、かなり昔から知っていた。そして今日のこの日、彼らが突入してくる事も全てを把握していたのである。黒兵士たちの中に内通者がいるのだ。だから彼は、いち早く兵士たちの行動を掌握する事が可能だった。

「まあ…それも仕方ないだろう。ベクトルはこの際どうでもよい。あいつらが最終的に真の魔剣になれば、結果さえ出ればいいのだよ…。なあ…アリシア…お前もそう思うだろう？」

ゴルヴァは右手に持った小さなナイフを、まるでそれが最も愛おしいモノように見つめそう語った。白衣男からしてみれば、自分ではなくナイフに向って話しているように感じられただろう。だが彼は、そういったゴルヴァの様子を気にする事無く話を続ける。

「わかりました。では、また動きがあり次第、随時報告を…」

「いや…もういい。」

「はい？」

言葉をゴルヴァに遮られたことに、白衣は少し戸惑った。状況報告が自分に与えられた唯一の仕事なのに。目の前でナイフを見つめる男は、もう仕事をしなくてもいいと言うのだ。

「お前、そういえば名前も聞いてなかったな。何て言うんだ？」

「え？あ…ジェイルと言いますが…、あの…もういいとはどういう？」

名前を聞かれ咄嗟に応えたが、ジェイルの中で大いなる不安が生まれていた。それは、自分にとって最悪の結末を、容易に予測することができたからだ。油っぽい嫌な汗が、一気に全身から噴出するがハッキリと解った。

「ジェイルか…。そうか、いい名前だな。なあ…アリシア。」

そう低く言いつつ、ゴルヴァは席を立つ。そしてまた、ナイフに向って話しかけていた。

「いや…あの…。ちょ…ちょっと待ってくださいゴルヴァ様…。自分は更にあなた様の為に尽くしますから…、だから…もう一度考え直して…あの…その…。」

ゴルヴァが立ち上がったことにより、更に動揺を強める。顔をしわくちやにして、目には涙が浮かんでいた。両手を胸の前に突き出すような形で、ゴルヴァの動きを必死に制止しようとしているようだ。

「使えないやつは、もう必要ない。次生まれてくる時は、石を持たない動物にしてくれと女神に祈るんだなあ！！！！」

一気に怒りの形相へと変わるゴルヴァ。そして一気に、ジェイルの胸の前でバタバタと動かす両手の間をすり抜け、心臓目掛けてナ

イフを突き刺した。

「グエッ！！」

そう一言だけ漏らし、そのままゴルヴァに体を預けるように力なくもたれかかった。その体をゴルヴァは、肩で押し退ける様に後ろへと突き飛ばす。そして、何の抵抗感も無く後方へと倒れるジェイルの体から、勢いよくナイフを引き抜いた。大量の鮮血を噴出しつつ、それは床へと倒れ込むのだった。

ジェイルの返り血を浴び、その場に佇むゴルヴァ。そしてまた血を滴らせたナイフを見つめ、

「アリシア：こいつの血は美味かったか？」

そう聞いた。だがナイフがしゃべるわけもなく、沈黙だけが部屋に流れる。だが、その沈黙が彼には氣に入らなかったらしい。更に怒りを強めた顔をしてナイフに向って叫ぶ。

「何故だっ！何故お前は何も話してはくれないんだ！！！俺はこんなに愛しているのに：お前には俺の声が聞こえているんだろう！！答え　ろおアリシアア！！！！」

狂気も露に彼が叫ぶ中。彼の懷からピピピピと、何かの機械が発する音が聞こえた。その音で我に返り、ナイフの柄を逆手に握る。そして眼をつぶったまま、二度、柄の部分を額にぶつけ、そのままゆっくりと腕を下ろした。そうする事で、少しは平常心が戻ったのだろうか。自分の懷に手を入れ、そこから通信機のようなものをそっと取り出した。

大きく息を吸い込み肺に溜め、そしてそれを思い切り吐き出す。そうやって深呼吸も終え、やっと通信機を口のところに持っていた。

「ギギか？」

「はい…。」

ギギと呼ばれた相手は、小さく、とても小さく返事を返した。それは間違いなく男の声の音域だ。その返事を聞き、またゴルヴァは口の端を吊り上げ、そして更に質問を重ねる。

「そっちの状況は？」

「奈落を倒した後、ルキアさんの部隊がまた石像を開こうとしているところです。」

「ほおう。相変わらずルキアの馬鹿は、とんだ勘違いをしているようだな。お前の作戦のお陰と言ったところか…。感謝するぞ、ギギ」

そう言っつてゴルヴァは両目を細め、クククク…と込み上げる笑い方をする。彼は今の状況を楽しんでいる。仲間の考えた策にはまり、見当違いの場所を開こうとする大隊長ルキア。その光景が頭に浮かび、それがおかしくてたまらないのだ。

「では、また何か進展があれば報告します。」

そこで通信は切れた。満足そうな笑みを浮かべ、ゴルヴァは再びナイフを見る。

「もうすぐだぞ、アリシア。俺たちの望む世界が、もうすぐそこまで来ているんだよ。お前も嬉しいだろう？」

クククク……アゝハッハッハッハッハ……

闇に包まれた部屋の中に、ゴルヴァの笑い声だけがこだまする。彼のその手に持たれたナイフは、悲しげにヌラリと青白い光を湛えていた。

第三十二話へ続く……

「32. 危機感0（ゼロ）」（前書き）

評価やコメントヨロシクお願いしますW
それが、今後の力になりますのでW

「32. 危機感0（ゼロ）」

静まり返った廊下を、脇の壁に体を預け、一步一步重い足取りで進む一つの影がある。その人物は、腹部を怪我しているらしく、ボタボタと血を溢れさせていた。その様子から、その傷の深さが覗える。よく見ると顔にも怪我を負っているようだ。左目から顎にかけて、紅い筋が隆々と流れている。

たぶん意識は殆ど無い状態なのだろう。残された右眼はとても虚ろで、息を乱しながらゆっくりと進んでいた。彼が通過した壁には、血の跡がハッキリと残っている。

その姿は黒兵士の格好で、顔は鬼のそれ。影の主はギーハだった。消えそうになる意識を必死に堪え、クレイとチュリアが待つ部屋へと向っているのだ。

今は廊下の明かりは点いている。その後、ガーランド隊長が生を失った後、深い闇が訪れ、それでもギーハは隊長との目的を果たそうとした。自分の重い体を引きずりながら、闇の中を手や足で状況を探り、ゆっくり先へと進んだ。階段では、思うように体が動いてくれずに、二度ほど大転倒した。そんなこんなで目的の階、つまりは今彼がいる階にたどり着いた頃、急に明かりが戻ったのだった。そして今に至る、といったところだ。

彼の心中には、二つの事だけがある。一つは、隊長の死への後悔。そしてもう一つは、天使の治癒の力で助かるという希望。その二つの感情が、今の彼の全てだった。

実のところ、ギーハは隊長を心の底から尊敬し慕っていた。だが

その気持ちを、態度や言動で伝える事はできていなかっただろう。時にガーランドの命令を無視し敵に突っ込み、時に彼に対しタメ口でものを言った。その事が、彼は悔しくてたまらなかった。

隊長の絶命を悟ったときに出た、「ふざけんじゃねえ！」の一言は、たぶんその悔しさが込められていたに違いない。「自分の思いを素直に伝える前に、勝手に死にやがってふざけんじゃねえ！」そういう意味がああ言葉には込められていたはずだ。

虚ろながらも前を見つめるその視界に、見慣れた格好をした人物がこちらに向ってくるのが見えた。だが、彼には声をかける程の余力は無い。だがそれは、前から来る相手も同じような状態のようだ。別にどこか怪我をしている風ではなかったが、力なくガクリと両肩を落とし、視線を床へ向けゆっくりこちらに近づいてくる。その足取りは非常に重く、失意の底を彷徨う徘徊人の様だ。

ギーハには、それが誰なのかすぐに解った。それと同時に、その人物が一人だという事実深く失望し、そこで意識が無くなった。そのままドサリと重い音を立て床へ倒れこむ。その音にやっと彼の存在に気がついたのだろう、黒兵士はびっくりした様に顔をあげ、そして不意に口を開いた。

「ギーハさん！」

その声は紛れもなく、新米兵士、魔銃クレイのものだ。クレイは急いで倒れたギーハの元に駆け寄り、そして体を数回ゆすりながら何度も名前を呼ぶ。

「ギーハさん！しっかりしてくださいギーハさん……ギーハさああん！！」

だがその呼びかけにギーハがこたえる事は無い。クレイは彼の傷の状態から不安を覚え、すぐに喉もとの動脈に指を当て脈の有無を確認する。微弱ながらも、命の鼓動が当たった指から伝わってきた。しかし、安心はできない。腹部からも左目からも、未だ大量の血が溢れているのだ。このまま放っておけば、ギーハは確実に死んでしまふだろう。そう思ってみても、彼にはどうすることもできない。

「ギーハ…さん…。」

もう一度、名前を呼んでみる。もちろん名前を呼んだところで、この最悪の状況を脱することはできないと、彼自身理解している。それでも自分には、そうすることしかできない。悔しさが後から後から込み上げ、枯れ果てたと思っていた涙が、今は確かにその眼から流れ落ち始めた。

その時、女神はそっと微笑んだ。ギーハが来た先、階段がある方から不意に声が掛かる。

「あぁっ！ いたいた~~~~。 おお~~~~いクレイちゃあ~~~~ん♪」

その声は沈んだ状況を、見事に打ち碎いた。なんとも間の抜けた、危機感の感じられない子供の声。だが、重い雰囲気を変えた理由はそれだけではないようだ。声の主は顔を向け、クレイは力の限りに叫ぶ。

「ミア！！ 早くこっちに来て！！！！ お前ならギーハさんを治せるだろう！！！！ 早く！！！！」

そう、ミアと呼ばれた背の低いお子ちゃま兵士は、今は亡きチュリアと同じ「魔に堕ちた天使」なのである。その事実が、クレイの不安をも打ち砕いたのだった。

「わぁお！緊急事態発生、緊急事態発生！ミア天使、ただ今むっかいまぁ~~~~す！」

そう言っ、ミアは彼女の後ろに立っているもう一人の黒兵士を見上げる。そして、危機感の無い話口調で更に続けた。

「よし、ザイル！ミアは走るのメンドイから、私を担いでひとつ走りヨロシクウ♪」

「ラジャ…。」

ザイルは一言だけそう言っ、ミアを軽々と持ち上げて肩車をした。

「ヒヤッホオ~~~~イ♪高い高~~~~い♪ザイル号、ゴーゴー！！！」

彼の身長はギーハをも凌駕する大男で、肩に乗せられたミアの頭は天井すれすれのところにあった。そして、大きな体からは想像もつかない程のハイスピードで、クレイたちの下へと爆走する。

あっという間にザイル号は目的地にたどり着き、ミアは肩から勢い良く飛び降りた。その先にはクレイの姿。

「クレイちゃ~~~~ん♪」

そう言つて両手を大きく広げ、彼に抱きつく体勢を作る。クレイにはその小さな体を受け止める以外に選択肢がないので、そのまま、がっちり彼女を抱きしめる形で受け止めた。思ったより大きな衝撃のお陰で、クレイはそのまま後ろへと倒れこみ、ミアが彼に馬乗りになる体勢になる。

「クレイちゃんナイスキャア〜ツチ！アハッ♪」

「ミ…ミア…重い…。」

クレイは苦しそうな声で言った。いくらミアが子供とはいえ、防具の重さは相当なもの。軽く40キロ程度の重量が、クレイに重くのしかかっているのだ。

「んまあ！可憐な乙に対して重いだなんてえ！ミアの愛の重さだと思つて、受け止めなさい！！」

2人が会話を交わす中、後ろで控えていたザイルが口を挟む。

「ミア、ギーハタイヘン、ハヤクタスケテ。」

彼は片言の言葉使いでそう言った。それに対し、ミアは少しムツとした口調で返す。

「ザイル！もう少し空気読んでよね。今大好きなクレイちゃんとラブラブ中なのよ♪見て解らないの？」

「ミア…お前が空気読めよ…。」

そうクレイは言った、もちろん心の中でそつと。口に出して言え

るはずは無い。今彼女に機嫌を損ねられると、更に話がややこしくなると思ったからだ。込み上げるフラストレーションを隠し、クレイも彼女に対しお願いをする。

「頼むよ…ミア…。後でゆっくりラブラブできるだろう…。今はまずギーハさんをお願い。ミアの天使の力…見たら、俺もつきよくなるかも…。」

彼は、腹部に押し掛かる重さに耐え、息も絶え絶えといった感じだった。

「ホント！？じゃあ今すぐギーハのおっさん治しちゃう♪」

そう言ってミアはクレイから降り、横たわるギーハの傍らに軽く座る。そして両目を閉じ、深い深い瞑想を始めた。

第三十三話へ続く…

「33. 嫌い」(前書き)

コメントや評価のほうよろしくお願いします。
それがオレの力になるのでw

「33. 嫌い」

クレイとザイルは2人共沈黙を決め、ミアの邪魔をしないように見つめる。たぶん彼女は、瞑想しながら言葉を紡いでいるのだろう。聞きなれない言葉の響きが、二人の耳に小さく届いていた。

そしてミアは、徐に両手をギーハの腹部に持っていく。その両手には、温かな治癒の力が生まれているはずだ。だが、その力を眼で確認する事はできず、そこに治癒の力が生まれているのだと、二人は漠然とそれを感じるだけだった。

「ウィキアーデー!!」

ミアは、呪文の最後の一節を大きな声で発する。そして次の瞬間、ギーハの腹部の傷口がみるみる塞がっていった。そして今と同じ事を、血で溢れかえる左目にも施した。そちらもあつという間にもとの状態に復元、回復する。

「おお…さすが天使…。」

「ミアスゴイ…」

後ろで控えていた二人が、思い思いの感嘆の声を上げる。それに少し照れたのか、ミアは2人のほうに顔を向け、「テヘ♪」と舌を出して、ウィンク一つした。だが、頭の防具のせいで、2人には全く伝わっていないだろう。

「また罪が溜まっちゃった♪わあいわあい♪」

一人喜ぶミヤ。しかしクレイもザイルも、それを心から素直に喜ぶことができずにいた。ギーハの傷が癒え、ミアの罪が増えたのは確かに喜ぶべき事実。しかし、魔に堕ちた天使が治癒を使い、罪を得るというそのシステムに問題があるようだ。

何故、魔に堕ちた天使は、治癒という善の行動をしているのに罪が溜まるのか。その答えはいたって簡単だ。天使が回復を施す際、自分の生命力を削りそれを相手に与えている。言い方を少し変えれば、誰かを回復することにより、自分自身を間接的に傷つけているのである。だから、罪が溜まる。故に、治癒を乱用すれば、罪が溜まり無に還る前に命を落とすという危険性がある。

クレイもザイルもその事は知っている。だから、素直に喜ぶことができないのである。

「う…うう…。」

意識が戻りつつあるのだろうか、ギーハが呻く様な声を漏らした。

「ギーハさん！」

「ギーハ。」

「ギーハのおっさん！」

目覚めようとしているギーハに気がつき、三人は同時に声をかける。その声がうるさかったのか、はたまた眼を開ける際に起きた筋肉の自然な収縮行動なのか。それは分からないが、ギーハは眼の回りにシワを寄せた。そして、ゆっくりと眼を開く。そこには、不安そうに覗き込む三人の顔があった。

「クレイ……、ザイル？…ミ…ミア！！！」

始めはうつすらとクレイの名を呼ぶ。そしてゆっくりと視線を巡らせ、周りにいる面々を確認していくにつれ、それは疑問から驚愕の表情に変わっていった。最後には両目を大きく見開き、ミアを思い切り疑視している。

「眼は完全に治ってるね♪おっさん。」

「ん？あ…あぁ…そうだな。ありがとう…。」

ミアに発言の先を越され、とりあえず礼を言う。そして、続けてギーハが口を開く。

「って！そうじゃないだろう！なんでお前らがここにいるんだ！？」

ミアの方を指差し、そう疑問を投げつけた。そして、すぐに答えは返ってくる。

「ミア、説明するのメンドイから、ザイルから聞いてねっ。」

そう言って、隣のザイルに視線を送り発言を促すミア。ザイルは、彼女の自分勝手な発言に反発することも無く、おもむろに口を開く。

「ルキアサンイッタ。ヤミノナカ、シタニイルガーランドタチシンパイ。オマエラミテコイト。」

「そ…そうか……。」

片言の言葉使いに、ギーハはその半分も理解できなかった。ただ、ルキア大隊長がよこしたんだと言う事ぐらいは解ったので、彼は適当に返事を解したのだ。

「ハァー…よりによって…。」

ギーハは深いため息を一つつく。その原因は、もちろんミアにあった。彼はミアが大嫌いなのだ。自分の傷を癒してもらった事には、大いに感謝している。だがその相手が、よりによってミアだったという事が、彼には相当気に入らないようだ。少し落ち込み気味の彼に、ミアは一言贈る。

「おっさん、ミアの事嫌いだもんね♪」

「…!!」

急にそう聞かれてギーハは驚き戸惑った。ミアの一言は確実に確信をついている。だが、そのまま肯定する訳にもいかない。逆に否定するのも癪に障る。だから、あえて答えは返さず、困ったように薄ら笑いを浮かべている。

「変な笑顔作らなくていいよ。ミア、ちゃんと解ってるから。それに、私もおっさん嫌いだし、お互い様でしょう。」

先ほどまでの能天気ぶりは何処へ行ったのか、今は一転して真顔でギーハを見つめそう言う。言われたギーハは、その場で固まった。ミアの真っ直ぐ見つめる視線に、心から恐怖したのだ。今もその視線の先に、自分の本心を見透かされている。そう思うと、怖くて怖くて仕方なくなった。そしてそのまま、何も言い返す事ができなく

なる。

「あの…ギーハさん…。ちょっとお話いいでしょうか…。」

ミアとギーハの間に生まれた嫌な空気に恐縮しつつ、クレイがそっと声をかけた。その呼びかけに反応し、ギーハは首だけを動かして彼を見た。その表情には、少しの安心感が浮き上がっている様だった。ギーハが自分の話を聞く気があるという事を悟り、クレイはそのまま話を続けた。

「実はチュリアさんの事なんです…。」

そこで一度話すのをやめ、うつむく。ギーハはチュリアの名前を聞き、ようやくここで自分の目的を思い出したようだった。

「そうだよ！チュリアはどうしたんだ？お前、一緒じゃなかったのか？」

「そういえば、チュリア姉さん居ないねえ…。」

ミアはチュリアを「姉さん」と呼ぶが、別に姉妹ではない。ギーハを「おっさん」と呼ぶように、チュリアは「姉さん」と呼んでいるだけだ。キヨロキヨロと周りを見渡しながら、ミアは辺りにチュリアの姿が無い事を確認する。

「それが…チュリアさんは…。チュリアさんは…。」

徐々に涙声になるクレイ。そして、なかなか話を進めようとしないうその態度に、ギーハは苛立ちを覚える。そして同時に、チュリアに起こった最悪のシナリオを確信した。沸きあがる怒りに身を任せ、

クレイの左腕を思い切り掴み何度も揺さ振りながら叫ぶ。

「お前一緒にいたんだろう!! それなのに、何で助けられないんだよ!!!」

その言葉はクレイの胸に深く突き刺さる。そして、それは同時にギーハ自身も胸にも突き刺さる。自分も隊長を救えなかったという強い悲しみが、彼の中に更に強い怒りを生んでいくのだった。

第三十四話へ続く…

「34. 天使の嘘」(前書き)

評価やコメントよろしくお願いします。

「34. 天使の嘘」

不意に、重く鈍い音が響いた。

ボツゴオン！！グワアツシャン！！！！

それはギーハが、抑えられなくなった怒りをクレイにぶつけた音。硬く握った拳で思い切り殴ったのだ。殴られた衝撃で、クレイの体がいとも容易く吹っ飛び、後ろの壁に体を少しめり込ませる。それ程に、ギーハは怒りを込め、力を込めて殴った。

「ちよっとおっさん！私の大事なクレイちゃんになんて事するのよお。バーカ！」

ミアはそう言って、ギーハの足を軽く蹴った。そしてそのまま、壁からズルズルと床へと落ちるクレイの元に駆け寄る。見ると、クレイの頭の防具は見事に砕け、顔の半分が露になっていた。そこから覗くクレイの青い瞳は、しっかりとギーハを睨んでいる様に見える。

その眼を見て、ミアはクレイに対し言葉をかけられなくなった。いつも自分に微笑みかけてくれる眼とは、明らかに違う。例えるなら、それは獣の眼。大きな威圧感を感じ、ミアは後ろへと数歩下がる。今は自分が出る幕ではないと、そう理解したのだ。

クレイはおもむろに立ち上がり、もはや意味を成してはいない防具を取って床に捨てて。同時に彼の顔の全貌が現れ、それは少し幼い顔立ちだった。そして彼の瞳はやはりギーハをしっかりと捉えている。カシヤンカシヤーンという音と共に、防具は二度ほどバウン

ドを繰り返し、その後小さく揺れ始めた頃、ようやくクレイが口を開いた。

「俺だって、黙って見ていた訳じゃないんだ。あの闇の中で…しかも、あんな得体の知れない肉の化け物の戦って…。」

「なっ！！肉の化け物って！お前らも奈落と戦ったのか！？」

「奈落…？かどうかは解りませんが、アイツは確かに魔剣の力を使っていました。そして、ようやく倒したと安心していたら…：アイツの触手が…チュリアさんの心臓を…。」

そこまで言ってクレイは視線を落とす。チュリアが死んだあの瞬間の光景が、頭の中にハッキリと思い出されているのだろう。しっかりと閉じられた瞳からは、また涙が零れ始めている。

「そうか、なるほどな……。スマン。」

ギーハは全てを納得したという様な面持ちで、殴ってしまった事に対し素直に謝罪する。それは同時に、「非があるのはクレイではない、自分にこそ非があるのだ」と、認めた瞬間だった。そしてギーハも床に視線を落とす。

そこでようやくミアが会話に入り込んできた。2人共、もう話す様子はないと思い、そして二人の話を聞いて、自分も伝えなければならぬ事があると思ったのだ。

「あのねあのね。ルー隊長の部隊も、その肉の、奈落の住人さんと戦ったよお。ミアもめっちゃがんばったあ♪」

ミアはルキア大隊長を「ルー隊長」と呼ぶ。ちなみに、ガーランド隊長は「ガー隊長」。ルキアやガーランドと言うのが、ミアにとって面倒と言うのがその理由らしい。だが、愛しのクレイや、いつも傍にいるザイル、お姉さんのようなチュリアは普通に呼ぶ。たぶん彼女の中には、その見えない境界線が存在しているようだ。

クレイは彼女の話聞いた途端すぐに顔を上げ、驚いた表情でミアに聞き返した。

「え？…ルキアさんの部隊も…？」

「うん♪けど、ルー隊長ってば超張り切っちゃって、あつという間に倒しちゃったんだけど…。そんでその後、ガー隊長達が心配だから様子を見て来いって…。」

「それで、来やがったのか…。」

これはギーハの言葉だ。ミアが嫌いなギーハにとって、ルキアの命令は実刑を下されたのと同じことだった。いや、もしかするとその方がまだましだと思えるほど、彼はミアをひたすら嫌っている。

「命の恩人に向って、来やがったとは何よ！！！今度死にそうになっても、もうミアは知らないんだから！！！」

そう言ってまた、ミアはギーハの足を蹴り、そのままザイルの後ろへと逃げた。そういった行動が、ミアの幼さを現している。それがまたギーハにはムカついて仕方なく映るのだが…。

「そういえばギーハさん、隊長の姿は見えませんが…：…二手に分かれたんですか？」

「……」

不意にそう聞かれ、ギーハは俯いた。クレイは正直にチュリアの事を報告したのに、自分は言うタイミングを逃してしまった。しかも、クレイを殴り、怒鳴ってしまった後だ。更に事実を伝えることが困難だと思ったのだ。悩むギーハを見て、代わりにミアが言った。

「ガー隊長なら、さつきすれ違ったよ♪うんうん、超元氣そうだった。下にクレイたちがいるからヨロシクって♪」

「そうなんだ…、そうか……じゃあよかったあ。」

クレイは、思い切り安心した表情を作る。不意に、両目に涙が溜まったのが自分でも解った。今日は、一体何回悲しい涙を流すのだろうと、クレイはそう思う。そう、ミアの話を聞いて、彼は切なくてしょうがなくなったのだ。

クレイもただの馬鹿ではない。何も言わないギーハの普段とは違う態度、そしてミアが嘘をついた時に見せる癖。彼女は嘘をつく時、必ず自分で納得するように「うんうん」と頷く癖があるのだ。その二つの要素が、隊長はもうこの世にはいない事を如実に物語っていた。ちよつと変な子だが、普段嘘をつく事はあまり無い。だけど、自分を悲しませないようにと、ミアは無理して嘘をついている。そう思ったから、クレイは悲しい顔などミアに見せたくは無かった。だから、安心した顔を「作った」のである。

ミアはギーハの方を見て、一瞬だけ怒った顔を見せた。その顔を見て、ギーハも彼女の言葉が嘘なのだとすぐに気がつく。あれ程の状況で隊長が生きているはずは無い。ミア達はここに来る際に、確

実にガーランドの亡骸を目撃しているはずなのだ。事実を言い出せずにいた自分に対して、ミアは怒っているのだと理解した。

「それにしてもあのお肉ちゃんはある、一体何匹いるのかなあ？ めちゃラブリーフェイスだったけどお♪」

「・・・・・・・・・・」

隊長とチュリアの死への悲しみに暮れる2人に対し、ミアは明るく元気に発言した。しかし返事が返ってくるはずは無い。だが、ミアは自分が場違いだ等とは全く思っておらず、更に言葉を続けた。

「でもでも、お肉は乙女为天敵よねえ！ だからミア、アイツ嫌い。い。ねえ、ザイルも嫌いだよね？」

「ア：アア：。」

今度はザイルまでも巻き込もうとしたのだが、その作戦は失敗に終わる。もちろんザイルも、ガーランドの亡骸を見ていた。無口な彼でも、悲しくない訳がない。

クレイもギーハも、ミアが必死に場の雰囲気盛り上げようとしている事は解っていた。だがそれ以上に、2人の仲間を失ったと言う事実が二人に重くのしかかる。それにクレイに至っては、もう一つ重要な事を言っていないのだ。初めからギーハに伝える気は無かったが、隠し事をしているという後ろめたさも、彼を無言にさせる理由の一つである事は間違いない。

クレイが仲間に隠す事、それはもちろんアリシアの事だった。先ほどまで確かに一緒にいたはずなのに、その事については一言も彼

の口から出てはない。それは一体何故なのか。話は数十分前、奈落の住人と戦ったあの部屋に戻る。

第三十五話へ続く…

「35. 敵意の欠如」 (前書き)

どうも、かのりです^^

コメントや評価のほうよろしく願いますW

「35・敵意の欠如」

「お前……一体、何者なんだよっ！！！」

クレイは思い切り叫ぶ。もちろん、目の前にいるアリシアに対してである。チュリアの死を目の当たりにし、気が少し動転しているようだ。自分の誤った行為で、チュリアを帰らぬ人にしてしまった事実が、彼の劣等感を激しく責め立てられているせいなのか。いや、普段は温厚な彼がそこまで怒り狂うのには、チュリアの死以外にも他に理由があるようだ。

「……。」

怒りに心を奪われているクレイを、アリシアはただ黙って見つめている。彼女は、クレイの投げた問いに答える事ができないのだ。

「自分が何者か？」それは彼女自身が、誰かに問いただしたい質問なのだから、それに対する答えなど持ち合わせてはいない。

「大体、なんで戻って来るんだよ！！誰かを探しに、地下に行っただろう！？」

「……。」

更に声を荒げるクレイに対し、アリシアは黙ったまま深く考え込んでしまう。クレイにすれば、彼女の思案する姿が更に気に入らない。自分達がピンチの時にタイミング良く戻ってきて、しかも何故か加勢してくれた。その一連の行動が、彼には全く理解できないのだ。考えれば考えるほどに頭が混乱して、そして今の状況を招いているのだった。

「何で助けた？俺たちは、お前を一度殺そうとしているんだぞ！！！！負けた俺たちへの慈悲とでも言うのかよ！！！！なめんなよ、化け物が！！！！」

「……」

アリシアは更に沈黙を続ける。彼の言っている事が、全く理解できないのだ。地下なんて行った事もないし、彼らと戦った覚えもないのに、勝つなんて事も絶対に有り得ない。彼は仲間の死で、本当に気がおかしくなったのではないかと思う。彼に対し、わずかな恐怖を覚えつつあった。

「なんとか言えよ！！お前は誰なんだ！？そして何で俺は…俺は…あんな愚かなことを…お前が、俺にそうさせたのか？」

もはや、クレイの思考は完全にイカレテいるようだ。自分のやってしまった事を、他人に擦り付けようとしている。自分達が必要とする「罪」を破棄し、アリシアに押し付けようとあがいているのだろうか。

「そうだ。チュリアさんはお前が殺したんだ。なあ、そうだろう？魔剣さんよ…。それを、俺のせいにしてうだなんて、とことん醜い化け物だな。」

徐々に、クレイの声が怒りを失っていく。全ては自分のせいでは無いと思い込み、心を少しずつ落ち着かせているからだ。簡単に言うのなら、まさに「現実逃避」である。

そして、アリシアはついに口を開いた。

「ふざけないで…。あの人を殺したのは私じゃない。」

そこまで言って、アリシアは一度チュリアの方を見る。血の海に浮かぶ彼女の亡骸を確認して、そしてまたクレイへと視線を戻す。「可愛そうな人…。」心の中でそっと呟いた。現実から逃れようと、必死にもがいているクレイを見て、素直にそう思う。気が動転しすぎて事の主流を見失い、自分の感情や思考が完全に狂っているとも思った。だから、更にこう続ける。

「それに…あなたでもない…。あの忌々しい肉の化け物が、あの女性の心臓を貫いた。それが致命傷となって、それで彼女は死んだの。」

その言葉を聞き、クレイは深くうつむいた。泣いているのか、両肩が小刻みに震えているのが窺える。少しして、彼のすすり泣く声が聞こえてきた。アリシアは自分の言葉が届いたのだと確信したのと同時に、彼は納得してくれたのだと思う。だが、現実とは全く違っていたのである。

不意に顔を上げたかと思うと、彼は一言だけ聞いてきた。

「俺も殺すのか？」

アリシアにはその言葉が何を意味するのか、暫く理解することができずに茫然としてしまう。少し考え、その言葉が持つアリシアへの恐れを理解できた時、彼女は深い悲しみと怒りが込み上げてくるのを感じる。彼は、目の前に立つ自分の存在を恐れている。アリシアの言う事等、聞く耳は持たないと言う事実を表した一言なのだ。

「だから、私はあなた達を助けようとしたただけだよ!! もう犠牲は出したくないの!!」

気がつけば、アリシアは叫んでいた。叫び、我に返って左手で口を塞ぐ。怒りに心を奪われてしまえば、彼と同じ。そうなったら、話し合いなど続けられるはずはないと思ったからだ。

「よく言うよ…。あの化け物も、お前の仲間なんだろう? アイツも魔剣の力を使っていたし…。そうやって、助けられたと俺を安心させて、隙を見て殺るつもりだろう…。」

「!!」

彼の言葉で、アリシアは全てを理解できたように思えた。自分は確かに、黒兵士たちを助けたのだ。それは感謝にも値するはずなのに、自分はその肉の化け物と同じ存在、「仲間」としか思われていなかった。肉と同じ魔剣である自分に対し、彼は感謝どころか憎しみの対象でしかない。もうこれ以上、何を言っても無駄なのだ。

「お前なら、そんな姑息な手段使わなくても、一気に俺を…殺せるはずだ…。」

「……。」

「なのに!! 何で、助けたんだ!!!!!!」

「……?」

「今だって、さっさと俺を殺してしまえばいいだろう!!!! なんでそんな悲しい目で俺を見ているんだよ!!!!」

「??.?」

「ふざけんなよお前!! そんな態度されたら、お前を敵だと思えなくなるだろう!!!」

沈黙するアリシアに対し、彼は涙声で自分の思いを吐き出した。膝をガクリと落とし、四つん這いの体勢で床を激しく何度も叩く。彼の感情が不安定なのは変わらない事実。だけど、口調や行動は怒っているものの、その声は悲しさが溢れている。先ほどの、怒り狂っていた時とは少し様子が違うようだ。

「だから…お前は…一体何者…なんだよ…。敵じゃないのかよ…。…もう…もう、わかんねえよ…。」

彼は気がついていて、敵だと思っていた存在に助けられ、敵意では無い新たな感情が生まれていることに。だけど彼は、それを認めたくはなかったのだ。それを認めてしまえば、自分自身が本当に壊れてしまいそうで、それが怖かった。

チュリアを殺したのは、自分でもなければアリシアでもない。そんな事は始めから解っていた。だけど、目の前で心配そうに見つめる魔剣を、自分の中でどう判断すればいいのか解らず、故に混乱を招いている。それが、彼を怒鳴らせ、不可思議な発言をさせた最大の理由だった。

「ねえ…あなたは私を殺すの?」

床に頭を押し付け、時に打ち付けるクレイに対し、アリシアは優しく聞いた。その言葉は確かに彼の耳に届き、クレイは頭を持ち上

げアリシアを見る。

少しの沈黙の後、

「それを、聞かないでくれ…。」

と一言だけ言って、彼はチュリアの亡骸を見つめた。

第三十六話へ続く…

「36. 迷いの末に響く音」(前書き)

魔剣伝〜アリシア〜のパロディ始めました^^
タイトルは、

【魔剣伝SP〜OLになったアリシア】です。

極短編になってますので、時間が空いた時にでもW

「36. 迷いの末に響く音」

チュリアの亡骸を見つめ、クレイは沈黙したまま動くこともなくなった。彼女との思い出に浸っているのか。それとも、彼女の死を受け止めようと真っ向から見つめているのか。それは、彼にしかわからない。

不動のクレイを見つつ、彼は自分に対し敵意がないのだとアリシアは思った。そう思うことで、先ほどまで生まれていた不安もやがては消えている。今はただ、悲しみに我を忘れ、もがき苦しむクレイを救ってあげたいと、そう思うばかりだった。

しかし、その母性にも似た感情は、彼女にとって初めて感じる強い思い。自分の中で芽生える、生暖かい感じをどう対処していいのか解らずにいるようだ。

「あなた、名前はクレイって言ったよね？」

不意に自分の名前を呼ばれ、クレイは少し驚く。だが、チュリアから視線を外すことは無く、「ああ。」と一言だけで答えた。アリシアにはそれで満足だったのだろう、不意に笑顔が漏れてくる。先ほどまでは、まともな会話もままならなかったのに、今は確かに会話が成立している。そう思っただけで、彼女は少しばかりの幸せを感じていた。

「私の名前、さっきも言ったけど、アリシアって…」

「なあ…お前、本当にアリシアなのか？」

自己紹介も終わらぬ間に、クレイに質問を挟まれ彼女は少し驚いた。だが彼は、名前以外の何かを聞きたがっているのだと思う。だから、彼女はその次に控える会話を期待して、素直に質問に答える事にした。

「うん、私は確かにアリシアだけど。何か気になる事でもある？」

そう言って、彼女はクレイの返事を待った。だが、すぐに答えが帰ってくることは無く、彼はおもむろに立ち上がり、ゆつくりとチュリアの亡骸のほうへと向った。

やがてチュリアの傍らに腰を下ろし、彼女の背中に左手を回してそつと状態を起こした。そして、震えるもう片方の手で頭の防具をゆつくりと外すと、そこには金髪で色白の端正な顔立ちがあった。まさに天使のような穏やかで綺麗な顔だと、アリシアはそう思う。

「どうしてですか、チュリアさん。あんな状況で命を落としたのに、なんでこんなに穏やかな顔をしているのですか……」

涙ながらに声をかけるクレイの両肩は、ガクガクと震えている。

実は彼は、彼女の顔を見ることが心の底から怖かった。自分の行いで最期を迎えた彼女の顔は、醜く、驚愕の形相で、自分を恨みつっ死んでいったのだと思っていたからだ。でも、現実と彼の妄想は明らかに食い違っていた。穏やかで安らかな面持ちで、永遠に眠るチュリアの顔。それを見てクレイは、全てから開放された気分になったはずだ。

そつとチュリアの体を床へと戻し、両手を胸の前で組ませてあげた。そして自分自身も両手を合わせ祈る。「俺、もっと強くなりま

す。だから心配しないで安らかに…」と、心の中で強く願う。

「私も、いいかな？」

不意に背後から声が掛かり、クレイは少しだけ驚く。だが、アリシアの申し出を断る理由も思いつかず、彼は一回だけ深く頷いた。

それを見て、アリシアは彼の横に腰を落とし両手を合わせた。自分があの時気を抜かなければ、こんな事にはならなかったのかもしれない。「本当にごめんなさい。」と、小さく呟く。その声は、確かにクレイの耳に届いていた。

暫くの間、静寂が部屋を覆う。憂いと悲しみに支配されていた時間は、やがてその流れを変えていった。

「なあ、アリ…シ…ア。」

クレイはその名前を呼ぶことにまだ少し抵抗があるようで、途切れ途切れに彼女に声をかけた。声をかけられ、アリシアは閉じていた両目を開け、そっとクレイのほうを見る。

「チュリアさんも、そして俺も、アンタが魔剣アリシアのはずはないと思っていたんだ。」

「え？ どういう事？」

「10年前に、魔剣アリシアは両親を殺し、そのまま無に還ったはずだから。」

「無に…還った…」

アリシアは少し考え込む顔をする。無に還ったとはどういう事なのか、彼女にはさっぱり意味が解らないのだ。でも、そんな彼女を気にする事も無く、クレイは話を続けた。

「アンタは気がついていないか解らないけど、人間じゃない。レプリカなんだよ。魔剣の一部から作られた模造人。だから、10年前に素となる本物のアリシアが消えていないのに、そのレプリカを作れるはずは無いと思うってた。」

「私…人間じゃないんだ…：そっか…：やっぱり…。」

「やっぱり知らなかったのか…。だけどアンタが、本人がアリシアだって言うんだから、間違いないかもな。だったら、何か作り出す別の方法があるのかもしれない。」

そこまで言って、今度はクレイも考え込んでしまう。別の方法があると自分で言ってみて、改めてその可能性に気がついたのだ。

「ねえ…あなたたちは何者なの？ どうして私を殺そうとしているの？」

アリシアにそう聞かれ、クレイは発言を少し戸惑った。目の前で会話を交わす彼女が、改めて自分達の目標物である事を再認識したのだ。「自分は敵に向って、何を話しているんだ。」と自分を責める。

でも不思議なことに、彼はアリシアと会話を交わすことで、少しばかりの安らぎにも似た感覚を感じていた。例えるなら、それはチュリアと話しているような感覚だ。初めて戦った時は、明らかに敵

意を感じたのに、今はそういったものは一切感じられない。

「な…なあ…アリシア。お願いがあるんだけどいいかな？」

「え？ いいけど…何？」

「電気が点いたお陰で、あそこのモニターも復帰したはず。だから、もう一度確認して欲しいんだ。本当にアリシアなのかを。」

「わかったわ。」

クレイが言うモニターとは、もちろん筒状の機械の操作盤の事だ。それを見れば、答えはハッキリする。だがしかし、クレイの本当の意図はそうではなかった。

アリシアは立ち上がり、モニターへと歩を進める。もちろん彼女は気がついてはいないだろう。後ろにいるクレイが、魔銃の右腕で自分を狙っていることに。それこそがクレイの作戦だった。

「俺たちは、『無を求めし者達』と呼ばれていて、アグニ教から派生した部隊なのさ。」

「う…ん…ごめん、よくわからない。」

「そうか。まあいい。それで、俺たちの目的は、この施設で作られている魔剣のレプリカの破壊。つまりは…」

そこまでクレイが言った頃、丁度アリシアが画面を見ていた。そして、確かにそこにはアリシアと書かれていることを確認する。

「ねえ、やっぱりアリシアって書いて…」

「つまりは、俺はアンタを壊さないといけないんだああああ！！！」

スババババババババ！！！！

部屋には、銃の発砲音が大きく響き渡った。

第三十七話へ続く…

「36. 迷いの末に響く音」(後書き)

評価やコメントよろしくですw

「37. 思想とプライドと」(前書き)

評価やコメントよろしく願いますW
今後の糧になりますのでW

「37. 思想とプライドと」

アリシアが発砲音に気付いた時には、すでに遅かった。後ろから狙われていたので、確実にかわす事は不可能。彼女には迫り来る運命に、身を任せることしかできなかった。

ガシャガシャガシャーーン！ズタンズタタタン！！

ガラスが割れる軽快な音と共に、何か鉄を貫くような音が部屋に流れた。アリシアは意味も解らないと言った感じで、呆然とその場に立ち尽くしている。彼女の体には、クレイが放った銃撃を受けた痕は、無い。そう、全く無傷の状態である。

彼女がいるすぐ横の、筒状の機械のガラスが割れ床に飛散している。そして今見ていたモニターの胴体部分と言うのか、鉄の部分に弾が当たったのだろう。画面は消え、着弾した部分からは火花が散っていた。

「なんでだあ！！俺は何をためらっているんだよおお！！！！」

クレイは突然そう叫び、座ったままの状態で、何度も何度も床を殴りつける。悔しさと、自嘲とが入り乱れ、彼を苦しめた。その姿を、アリシアはただ黙って見つめている。その表情は先ほどまでの明るさを失い、困惑のそれだった。

やがて叫ぶクレイと、割れたガラス、機械の弾痕に視線を巡らせ彼女は考える。クレイが自分を狙ったのは明らか。でもなんで、この至近距離で外したのか、それが解らない。その答えは、クレイの思考の中にしかないのだ。

アリシアの背中に向け発砲を開始する瞬間、彼は太い葛藤した。

「アリシアは始末すべき敵なんだ。」

「いや、でも彼女に敵意は無い。」

「それでも、俺は『無を求めし者達』。任務は任務だろう。」

「アリシアは、チュリアさんの亡骸に手を合わせていたじゃないか。」

「そうやって安心させて、俺が油断する隙を覗いているのだろう。」

「それは、今の自分だって同じ事をしている。背中から狙うなんて、卑怯すぎる。」

「卑怯とかは関係ない。アイツを倒せば、罪がたっぷり溜まるんだ。」

「罪か。罪は欲しいな。」

「だけど…俺には…。」

「悩む必要は無いんだ、撃てよ。撃てば全ては終わる。」

「でも…でも、俺にはこんな卑怯なマネ…できねえよ!」

様々な思惑が彼の中で戦い、そして最後に出た結果が今の状況だ

った。アリシアを撃つ事はしないで、周りの機械類を破壊しただけ。彼は兵士としての任務より、人間としての情を選んだのだ。しかし、一度しかない絶好のチャンス逃したことに對しては、酷く後悔もする。彼の心中が落ち着くような事は、もう無いのかもしれない。

「チクシヨウ！チクシヨウチクシヨウ！」

クレイは呻くように叫び、床を更に何度も強打する。徐々に床が陥没する程強く、何度も何度も殴り続けた。

「ねえ、クレイ…。」

アリシアはクレイのすぐ目の前まで来て、そう声をかける。だけど彼の耳には届いてはいないようだった。それに対しアリシアはとことん困り果て、悩み、そして一つの決断をする。早速それを行動に移した。

「クレイ、私の話を聞いて。お願い。」

そう彼の耳元で言いつつ、肩にそっと手を置いた。クレイはやっとなづいたようで、殴るのをやめ、少し時間を置いてからゆっくりとアリシアの方を見た。そこには優しさと憂いが混ざった表情をする、アリシアの顔がある。そして、アリシアはこう続ける。

「あなたが、私を殺そうとしている理由はよくわからない。でも、きっと私なんて死んでしまった方がいいと思うの。私、人間じゃないみたいだし。」

その言葉は、優しい旋律でクレイの耳に響き渡る。だがその言葉が、何を意味しているのかが彼には全く解らなかった。今の混乱し

た頭では、何も理解できないのだ。ただ、なんとなく彼女の言葉が流れている。

「私は自分が何者なのか、どうしてここにいるのか、何も解らないの。でも、一つだけ解ることがある。私は人を傷つけ、殺すことしか出来ない化け物。それだけはハッキリと解る。」

そこまで言って、アリシアはクレイの右手、魔銃を優しく両手で包んだ。そして、そのまま自分の左胸にゆっくりと持っていく。

「もうこれ以上犠牲を出したくは無い。だけど、私がいると必ず犠牲者が出てしまう。私のこの両手は、人を殺す為の道具でしかないのだから。だからお願い。私を撃って。」

クレイはようやく彼女の意図が解った。自分の右手は、今まさに彼女の心臓に銃口を向けている。そして、彼女は撃てと言うのだ。この距離で心臓を撃てば、確実に彼女の命は最期を迎えるだろう。

クレイの右手が若干震えているのが、両手を通して伝わってくる。見ると右手だけではなく、全身が小刻みに震えていた。彼の中で、また色々な考えが葛藤しているのだろう。しばしの時間を置き、ようやくクレイが口を開いた。

「そ…そうか。わりいな…」

小さく、声が震えるのを堪えるように、小さく呟くように言う。彼は納得してくれたのだと思い、アリシアは深く頷き両目を閉じた。不意に、彼女が握る両手の中で、何かがうごめく感覚を覚える。いよいよ、魔力の弾丸が打ち出される。そう思い、彼女は全ての覚悟を決めた。

「アンタの願いは聞けないわ。本当にわりい。」

クレイは申し訳なさそうにそう言った。アリシアは驚き、すぐに両目を開ける。見ると自分が握るクレイの右手は、もはや銃ではなく、人間の手に戻っていたのだ。先ほどのうごめく感覚は、発砲ではなく変形する為のものだったのである。

「何で？」

アリシアは困惑の表情で、クレイに聞いた。彼はすぐに答えるでも無く、そっと自分の右腕を引き抜き、顔の前まで持って行く。そして、人間の腕に戻った右腕を眺めるように見つめた。

少しして、おもむろにクレイが言った。

「アリシア。アンタには、借りが二つある事を思い出したんだ。」

「借り？」

「ああ。アンタは俺とチュリアさんを救ってくれた。だから借りが二つ。とりあえず、今一つは返したな。」

そう言ってクレイは自分の腕から視線を外し、アリシアの方を見た。困惑に歪むアリシアの顔がそこにはある。

アリシアにしてみれば、彼の行動は自分の理解を超えている。彼ら兵士は魔剣を破壊しに来たのだと言っていた。だから彼女は、彼に命を預けたのだ。彼にとってはまたとない絶好の好機だったはずなのに、任務を捨て、撃たなかった。考えれば考えるほどに、頭が

混乱していく。

「だけど、あなたは私を殺す為に……ここへ……」

「そうだよ。俺達は魔剣を破壊しに来たんだ。でも俺たちには、俺たちが信じる思想があり、そしてプライドだってある。」

クレイは自分の右腕を左胸の所に持って行き、二度小突いた。そこに自分達のプライドが眠っているのだという意思表示なのだろう。その声は、先ほどまでの陰気な感じを失い、イキイキとしている。

「自分から命を投げ出すものを殺し、罪を得たって、これっぽっちも嬉しくないね。」

「……」

アリシアは言葉を失っていた。彼の言う思想とかプライドとかいうモノを、全く理解できないのだ。

第三十八話へ続く……

「37. 思想とプライドと」 (後書き)

気に入っていただけたなら、
ランキングようタグをポチッと押して頂けると
嬉しいですW

「38. もう一つの借り」(前書き)

コメントや評価のほうよろしく願います W

「38. もう一つの借り」

徐々に、いつもの調子を取り戻してきているのだろう、クレイが揚々と話を続けた。

「そして、もう一つ。今のうちに借りを返しておくよ。借りを残したままだと、後々面倒だし。」

「どういうこと?？」

アリシアは訝しげな顔で聞く。彼女には、クレイの言う事が全く納得いかないのだ。借りを作った覚えも無いし、故に返される覚えも無いのだから。

「今は大人しくこの場から逃げてくれ。」

「は?」

アリシアはとても驚いた。自分の命を狙っている相手が、逃げろと言うのだ。支離滅裂もいいところ。もはや、彼の考えも言葉も、その全てが彼女の思考を遥かに凌駕している。命を救われた事には、少しだけの疑惑と感謝があるのは間違いない。だから彼女は、彼に対し聞きたい事も、そして伝えたい事も山のようにあるのだ。

「まだ、色々話したいことがあるんだけど…。ダメなの?」

「ああ。そんな時間は無いよ。電気が点いたことで、心配性の俺の仲間が、たぶんこっちに向っている。もし鉢合わせでもしたら、アンタはまた犠牲を出してしまうかもしれないだろう?」

その話を聞いて、やっとクレイの思惑が少しだけ理解できたような気がした。アリシアがこれ以上犠牲を出したくないと言う事を、彼はちゃんと理解してくれている。そして、それに対しての回避方法を自分に与えてくれているのだ。つまりは、もう一つの借りを返すというのはそういう事なのだ。彼女は思った。

「アンタは強い。それはこの前の戦いで充分わかった。だから俺も、易々と仲間を犠牲にされたくは無いんだ。」

「クレイ、その事なんだけど、私は貴方達と戦ったことなんて無いよ。」

「え？何を言っているんだ、アンタはギーハさんの腕を切り落としただろう？」

「それは私じゃない。貴方達は知らないようだけど、実は私と同じ姿をした人がもう一人いるのよ。」

「なんだって！？アリシアが2人…」

アリシアの言葉を聞き、クレイは素直に驚いた。そして暫く黙り悩んだ後、「なるほど、そういう事かあ。」と一人呟き納得した様子だった。

「通りで、あの時とは様子が違うはずだ…。やっと納得できたよ。ん？でも待てよ…。」

「何か気になることもある？」

「いや、うん、まあなんでもない。貴重な情報ありがとう。」

「ありがとうって、私に言うのも変じゃない？」

「あ：そう言われれば、そうだな：。」

2人は笑った。先ほどの沈んだ雰囲気は嘘のように、今は部屋中に笑い声が響いている。

クレイもチュリアの死を乗り越えたのか、その表情は明るさを取り戻している。だが、現実とは全く違っているようだ。彼の心中では、まだ、チュリアの死に対する悲しみと憂いが渦巻いている。心の軟弱な彼に、仲間の死を簡単に乗り越える事などできるはずは無い。彼はそれを忘れたいが為に、無理をして明るく振舞い、そして笑っているのだ。

「そろそろ時間切れだな…。俺は隊長たちを探しに行くよ。チュリアさんの事を伝える義務があるし。たぶん、その後この部屋の状況を視察しに来るはず、だからアンタも部屋を離れたほうがいい。モニタールームかどこかに隠れて、俺たちをやり過ごせばいいさ。」

「わかったわ。じゃあそうさせてもらう。」

「ただ、勘違いはしないでくれよ。もうアンタに借りは無い。次に会った時は、俺は迷う事無くアンタを攻撃するだろう。例えばその先に、死が待っていると解っていても。」

「そうだね。」

アリシアの顔は憂いに満ちていた。いずれは戦わなくてはならな

いと言う現実が、どうにか訪れないことをそっと祈るばかりだ。

「じゃあ、そろそろ行かないと。あの人たちかなりの心配性だから、もうすぐそこまで来ているかもしれないし。」

そう言って彼は、開きっぱなしの扉のほうへ体を向ける。そして、片手を上げ「じゃあな、魔剣アリシア」と言い残し、アリシアの言葉も待たずに駆け足で部屋を出て行ってしまう。

この時点でクレイは、ある重大な事実を知らなかった。それは、チュリアがルキアの娘だと言う事だ。彼は、大事な仲間を失った悲しみだけを胸に部屋を出た。大隊長の愛娘を救えなかった等とは思ってもいないのだ。そしてその事実が、後に自分を苦しめる事件に発展するとは、知る由も無かった。

一人残されたアリシアは、少し寂しい気分になったが、今は別れに浸っている場合ではないとすぐに思い直す。そして彼女は、もう一度チュリアの亡骸に両手を合わせ祈った。その後、肉の塊に対し怒りを込めて睨みつけ、やがて扉のほうへ歩を進める。「もう絶対に、この部屋には戻ってこない。」と、そう心に固く誓い、勢い勇んで部屋を出た。

アリシアもまた、この時点である重大な事に気がついてはいなかった。それは、クレイに対する特別な思い。彼女にとって、まともに会話を交わした異性は、彼が初めてだったのだ。だから自分の中で芽生え始める感情に、違和感を感じ戸惑いはあるものの、それが一体何かまでは解るはずも無い。

そう、その芽生えた感情こそが彼女にとっての「初恋」だったのだろう。後に、この気持ちがアリシアを苦しめ、怒らせ、悲しませ

る結果になる。

部屋には血の池に浮かぶチュリアと肉の塊、そして白衣の男たちと黒兵士たち、様々な形で最期を迎えた亡骸達が横たわっている。まさに、画家が好んで描く地獄絵図のような無残な光景が広がっていた。

第三十九話へ続く…

第4章 「森／＼4」（前書き）

お陰さまでアクセス数が10000超えました^^
これもひとえに、読者の皆様のお陰ですw

今後ともよろしく願いますw

第4章 「森／＼4」

深い闇の末、アリシアは再び森にいた。

自分の姿を確認すると、先ほどまでと同じ白衣を着ている。現実と、この森は繋がっているのだろうか、彼女は思った。しかし、そんな事を悠長に考えている時間はなかった。

何故だか勝手に体が動く。それは、とても不思議な感覚だった。自分の意思を無視して、腕や足、口や目の玉まで、体の全てが何かのスイッチが入ったかの様に勝手に躍動を始める。

真っ先に彼女の目に飛び込んできたのは、見たことの無い女性の亡骸だった。だけど口が勝手に動き言葉を吐き出す。

「どうしてよ！どうして、お母さんを殺す必要があるのよ！私はどうやってお父さんを止めることができるのよ！！！」

自分でそう叫んでいるのに、頭の中のアリシアには暫く理解できずにいた。目の前の亡骸を、自分はお母さんと呼んでいる。そして、たぶんお母さんを殺めたのは、自分なのだろうという予想はできた。でも、何故殺めてしまったのか、そして父親を止めるといふのはどういう事なのか。その二つについては理解不能であった。

「私が魔剣の娘だからって、何もできっこない！ねえ答えてよ！お母さん！！！」

そう言ってアリシアは、母親を死の世界から引き戻そうとしたのだろう。亡骸の両肩を持ち、何度も何度も揺さ振ろうとした。その

刹那、彼女はあることに気がついた。自分が触った部分の服が引き裂かれ、母親の生暖かい肌からは血が滲んでいるのだ。彼女はその事実が気がつき、驚いてすぐに手を離れた。そして、恐る恐る自分の手を見る。

「キャッ！」

と、思わず叫びを上げてしまう程、彼女は驚いた。自分の手は、もはや人間のソレではないのだ。指の一本一本が鉤爪のように変形し、皮膚も肌の色を失い灰色っぽく変色している。更に見ると、その異様な変化は手だけではなく腕まで達していることが解った。それはまさに、母を殺した「罪」に対しての「罰」がなせる変化。魔剣として目覚めた瞬間だ。

「これで：お父さんを殺せるの？」

また勝手に口が動き、そう呟いた。その声はとても冷静で、先ほどのまでの動揺は微塵も感じられないと、頭の中のアリシアは思う。体のアリシアと言うべきか、彼女は魔剣へと変化しつつある自分の手を見て、全てを悟り、そして全てを覚悟したのかもしれない。

体が勝手に動き始め、今度は後ろを振り返った。視界には、頭のアリシアが始めてこの森で見た光景が広がっている。大きな剣と、異形のモノたちが激しい戦いを繰り広げていた。そこで頭の中のアリシアは、これはやはり自分の過去なのだと理解する。自分の中にいる、本物のアリシアが見せてくれているのだと、そう考えた。

やがて腕が動きだし、パンパンと二度自分の頬を叩いた。それは、アリシアが気合を入れるときの癖だった。不思議とその痛みを、頭の中のアリシアが感じる事は無い。

「フウ……。」

と、両目を瞑り、深い呼吸を一つつく。

「お母さんの死を、無駄にはしないよ。」

そう呟いたかと思うと、彼女は目の前にそびえる大剣へ一氣に向け駆け出したのだ。

だが、自分と大剣の間にはたくさんの異形の者たちがいる。物凄い勢いで駆けるアリシアを、何匹かの異形のものが気づき、雄叫びを上げ、彼女の存在を周りのモノに知らせ始めた。すると、一斉に複数の鋭い眼光がアリシアへと向けられる。

それでも彼女は臆する事無く、駆ける速さを更に上げ突っ込んだ。まさに猪突猛進の勢いである。

「うわあああああああ！！！！！！」

大きく開かれたアリシアの口からは、異形のモノに負けないほどの雄々しい咆哮が吐き出された。そのまま、異形のモノたちの軍勢に突入したのだった。

剣や銃や炎、更には打撃や投石等、様々な攻撃を軽快に避けつつ、アリシアの両腕が異形のモノたちの胴や首や背中を次々と薙ぐ。その動きはあまりにも見事で、異形のモノたちの中には戸惑いを見せるモノもいるぐらいだった。それでも尚、激しい攻撃がアリシアを襲う。

どれぐらいの数を切り裂いただろう。彼女が通った後には、無数の亡骸で作られた絨毯ができていた。この時点で彼女の変化は腕だけではなく、体中が灰色に変色していた。もはや人間の姿では無いと言う事に、彼女は全く気がついてはいないだろう。

今はそんな事を考える程の余裕などない。頭の中のアリシアも、自分の戦況を理解するのに精一杯だったはずだ。

大剣に近づくにつれ、敵の密集率は上がる。故に、攻撃も更に激しさを増していった。それでもアリシアは攻撃をかわし続ける。さすがは魔剣の血筋なのか、それとも生まれながらの戦闘センスなのか。これが初めての戦いとは思えない程、それはあまりにも見事だった。

迫る敵を次から次へと切り裂いているうち、彼女の周りで明らかな変化に気がついた。自分の腕以外の何かが、敵を切り裂いているのだ。それは紙のように薄い灰色の物体で、どうやらそれは自分の体から伸びているらしい。

初めて大剣を見た時も、刃の部分から何かが伸び、周りの異形のモノを突き刺していた事を思い出す。これが魔剣本来の力なのだろうと、頭のアリシアは推測する。

やがてその紙のような刃が、体から伸びては敵を切り裂き、そして体へと戻り巻き付いていくという、一連の行動を繰り返し始めた。それはまるで包帯のように体を包み、彼女の体を徐々に変化させていく。もはや女性独特の曲線などはなく、ごつごつとした異形の姿に変わり始めていた。

そしてついに、彼女は腕を振るう事もままなくなってしまう。

刃が腕にも巻きつき、その行動を封じてしまった為だ。しかし、今の彼女にはもう腕を振る事は無意味なのかもしれない。体から伸びる刃が、周りの全てを切り裂くのだから。

足だけはまだ、無事だったので。今は走ることに専念しているようだった。

やがて、大剣はもうすぐそこまでの所まで到達していた。もうこの時には、顔すらも刃に覆われているらしく、しゃべることができないのだろう。体のアリシアの思念が、頭のアリシアには聞こえたようだった。

「お父さぁー！ー！ーん！！！」

思念はそう叫んでいた。その時になって、頭のアリシアは、目の前にそびえる大剣が父なのだと気がついた。

そしてついに、刃は軽快に駆けていた足までもを捉え始めたようだ。徐々に走る速さが落ちていく。「このまま止まってしまうのでは？」と、頭のアリシアが思った時、アリシアは最後の一步を踏んだ瞬間、思い切り上へと飛び跳ねたのだ。

もはや人間ではない魔剣の体は、その跳躍力も頭のアリシアの想像を遥かに越えていた。一気に大剣の柄の先をも超え、天高く舞い上がる。だがそこにも、空を飛び回る異形のものが存在していた。その数、数十匹。だが、魔剣アリシアはそれらをいとも容易く切り裂き、地面へと還したのだ。

その時にはもう、それが人間だったのかも解らない程、変化は進んでいた。返り血に染められた、紅い魔剣。もはや、完全に剣その

ものだ。

やがて魔剣は落下を始める。魔剣アリシアが落ちる先は、柄と刃が交わる部分。よく見るとそこに、ドクドクと波打つ小さな物体が見て取れる。まさにそれが大剣の心臓なのだ。

「うわあああああああ！！！！」

体のアリシアの思念が頭に響く最中、魔剣アリシアは見事大剣の心臓を突き刺したのだった。

第四十話へ続く…

第4章 「森／4」（後書き）

評価やコメントのほうよろしく願います W

「40. 森／4. 5」(前書き)

評価やコメントよろしく願います W

「40. 森／＼4. 5」

刹那、

ドゴオオオゴゴオオオゴゴオオオゴオオン！

と轟音を立て、森に巨大な黒い衝撃波が波紋を描いて広がった。波動はうねり、絡み合い、収縮と膨張を繰り返し、一陣の突風をも生む。

周りに残っていた異形のモノの体は、あまりの衝撃の強さに耐え切れずズタズタに引きちぎられ、やがて風の中に消えていった。森を形成する木々たちも、葉を落とし幹は折られ、次々と薙ぎ倒されながら、根こそぎ風にさらわれていく。もはやそこには、緑々しく生い茂る森の姿は無く、開かれた台地に数本のひしゃげた木々たちが残るだけ。寂しさだけを残し、死んだ森へと移り変わっていた。

もう生を持つものは何も存在してはいない、悲しい森。

衝撃波を生んだその中央には、大剣ギルディアが荘厳さを湛え高くそびえる。その心臓には、魔剣アリシアが深々と突き刺さっていた。大剣の生の鼓動は、緩やかに弱まり、やがて聞こえなくなる。それは、大剣が無への暴走を止め、沈黙した瞬間だった。

「これで、私は無に還る…。」

悲しい声が、頭のアリシアには聞こえた。それは、体のアリシアの悲痛の声。肉親殺しは重罪である。母親を殺し、父親を殺し、その先に待つものは「無」でしかない。体のアリシアは、それ

を悟り嘆いているのだ。

「でも…どうしてなの…お母さん。」

更に声は悲しく響いた。彼女の視界には、大剣から噴出される黒い霧が映っている。やがて視界の全てが闇に包まれた。周りを被いつくす深い闇。頭のアリシアは、この闇こそが罪なのだと直感する。

その刹那、意識が急に遠くなるのを感じた。深い深い闇の中に、体が、意識が、全てが吸い込まれていくような不思議な感覚。

浮遊感にも似た意識の消失を感じながら、頭のアリシアに声が聞こえる。

「ねえ、お母さん…お父さんをお母さんから救う為に、私は無に還っても良かったの…？」

声を聞き、頭の彼女は少しだけ考えた。体の彼女が言わんとしていることが、よく解らないのだ。だけど、何故だか悲しい感情を感じる。どうしてだか解らないが、頭のアリシアは深い悲しみで包まれたのだった。

「アリシア、私はお父さんも貴女も愛しているわ。」

不意に聞きなれない女の声が流れる。でも、彼女はそれが母親の声なのだと、すぐに理解した。そして母親の声は何度も何度も繰り返された。

「アリシア…アリシア…アリシア…アリシア…」

その声が響くたび、彼女はどんどん悲しさと切なさに包まれていく。

そして全ては弾け、全ては消えた。

※

「アリシア、ねえアリシア！ア〜リ〜シ〜ア〜！！」

聞き慣れた声が自分を呼んでいる。そう思って、アリシアはそつと目を開けた。

「え？何で？」

目の前で自分を覗く顔を見て、アリシアは少しだけ驚き、声を漏らしてしまう。そこには自分の良く知った顔があった。彼女と全く同じ顔、もう一人のアリシアがそこにいたのだ。

「何で？じゃないわよ。それはこっちのセリフ、何でこんなところで寝てるのよ。」

もう一人のアリシアは、少し困った顔をしてそう言った。その顔はよく知っているはずなのに、何故だかアリシアは懐かしさを覚え、同時に安らぎも感じた。不意に泣きそうになってしまう。

「ちょ…ちょっと。なんなのお？人の顔を見て、急に泣かないでよ。」

「ごめん。なんか、あなたの顔を見て安心しちゃったのかな…。
アハハハ。」

とことん困り果てた様子のもう一人のアリシアに対し、アリシアは泣きながら笑っていた。

「お願いだから、そんな変な顔しないで。私と同じ顔なんだから。」

「プハッ！…そうだね。ごめん。アハハハハ。」

私と同じ顔なんだからと言われ、アリシアは思わず噴出してしまふ。言われてみればそうなのだ、自分達は同じ顔、まさに鏡を見ているのと同じなのだ。そう思ったら、おかしさがどんどん込み上げてくる。その時、パンパンと二度、もう一人のアリシアが手を叩き、笑いを制止した。

「はい！笑うのは、もうおしまい。私の質問に答えてちょうだい。どうして、こんな所で寝ていたの？」

改めて聞かれ、アリシアは自分の状況を確認する為に、ゆっくり辺りを見渡した。

薄暗い部屋の中に、鉄製のシステムラックがいくつも置いてある。ラックの棚の上には、何本もの小瓶が規則正しく並べられていた。中には骸骨のマークがついた、いかにも怪しげな瓶もあり、大きさは大小さまざまで、大きいものと赤ん坊が入れるほどの大きさだ。

そう、ここはモニタールームの向かいに位置する、「薬品庫」だった。部屋の様子を一通り確認して、彼女はやっと自分の状況を思

い出す。

クレイと別れた後、彼に言われた通りモニタールームに入ろうとした。だけど、黒兵士が戻ってきて、今度こそモニタールームに入るかもしれない。そう思って、彼女は向かいのこの部屋に身を潜めたのだ。明かりが薄暗かったせいだろうか、彼女は気がつけば寝てしまっていた。そして、あの森の夢を見たのである。

彼女はそこまでの経緯を大まかではあるが、もう一人のアリシアに説明した。一通り話を聞き終え、もう一人のアリシアは急に怒り出した。

「黒兵士に逃がしてもらった？ 何で殺さなかったのよ！ あいつらは私たちを殺そうとしているのよ！ 少しヌケた人だとは思っていたけど、そこまで能天気だとは思わなかった！」

「私はこれ以上犠牲を出したくないの！ 命を奪うことが偉いの？ 殺して何になるのよ！ それが解決に繋がるとは、私は思えない！」

急に怒鳴り声を上げたもう一人のアリシアに対し、アリシアも怒りを覚え、そして怒鳴り返す。二人は同じアリシアなのに、その意見は大きく食い違っていた。

「じゃあ何？ もし自分が殺されても、あなたはそれを素直に受け入れられるの？ おかしいんじゃない…。私たちは自分の身を守る為に、敵を殺さないといけないのよ。全ての敵がいなくなれば、それこそが解決なんじゃないの？」

「それは違う！ 相手を傷つけなくたって、話し合いで解決できることもある。現に、私はここで生きている。さっきまでクレイと一

緒だったけど、私は殺　されないで生きているじゃない!!!」

アリシアは怒りに身を任せ、怒鳴り散らす。もう一人のアリシアの言うことが、どうしても納得がいかなかったからだ。黒兵士の中にだって、クレイのような人も居る。殺　しあう以外に、何か別の解決策があると彼女は信じて止まなかった。

もう一人のアリシアにしてみれば、話し合いなどと言う温い方法で解決できるとは微塵も思っていない。それを強く主張するアリシアを許せず、理解できないのだ。

2人は自らの意見を曲げる事もなく、激しく睨み合いを続ける。

第四十一話へ続く…

「41. 情報交換」(前書き)

コメントや評価よろしく願いますW

「41. 情報交換」

部屋には、沈黙の時間がサラサラと流れる。

激しい睨み合いの末、先に怒りを解き喋り始めたのは、もう一人のアリシアだった。

「もういいよ。こんな言い合いしてたって無駄なだけ。今はあなたといがみ合っている場合じゃないわ。」

そう言って、馬鹿馬鹿しいと言いたげな表情を浮かべる。それでもアリシアは、まだ納得がいかない様子だった。事実、もう一人のアリシアに「無駄」と言われ、彼女の怒りは増している。話し合いを主張する彼女にとって、今のこの状況を無駄の一言で済ませられずには合点がいくはずがない。

「……。」

アリシアは黙ったまま睨み続ける。急に冷めてしまった、もう一人のアリシアにとって、その目は少しだけ怖く思えた。自分と同じ目なのに、何かが違う。その違和感が、彼女の心の中で恐怖を感じさせるのだ。

「わかったわよ。無駄だと言った事には謝るわ。ごめん。でも、ここでこのまま睨み合いを続けていたって、何も答えは見つかからない。今はまず先に進まないで。そうでしょう？」

ゆっくり諭すように言葉を紡ぐ。謝ってくれた事に対し、少しだけ許す気になったのか、アリシアは「わかった。」と一言だけ言った。

た。

「じゃぁとりあえず…」

「ちょっと待って。」

もう一人のアリシアの言葉を、急に制止するアリシア。もう一人のアリシアは、何事かとアリシアを見つめ、そして次の言葉を待つ。

「話の前に、私も謝りたい。ごめん。」

とても小さな声だった。うつむき、今にも泣きそうな声で、アリシアは謝った。そんな彼女の姿を見つめるもう一人のアリシアの目は、優しさを取り戻していく。そして、またパンパンと二度手を叩く音が鳴る。それは暗い雰囲気を変えようと、もう一人のアリシアが出した音だった。そして彼女はおもむろに話しだす。

「はい！しんみりタイムは終わり。元気良くいこー。」

「うん。」

一つだけ頷き、アリシアは顔を上げた。そして零れかけていた涙を拭い去り、すぐに笑顔を取り戻す。同じ顔をしているのに、同じアリシアなのに、お姉さんと妹みたい。そうアリシアは思ったが、あえて口には出さずに、そっと心の隅に仕舞い込む。

「さて。じゃぁ改めて、とりあえず今お互いが持っている情報をまとめたいの。」

もう一人のアリシアがそう切り出した。初めて会った時から、も

うかれこれ1、2時間は経過している。その間にお互いが思い思いに行動し、色々情報を得ているだろうと、つまりはそういう事だった。アリシアはそれをすぐに理解し、了解した。

「それじゃあまずは、私からね。」

もう一人のアリシアはそう言って、今まで自分に起きたことの全てを語り始める。

モニタールームを出た後、黒兵士と戦い、そして黒服の嘘の情報を得て地下に行った事。地下で急に停電になり、肉の塊と戦った事。その後訪れた大聖堂で、老いた神官に出会い、様々な話を聞いた事。そして最後に、自分が見た不思議な夢の事。彼女が経験した事の全てを、要領を得て素早く完結に語り尽くした。

それらを聞き、アリシアは少しだけ驚いた。彼女も自分と同じく、森の夢を見たのだという事に深く興味を示す。

「あなたも森の夢を見たんだ……。やっぱりアレは、私たちの記憶なのかな？」

そう言ってアリシアは、腕組みをして深く考え込む。

「アレが記憶かなんて、私にも解らない。でも、お互いが同じ夢を見るって事は、もしかしたらそうなのかも……。」

「そうだよね。」

そう言って、二人は同じく腕組をして考えた。でも答えなど見つかるはずも無く、もう一人のアリシアが言う。

「とりあえず、この話は後にしましょう。次はあなたの番よ。」

「そうだね。解った。上手く伝わるか心配だけど。」

そう言つて、アリシアも今までに起きたことを話し始める。モニタールームで黒服が映った映像を見た事。その後急に停電になって、通風孔を通して隣の部屋に行った事。そこで、クレイとチュリアに協力して肉の塊を倒した事。チュリアが死んだ事。クレイと色々な話をした事。そして彼女も、最後に森の夢について語る。もう一人のアリシアほど上手くはなかったが、ちゃんと伝わっているようだ。

全ての話を聞き終わり、もう一人のアリシアは少し思案してから口を開いた。

「やっぱりそうだったんだ。」

「え？何が？？」

「レプリカよ。私は今まで、自分が何者なのか正直解らなかった。普通の人間ではないとは思っていたんだけど。なるほど、それで私は12号。やっと全てが理解できた。ありがとう。」

もう一人のアリシアは、晴れ晴れとした顔でそう言った。全てを理解し、胸の奥にあったわだかまりから開放されたからだ。

「私は、自分が記憶喪失だと思っていたの。でも実際はそうじゃない、記憶は失ったんじゃないから始めから無かったのね。あ、でも…。」

そこまで話して、もう一人のアリシアは訝しげな顔になる。その顔にアリシアも困ったような顔をして聞いた。

「でも…何？」

「うーん。でもね、そのクレイとかいう人の話だと、アリシアは10年前に無に還った。たぶんね、あの森の夢がその事件の記憶だと思うの。」

「うん。私もそう思う。」

「でも、だとしたら、レプリカは作る事はできないって、そういう事でしよう？じゃあ私たちって、本当にレプリカなのかな？」

「うーん…。」

2人は更に深く考え込む。思案すればする程に頭の中がぐちゃぐちゃになり、混乱していった。消え去っていた筈のわだかまりが、新たに生まれ始めていくのを感じる。結局2人の持つ情報を合わせるところで、何の進展も無かった。そのことに落胆さえした。

「もぉー！！考えていてもしょうがない。とりあえず、あの黒服を探して、アイツに全てを聞こう。」

一気に暗く沈みこんでいた雰囲気、もう一人のアリシアの言葉が見事に打ち砕く。アリシアもすぐにそれに賛成した。とりあえず行動を起こすしかないと、二人はそう思い、お互いの顔を見つめ深く頷く。刹那、

「ふざけんじゃねえーぞ！このクソガキガアアアア！！！」

部屋の外で男の怒鳴り声が聞こえた。

第四十二話へ続く…

「42. 大隊長の怒り」(前書き)

評価やコメントよろしく願います W

「42. 大隊長の怒り」

それは、黒兵士やチュリアの亡骸が眠る、あの部屋で起きた。

ドグワツシャアアアアッン！！

黒兵士の体が宙を舞い、壁際の機械類に突っ込んだ。そしてそのまま、床へと落下する。もう一人の黒兵士が、更に追い討ちをかけるように突っ込み、腹部へ強烈な蹴りを浴びせた。床に倒れた方の兵士は、「グボッ！」と口から血を吐き、腹部を抱え込むように押さえながいている。

「テメエ、よくもオレ様のチュリアを放置しやがったな！！死んでも償いきれんぞ！！」

蹴りを放った方の兵士がそう叫ぶ。その姿は他の兵士とは明らかに違いがあった。背が、かなり低いのだ。身の丈140センチ程、子供程度の身長しかない。だが、体が小さいわりには、腕や足の筋肉は隆々と盛り上がっている。強靱な肉体を持った小人。そういう表現がしっくり当てはまるだろう。

実のところ、彼の魔タイプは「童話の住人」なのだ。この世界の悠久の歴史の中で、好まれて読まれる物語がいくつかあった。その中でも「ドワーフ物語」や「四精霊物語」等が特に有名で、彼はその物語の中にだけに存在するドワーフの姿なのだ。故に、背は低いが強力で、頑固な上に気性が荒い。ちなみに、ギーハの魔鬼もこれにあたる。

「こんな所に亡骸を残して、自分だけノコノコ戻ってきましただ

あ!？百回 死 ねや、新米のクソガキアアアアアア!!!」

そう言って、ドワーフ兵士は更に激しい蹴りを何度も浴びせた。その光景に見かねたのだろうか、後ろで控えていた兵士が仲裁に入る。

「これ以上は止めてくださいルキアさん!!クレイだって、隊長の愛娘だと知っていたら、こんな無碍な扱いはしなかったでしょう。そうだろ、なあクレイ!？」

「うるせえ、ギギ。お前は黙ってろ!」

ギギと呼ばれた兵士は、背はさほど高くは無い。病的なまでに細く痩せこけ、とても力でルキアを抑え込むのは無理そうだ。しかし、今は何とかルキアの暴走を止めねばと、横にいるギーハに視線を送った。だが、その視線に気がついたギーハは頭を横に振るばかりで、何も喋ろうとはしない。

ギギとギーハのその後ろ、壁際で身を潜めるミアやザイルもまた、どうする事もできずに、状況を見守るだけだった。この部屋に、大隊長であるルキアを制止できる程の人物など、一人もないのだ。「こんな時にこそ、ガーランドがいてくれれば。」ギーハは心の中でそう思うばかりだった。

ルキアはしゃがみ込み、床に倒れるクレイの顔を覗き込んだ。そしてそのまま、彼の髪を固く掴み、その顔を自分の顔の位置まで持ち上げる。「アウウウ…。」小さく呻くクレイ。顔を持ち上げられ、首が限度ぎりぎりに曲げられた為に、上手く呼吸ができないのだ。

「知らなかったでは、済まされないぞ。オレの娘だろうと、そう

でなからうと、仲間なら亡骸を連れて戻って来い！！お前もだギーハ！！！！」

そう言って、ルキアは急に後ろを振り返り、ギーハを激しくにらみつけた。

「は…はい！すみません大隊長！！」

急に視線を向けられ、ギーハは戸惑いも露にそう答えた。ルキアはそれに対しては満足したのか、再びクレイに視線を戻す。

「ガーランドの奴は、こんな温い兵士しか育てられなかった。だから、アイツは死んだんだよ。解るか新米？アイツはお前が殺したのも同然だ。お前らが温い兵士ゴツコなんぞで満足し、更なる高みを目指さなかった結果だ。」

その声はとても低く、とても冷静で、とても大きな憂いに満ちていた。大切な娘だけではなく、古くからの戦友も同時に失ったのだ。彼としても今のこの状況は、死んでしまいたいほど辛いはず。だがしかし、その心中では、悲しみや憂いとは違う、自嘲に似た思いが渦巻いていたのである。

髪を掴んでいた手を離し、彼はスツと立ち上がった。不意に、クレイの顔が何の抵抗もなしにそのまま床に落下する。ゴサツという鈍い嫌な音が、そこにいる全員の耳に届いただろう。

「おいミア、こいつの手当てをしてやれ。ザイルとギーハは、この部屋の兵士どもの亡骸を、後で運びやすいようにまとめとけよ。全てが終わった後、みんなを連れて帰るためにな。あ、それと…チュリアだけは慎重に扱ってくれ。」

振り返る事も無く、視線はクレイから外さぬまま、ルキアは3人に命令した。そして更に、

「ミアすまん。お前の大事なダーリンをこんなにしちまって。」

と、少し苦笑いを交えながら、そう続けたのだ。その時、ルキアの中に先ほどまでの怒りは無くなっていると、その場の全員が思った。だから三人は大人しくそれに従う。

自分はチュリアの父親でもあり、そして部隊全員の命を預かる大隊長でもある。チュリアやガーランドを殺してしまったのは、他の誰でもなく上司である自分の失態。それを悔やみきれずに、他人に強くあたってしまったのだ。悪く言えば、ただの八つ当たりである。

先ほどまでいた部屋で一つの石像が気になり、彼は躍起にならずとそれを動かそうとしていた。だが、なかなか思い通りに事が運ばずに時間だけが過ぎていく。そこで急に停電になり、奈落の住人が襲ってきた。ルキアの活躍でなんとかそれを倒したが、その時になって始めて、自分自身の浅はかさに気がついたのだ。

自分は目の前のものに執着しすぎて、他の部隊を手薄にしている。もしかすると、ガーランド達も奈落と戦っているのかもしれない。そう思い、慌てて彼はミアとザイルを送る。だが、もうその時には全ては遅かったのだと、数分後にミアとザイルと一緒に帰ってきた2人の兵士を見て痛感したのだった。

そして更に彼は、クレイとギーハから隊長と娘の事を報告され、居ても立ってもいられなくなり、我を忘れ一目散に駆け出した。途

中ガールランドの亡骸を発見するも、それには目もくれず、一気にこの部屋まで駆けてきたのだ。全ては、たった一人の愛娘であるチュリアの亡骸を確認する為に。

目の前で横たわる娘の亡骸を見て、自分の温い考えが招いた結果なのだと悔やんだ。そして、チュリアと一緒にいたはずのクレイに全てに怒りをぶつけ、挙句には2人を失ったのもクレイのせいになようとしたのだ。部隊をまとめる立場としては、最大の暴言である。その為に、心中では自嘲に似た思いが芽生え、醜悪で卑怯な己に気がついて一気に熱を冷ましたのだった。

ここに居る全員が、その事に気がついているだろう。でも、ルキアは優秀な上司に違いはない。愛娘を失ったショックを考えると、誰も彼の行動を批判する事はできずに、大人しく命令に従った。

「それにしてもギギよ、少しおかしいとは思わないか？」

「え？何がおかしいのですか？」

ギギは自分だけ仕事を与えられなかったので、仕方なくギーハたちの手伝いをしていた。急に声をかけられ、驚いたのか、ビクツと体を震わせつつルキアに聞き返す。

「あのな、こんな貧弱な魔銃一人で、どうやってこの奈落を倒せたのかと思ってよ。」

ルキアの考えはまさに核心を付こうとしている。クレイにとっては一番都合の悪い事実を、彼は導き出そうとしているのだ。

第四十三話へ続く…

「43. 天使の力・罪人の力」(前書き)

評価やコメントヨロシクお願いしますW

「43. 天使の力・罪人の力」

ルキアは少し考えた後、一つの答えにたどり着く。それは、「自分で考えるよりも、直接本人に聞くほうが早いと!」という、意外と安易な答えだった。考えるよりも先に、体が動くタイプの、最も彼らしい回答ではある。

そしてルキアは、クレイの傍に座るミアに、優しい口調で話しかける。

「おいミア、スマンがそいつの回復を急いでくれるかあ。ちょっと、聞きたいことがあってな。ミア天使様のお力で何とかしてくれや。」

そう言われても、ミアは喋る事もしないで一つ頷くだけ。でも決して、怒ってそういう素っ気無い態度をとっている訳ではない。回復を施す為に言葉を紡ぎ、話すことができないだけなのだ。

その事はルキアも解っていたので、それ以上は何も言わない。只でさえ、愛するクレイをここまで痛めつけられ、彼女は虫の居所はすこぶる悪い。自分の無駄な言葉で、更にミアがへそを曲げてしまっっては、さすがの大隊長ルキアでさえも手に負えなくなってしまうのだった。

ミアにしてみれば、ルー隊長に急かされなくても、自分は充分急いでいると思っていた。鼻や口からダラダラと血を流し、ボロボロになったクレイを見たくは無い。その一心で、少しでも早く治してあげたいと心の底から願い、言葉を紡ぐ速さを上げている。それはクレイの為であって、自分の為でもあるのだから。

数秒後、ついに回復の準備は整った。ミアはクレイの腫れ上がった顔にそっと手をかざす。そして今まで紡いできた言葉達を、一つの言葉にまとめ力強くソレを発した。

「ウィキアーデ♪」

癒しをもたらす神聖な言葉が部屋に響いた。

たちまちクレイの凸凹だった顔が、元通りに復元されていく。出血も収まった事を確認し、彼女はもう一度同じ作業を繰り返す。そして、今度は腹部に堕天使の力を施したのだ。

見た目では全く分からなかったが、クレイの体内では折れていた肋骨や、破裂寸前だった内臓器官が元の正常な状態に戻っていく。ルキアがあと数回蹴りをくわえていれば、たぶんクレイは天使の力ではどうしようもない状態になっていたのかもしれない。

「う…うう…。」

意識を取り戻したのだろう、クレイが低く唸る。その事実に向って先に反応を見せたのは、ミアだったという事は言うまでもない。

「クレイちゃん！クレイちゃん！」

そう叫びつつ、クレイの体にしっかりと抱きついた。そうする事で彼女は、心の底からの嬉しさを表現したのだ。その姿を見ていたルキアは、クレイを叩き起こし直ぐにでも話を聞きたい気持ちを堪え、二人をそっと見守っている。それはルキアだけではなく、その場にいた全員が同じような状況だった。皆が2人に視線を送り、二

人の世界を邪魔しないように温かく見守っていた。

「う…ぐうう…」

ミアにきつく抱きしめられ、クレイはたぶん息苦しくなったのだろう。一気に目を開け、自分にしがみ付くミアを見た。

「ミア…たのむ…苦しい…。」

言葉も途切れ途切れで、クレイが言う。その声が更にミアを喜ばせ、自分に追い討ちがかかる結果になるとまでは考えてはいないようだった。

「クレイちゃん♪ミア、本当に心配だったんだからっ！」

そう言ってミアは、しがみ付く腕に更なる力を込め、クレイの腹部にどんどん食い込ませていく。今の彼女に、「加減」と言う言葉は無いようだ。グイグイ締め付けられ、クレイの顔が徐々に紅く染まっていく。さすがにこのままではやばいと判断したルキアが、そっとミアに話しかけた。

「ミア、そろそろクレイと話たいんだが、いいかな？それにそのままだと、クレイまた倒れちゃうぞ…。」

そう声をかけられ、ミアは急に腕を解きルキアを見た。その顔は確実に怒っている。それを見てルキアは「しまった。」と後悔したのだが、もう遅かったようだ。ミアはルキアを睨みつけながら言った。

「ルー隊長！今度私のクレイちゃんにこんな事したら、もう絶対

に許さないから！分かった？」

「あ…あぁ…肝に命じておくよ…。」

ミアの気迫に押され、ルキアはたじたじになりながら答える。どうやらこれが、この部隊の本来の姿のようだった。このルキア部隊を裏で仕切っているのは、紛れも無く最年少のミアなのだろう。

「返事はハイでしょ！」

「は…はい…。」

まるでルキアは、母親に叱られる子供のように身を縮めていた。その姿を見て周りの外野は必死に笑いを堪えていることに、彼は気がついていないようだ。

「よろしい。」

そう言いながら頷き、ミアはその場をルキアに譲った。ルキアは咳払い一つして、調子を整えクレイの横に膝を落とし軽くしゃがむ。その姿を確認したクレイは、驚いてすぐに上体を起こそうとしたのだが、ルキアがそれを軽く制した。

「いや、そのままでもいい。さっきは悪かったクレイ。上司として恥ずかしい行動を取ってしまった。深く謝る。」

「いいえ、オレの方こそ悪いんです。知らなかったとはいえ、本当にすみませんでした。」

「そうか。…とりあえず、この話はもういいんだ。実はお前に聞

きたいことがあってな。」

そう切り出され、クレイの心臓は跳ね上がる。ルキアが今のような感じで、前置きを置いてから何かを聞く時は、大抵自分に非がある質問なのだと彼は分かっていた。一体何を聞かれるのだろうか、内心ドキドキの状態でルキアの次の言葉を待つ。一方、ルキアは一呼吸置いた後、また話すのを再開した。

「あのな、オレは気になったんだ。お前は、本当にその魔銃の力だけで、あの奈落を倒したのか？まさか戦闘能力の無いチュリアを、前線に立たせ戦わせてはいないだろう？」

「え…えと…。」

ルキアの言葉がクレイの心臓を突き刺し、彼は止めを刺された気分だった。そう聞かれるとは思ってはいたが、それに対しての答えを用意するほどの時間が無かったのである。彼は、動揺する心を隠そうと必死になった。でも、隠そうと思えば思う程、明るみに出してしまうのだ。

「お前の報告はこうだった。奈落を倒した後、一瞬の隙をつかれてチュリアが刺されたと。そう聞いて俺はチュリアの事だけを考えてしまった。だけど、どう考えてもおかしいんだ。オレでも奈落を倒すのに一人では厳しいのに、お前なんぞが一人で倒せるもんなのかね。」

「…。」

クレイは何も答えられぬまま、だんまりを決め込んでしまう。それがかえって、彼の状況を悪い方向へと追いやって行った。

「まあ、自分で答えられないならそれでもいいさ。悪いが今すぐ答えが知りたいのでな。ギギの力を使わせてもらおうぞ。」

そうルキアに言われ、クレイはその場で凍りついた。何故ならギギは読心術の使い手なのだ。「愚かなる罪人^{ジョーカー}」であるギギだけが使えるその術の前では、クレイが素直に答えようと、頑なに沈黙を決め込もうと全く関係は無いのである。確実に全てが、アリシアとの時間がばれてしまう。そう思い彼は、思い切って口を開いた。

第四十四話へ続く…

「44. 真実」(前書き)

評価やコメントよろしく願います W

「44・真実」

「わかりました、正直に言います。実は、オレ一人で倒したわけはありません。もちろん、チュリアさんが前線に出て戦ったわけでもないです。魔剣が：一緒に戦ってくれました。」

窮地に追い込まれたクレイは、全てを正直に語る決心をし、そう話し始めた。その言葉にルキアは、苦笑いを交えつつ答える。

「フンッ！ やっぱりそうか。この奈落を突き刺した痕は、正に魔剣の切り口だろうな。そんな事は始めから分かっていたよ。」

そう言われ、クレイは驚く。そう、ルキアは奈落の亡骸を、その傷口を見て全てを知っていた上で自分に聞いていたのだ。

もしかすると、自分が発言する状況を作るために、読心の能力をほのめかしただけで、始めから使う気など無かったのかもしれない。自分の口から真実を聞きたくて、たとえ己に非のある話でも、的確に報告する事が大事なのだと、ルキアは身をもって自分に教えたかったのだろう。と、クレイはそう直感した。

ルキアは、奈落に残ったその傷口を最初に見た時、ある人物を思い出していた。その昔、一緒に戦場を駆けた一人の魔剣。その魔剣が放つ斬撃の痕に似ていると感じていたのだ。そして、その男の名は確かギルディアだったな、と彼は思い出していた。

「その魔剣はもしかして女か？ 普通の人間の姿だったのか？」

「え？…あ…はい。人間の姿でした。」

「そうか、奈落だけではなく、完成形までいやがるのか。」

この時になってルキアは、初めてその事実を知ったのだ。すべてはガーランドが報告を怠ったせいなのだが、ルキアはその事すらも知るはずが無い。自分達の部隊の中で、クレイが始めて魔剣の完成形に遭遇したのだと、そう思っているはずだ。

「そいつは一人だったのか？完成形は一人なのか？」

「はい。あ、いや：一人でしたが、もう一人いると、そう言っていました。」

「なんだって！アイツが2人も！！」

クレイの話を聞き、急に声を上げたのはルキアではなく、ギーハだった。

彼はアリシアの強さを充分に知っている。知っているが故に、魔剣が2人いる事に恐怖し、無意識に声を張り上げてしまったのだ。

「ん？なんだギーハ、お前も魔剣を知っているのか？」

「は：はい、知っています。隊長の事等色々あったので、事後報告になりますか：。」

思わず声を出してしまい、挙句ルキアに突っ込まれ、嘘についても意味がないと思い彼は隠さずにそう言った。そしてそのまま、初めてこの部屋で魔剣に遭遇した時の事を、事細かに説明した。そしてその会話に便乗する形で、クレイが停電中に加勢してくれた魔剣

について説明したのだった。

「そうか、なるほどな。…それでその後、お前は魔剣をどうしたんだ？戦ったのか？逃げたのか？」

二人の話を聞き、全てを理解した上で、ルキアはクレイにそう聞く。

「戦っても、逃げてもしません。お互いに情報を交換して、そしてそのまま分されました。」

クレイは包み隠さずそう語る。ギギの力がある以上、もはや嘘をついても意味が無いのだ。現に彼は、この後のルキアの言葉を聞いて正直に答えてよかったと実感する。

「おい、ギギどうだ。今の発言は、真実か？」

「はい、そのようですよ。」

ルキアとギギが会話を交わす。

クレイは驚き、直ぐにギギへと視線を移した。そこには滑稽な格好をした罪人がいる。両手を軽く握り、それを両目に当てていた。それはまるで双眼鏡を覗いているような感じである。それこそが、読心のポーズに他ならないのだとクレイは思った。「もしも今、嘘をついていたら…。」そう思うと、悪寒が走る。

「魔剣アリシアを、逃がしたって事だな？」

「はい、そうなります。」

「ちょっと待った。何を言っているんだよルキアさん。アリシアって言えば10年前に両親を殺し無に還った、あの魔剣だろ？素が無いのに、レプリカは作れないんだ。アイツはアリシアではないと思うが？」

不意にギーハが口を挟む。その意見を聞き、珍しくミアもギーハの意見に賛同し、強く頷いていた。その隣で亡骸を運んでいたザイルも、ルキアの方に顔を向け頷いているように見えた。一行を軽く見渡し、ルキアは笑いを堪えながら言う。

「なんだお前ら、あんな絵空事の昔話を、本気で信じているのか？」

『え？？』

ルキア以外の全員の頭の中に、疑問符が浮かんだに違いない。一瞬の沈黙が生まれ、その後すぐにルキアの大きな笑い声が部屋中に響き渡った。

「がぁぁぁはっはっは。お前ら馬鹿じゃねえのか！確かに10年前、裏切り者ギルディアは、娘のアリシアに刺され死んだって話は有名だな。だけど、その時に、その場にいた俺たちの同志は皆息絶えたんだぞ。その後、どうなったかなんて定かじゃないだろう？」

「ルキアさんは、その場に居なかったのか？」

ギーハが聞く。彼の頭は混乱し切っていた。今まで信じていた話を、ルキアは軽く否定するのだ。彼が何を言いたいのか、それはギーハだけではなく、その場の全員が深く考え込んでいたに違いない。

「オレか？オレはな、ギルディアとは女を奪い合う程仲が良くてな、そのせいでギルディア討伐隊から外されちまったのさ。お前らだって、あの頃はまだヒヨッコで、あの作戦には参加して無いだろう。お陰で、今こうして生きていられるんだがな。」

『！！』

皆は更に驚き戸惑う。普段のルキアは、自分の昔話など一切話す事など皆無だ。その人物が、今は面白そうに語っている。それに、幾多の修羅場を経験し、優秀な戦歴を収め、今では大隊長の座にくルキアである。その彼がああ作戦に参加していなかったなど想像もしていなかった。無事帰還した英雄なのだと、そう思っていたのだ。真実を目の当たりにして、彼らは驚かずにはいられない。

そんな彼らを尻目に、ルキアは更に話を続ける。

「あの森は、今は誰も立ち入ることができないように、怖い噂が流れているだろう？」

「森の中央にそびえる魔剣ギルディアの亡骸が、森に入る者を怨念の力で刺し殺してしまふ…。現に何人かがあの森に入り、そのまま帰ってこなかった。別名『還らずの森』とも呼ばれる、死の森の噂。だろう？」

「そうだ、だが…。これは上層部だけの機密事項なのだが、隠し事はオレの性分じゃないしな。これ以上隠していてもしょうがない。あのな、本当はあの森に、アイツの亡骸なんて存在していないんだよ。」

「なんだって！！！一体どういう事だよ！？」

第四十五話へ続く…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5109e/>

魔剣伝～アリシア～

2010年10月11日20時26分発行